成人期初期の未婚女性における母娘関係
―青年期後期との比較を通して―

Mother-Daughter Relationships of Unmarried Individuals in Early Adulthood : Through a Comparison with Late Adolescence

2016 年

聖徳大学大学院

児童学研究科児童学専攻博士後期課程

1000－130102　藤原あやの

論文目次

第 1 章　成人期初期の未婚女性における母娘関係についての研究の意義

第 1 節　成人期初期の未婚女性の現状　・・・・・1

第 2 節　母と娘の関係

第 3 節　成人期初期の未婚女性における母娘関係に関する研究の問題点

1. 青年期の親子関係からみる母と娘の関係
2. 成人期初期の未婚女性における母娘関係の研究
3. 成人期初期の未婚女性の心理的健康
4. 成人期初期の未婚女性の親密さと葛藤

第 4 節　本論文の目的

第 5 節　本論文の構成

第 2 章　成人期初期の未婚女性の母娘関係 ＜研究 1＞

第 1 節　項目の収集〈調査 1〉　・・・・・20

1. 目 的
2. 方 法
3. 結 果

第 2 節　予備調査〈調査 2〉

1. 目 的
2. 方 法
3. 結 果

第 3 節　本調査〈調査 3〉

1. 目 的
2. 方 法
3. 結 果

第 4 節　考　察

1. 青年期後期から成人期初期の母娘関係尺度の因子構造の検討
2. ライフステージによる母娘関係の発達的変化
3. 学歴,就労形態の違いによる母娘関係
4. 成人期初期において母との同居が娘にもたらすものの功罪
5. 本研究の問題点と今後の課題

第 3 章　成人期初期の未婚女性の母娘関係と心理的健康 ＜研究 2＞

第 1 節　心理的 well-being 尺度について　・・・・・51

第 2 節　心理的健康との関連〈調査 1〉
1.　目 的
2.　方 法
3.　結 果
第 3 節　考　察
1. 心理的健康の発達的変化
2. 母娘関係が心理的健康に及ぼす影響
3. 本研究の問題と今後の課題

第 4 章　親子の対立・葛藤 ＜研究 3＞
第 1 節　項目の収集〈調査 1〉　・・・・・70
1.　目 的
2.　方 法
3.　結 果
第 2 節　予備調査〈調査 2〉
1.　目 的
2.　方 法
3.　結 果
第 3 節　本調査〈調査 3〉
1.　目 的
2.　方 法
3.　結 果
第 4 節　考　察
1.　親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の因子構造の検討
2.　信頼性・妥当性の検討
3.　親子の対立・葛藤における青年の反応の性差, 対象差の検討
4.　精神的自立, 自尊感情に及ぼす影響
5.　本研究の問題点と今後の課題

第 5 章　親子関係における未解決の問題と関係の良好さ ＜研究 4＞
第 1 節　未解決の問題〈調査 1〉　・・・・・98
1.　目 的
2.　方 法
3.　結 果
第 2 節　親子関係における未解決の問題と関係の良好さ〈調査 2〉
1.　目 的

2.　方 法
3.　結 果
第 3 節　考　察
1.　親子関係における未解決の問題と良好さについて
2.　本研究の問題点と今後の課題

第 6 章　成人期初期の未婚女性における母娘関係の親密さと葛藤 ＜研究 5＞
第 1 節　成人期初期の母娘関係〈分析 1〉　・・・・・110
1.　目 的
2.　方 法
3.　結 果
第 2 節　母娘関係における未解決の問題〈分析 2〉
1.　目 的
2.　方 法
3.　結 果
第 3 節　支配的な母に対する娘の葛藤〈分析 3〉
1.　目 的
2.　方 法
3.　結 果
第 4 節　考　察
1.　成人期初期の母娘関係の特徴と青年期後期からの変容について
2.　成育史からみた母娘関係
3.　母娘関係における未解決の問題
4.　支配的な母に対する娘の葛藤
5.　本研究の問題点と今後の課題

第 7 章　総合考察
第 1 節　成人期初期の未婚女性における母娘関係　・・・・・157
1.　成人期初期の未婚女性における母娘関係の特徴
2.　成人期初期の未婚女性の母娘関係と心理的健康
3.　親子の対立・葛藤
4.　親子関係における未解決の問題と関係の良好さ
5.　成人期初期の未婚女性における母娘関係の親密さと葛藤
第 2 節　本研究の結論
第 3 節　本研究の問題と今後の課題

本論文を構成する研究の発表状況
引用文献
資料

謝辞

第 1 章　成人期初期の未婚女性における母娘関係についての研究の意義

第 1 節　成人期初期の未婚女性の現状

わが国では,近年,女性の高学歴化に伴い,晩婚・非婚化が進んでいる。また,未婚者の親との同居率は年々増加傾向にあり,国立社会保障・人口問題研究所(2012)によれば,18 歳から34歳を対象とした調査で,親と同居している割合は,男性は70%前後,女性は75%前後で高止まりをしている（Table 1-1-1)。

かつては,学卒後も自立できるだけの経済力がありながらあえて親元にとどまり,豊かな生活を享受していた青年を「パラサイト・シングル」(山田,1999）と言い,揶揄していたが,今や影を潜め,近年では,正規雇用の減少に伴って低収入ゆえに親と同居せざる得ない若者が増加している（宮本,2002)。若者が正規職である割合は年々減少し,派遣・嘱託,パート・アルバイト,無職・家事の場合に,より高い同居率の傾向がみられる (Table 1-1-1)。

一方,初婚年齢も,年々上昇し,平成 23 年度の統計（厚生労働省）によると,男性 30.7 歳,女性 29.0 歳となっている。かつては,女性にとって結婚は人生の正攻法として,適齢期と言われた 20 代前半に皆一斉に結婚していたものだったが,もはや,一昔前の「売れ残り」,「ハイミス」という言葉なども死語となり,今や,結婚は人生の選択肢のひとつとなっている。しかしながら,現代の未婚女性が結婚を否定しているわけではなく,未婚でいる理由として,「適当な相手にめぐり会えない」を挙げ,結婚の意思にしても「ある程度の年齢までには結婚するつもり」と半数以上が考えている(国立社会保障・人口問題研究所, 2012)。だが,他方で,女性が未婚でいる利点として,「行動や生き方が自由」,「金銭的に裕福」,「家族を養う責任がなく気楽」,「友人などとの広い人間関係が保ちやすい」と考えており（Fig. 1-1-2) ,結婚に対する積極さがみられない面もうかがえる。そして,独身生活に利点があると考えている未婚者は男女とも高い割合を維持しており,男性は 81.0%,女性は 87.6%を占めている(国立社会保障・人口問題研究所, 2012)。

また,わが国では,親と別居する理由がない限り別居しないという日本独特のパターン（山田,1999）から,結婚や大学進学・就職で地方から上京しての一人暮らしなどでしか若者が親元を離れることはほとんどない。一方,親側も,子どもに苦労させまいと特に娘に対

して長期間サポートする傾向があり（山田,1999）,いつまでも親離れ・子離れができないでいる。

宮本（2004)は,親と同居する未婚女性(25～39 歳)が,同居について「親と一緒だから寂しくなくてよい」という意見に 70%以上が賛同し,一方で,「親に干渉されてわずらわしい」という意見に 50%以上が賛同しており,しかもいずれにおいても女性が男性を上回っていることを報告している。

同じアジア圏の韓国でも,わが国と同様に,20 代,30 代のシングル女性の非婚化・晩婚化が進んでおり,「結婚適齢期」の崩壊と生き方の個人化が進行しつつある（福島,2008)。一方で,尹(Yoon)(2010)は,親が支持する「娘の自立は結婚」という規範が,結婚するまでは親元に居て欲しいという考えと結びつき,親元を離れて暮らそうとする娘の希望との間で葛藤を生じさせていることを報告している。

離家について,宮本(2004)は,初就職,経済的自立と並んで,成人期への移行プロセスにおける重要なイベントであり,自立への最初の象徴的なステップであると述べているが,学卒後社会人になっても親との同居を続ける未婚女性は,学卒後社会人になって親元を離れて生活している未婚女性と比較して,単に経済的余裕･家事負担のない快適さなどの道具的依存が強いだけでなく,心理的にも青年期を引きずり,親に依存していると推測され,親との同・別居により両者の親子関係に違いがあるのではないかと考える。

Table1-1-1　就業状況別にみた親と同居する未婚者の割合(18～34歳)

	就業の状況	第８回 (1982年)	第９回 (1987年)	第10回 (1992年)	第11回 (1997年)	第12回 (2002年)	第13回 (2005年)	第14回 (2010年)
男性	総　数(18～34歳)	69.60%	70.4	62.8	65.5	69.5	70.3	69.7
	正規職	71.10%	69.8	67.4	64.8	72.3	66.9	66.7
	自営・家族従業等	88.7	88.5	85.1	81.8	79.1	81.4	81.7
	派遣・嘱託	－	－	－	－	67.1	75.3	73.3
	ﾊﾟｰﾄ･ｱﾙﾊﾞｲﾄ	64.6	77.9	71.6	75.3	80.1	80.0	83.7
	無職・家事	82.8	87.6	90.8	86.9	85.0	84.6	88.1
	学生	56.4	63.6	46.5	53.3	50.9	63.9	60.0
	(集計客体数)	(2732)	(3299)	(4215)	(3982)	(3897)	(3139)	(3667)
女性	総　数(18～34歳)	82.00%	78.0	76.7	74.5	76.4	76.4	77.2
	正規職	81.70%	80.4	77.4	78.5	77.9	79.5	76.3
	自営・家族従業等	86.2	78.8	82.5	78.6	73.3	79.6	80.6
	派遣・嘱託	－	－	－	－	84.6	83.1	86.2
	ﾊﾟｰﾄ･ｱﾙﾊﾞｲﾄ	87.2	84.2	85.4	77.1	83.0	87.7	85.6
	無職・家事	88.7	90.3	93.3	86.4	85.2	89.4	86.9
	学生	78.0	64.9	68.6	58.9	63.9	58.8	67.8
	(集計客体数)	(2110)	(2605)	(3647)	(3612)	(3494)	(3064)	(3406)

第14回出生動向基本調査（2010）より

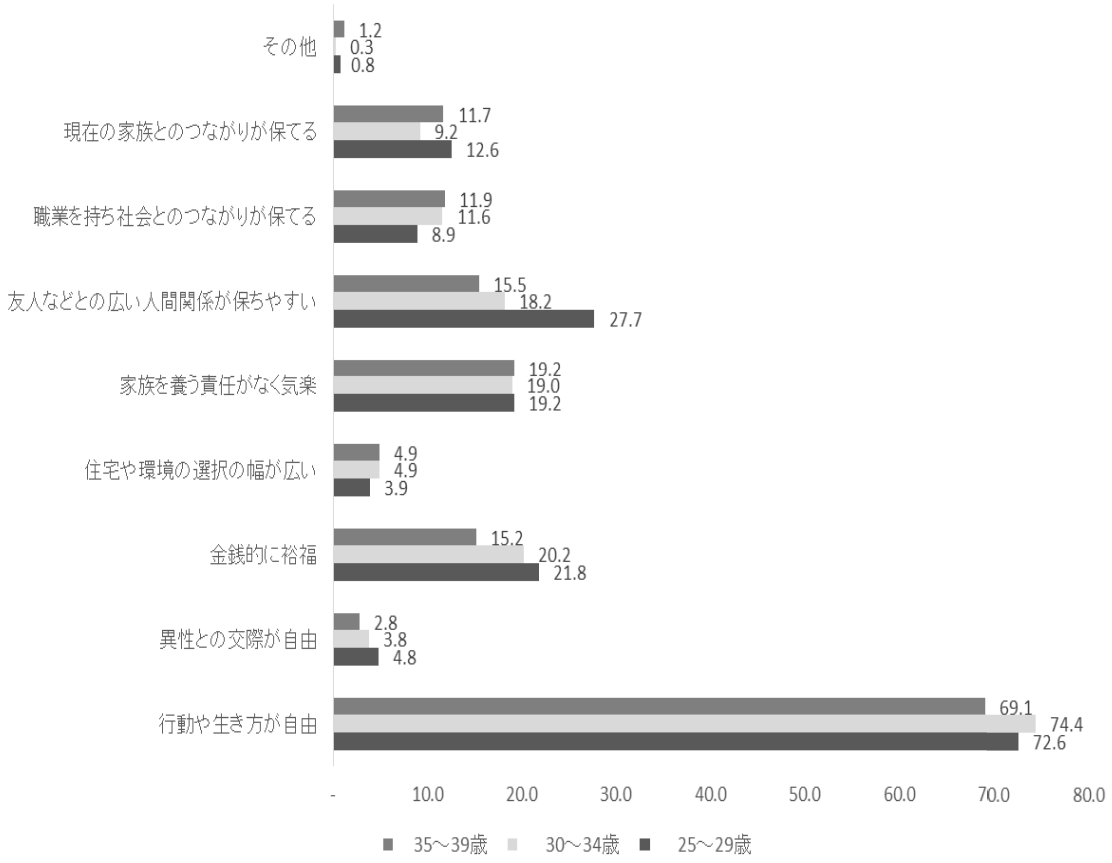

Fig. 1-1-1　女性が未婚でいる利点（各項目を選択した割合　単位：%）

（第 14 回出生動向基本調査（2010）より作成）

第 2 節　母と娘の関係

わが国でかつて家制度が存在した時代，特に長男が，相続や親の老後の扶養の責任などを負っていたときは男児の価値が高かったが，家制度が崩壊し，長男の価値そのものが低下した現在では，男児よりも女児が選好されている。

国立社会保障・人口問題研究所（2012）によれば，希望する子ども数における男女の比率は，従来未婚男女ともに男の子をより多く望む傾向にあったが，しだいに女の子を望む割合が増加してきており，女性では希望子ども数における女の子の希望が半数を超えている。つまり，女児に，親の老後の世話，話し相手，家事や身辺援助など新たな実用的な価値が浮上しているのである（柏木，2001）。また，高木・柏木（2000）は，母にとって，息子より娘のほう

が理解者であり,娘に世話期待をしていることを明らかにし,宮本（2004）も,親が娘に介護を期待していることを報告している。

母と娘の場合,性の類似性がより大きな親密さと関連しており(Fingerman,2001; Pillemer & Suitor,2002；Suitor & Pillemer,2000；Suitor, Pillemer & Sechrist, 2006),母と子との心理的距離において,母は,息子を男性である対立者として体験し,娘を自分自身によく似ていて自分と連続していると体験する傾向がある（Chodorow,1978)。そして,母と娘は,父と息子よりも頻繁に接触するが（Lawton,Silverstein & Bengtson ,1994）,そのような母と娘の密接な関係は,マザコン男と中傷される母と息子の親密な関係よりも社会的にさほど問題視されない（浴野,2002;矢幡,2000）という一面がある。

仲の良い母と娘が一卵性母娘（信田,1997）と呼ばれるように,母と娘は,情緒的にも経済的にも互恵的な関係を結びやすく,親密にすることでお互いに得るものがある支えあいの関係にある。信田(1997)は,母も娘も楽しければ一卵性母娘は非常に健康的な現象であり,現代社会に生きる女たちが快適に過ごすためにあみだした知恵だと述べている。

しかし,一方で, 母娘関係は,はるかに同質性が強いだけに,母が娘の隅々まで干渉し,支配することがよりたやすく実現してしまい（矢幡,2000）,葛藤を抱える関係であることも多く（信田,2008,2011a,2011b;香山,2014）,母と娘の関係には親密さのみならず葛藤も存在する（Bojczyk,Lehan,McWey,Melson & Kaufman,2011；Fingerman,Hay & Birditt, 2004；Pillemer & Suitor,2002；Van Gaalen & Dykstra,2006）。例えば, 梶山（1992）は,摂食障害である子の母子関係の特徴として,母の過干渉,母への依存,母子間の信頼関係の欠如を指摘している。

成人期初期ともなると,通常であれば母と娘は程よい距離感で相互的な関係になっているはずが,成人になっても母に支配され,追い詰められる娘が数多く臨床の現場から報告されている（Bassoff,1988,1991;信田,2008,2011b;岡田,2014;斎藤,2001,2004,2007)。

現代の少子化によって家庭における子の数が減少するに伴い,ますます子は親との接触の機会が増えることとなり,親子の過度な相互依存的な関係が子の発達を阻害する可能性があることが考えられる。

信田・上野（2008）は,少子化・晩婚化・非婚化・女性の高学歴化等の時代の変化に伴う要因が現代の母娘関係に影響していると指摘しており,現代の母娘関係の研究の重要性が増していると考えられる。しかしながら,わが国において,心理学領域における未婚の社会人女性（20 歳台から 40 歳未満）について母娘関係に言及した実証的な研究はさほど多

くはない（北村,2008;北村・無藤,2001;水本・山根,2010,2011;高木・柏木,2000)。

第3節　成人期初期の未婚女性における母娘関係に関する研究の問題点

1.青年期の親子関係からみる母と娘の関係

わが国の親子関係の研究は,そのほとんどが中学生から大学生までの青年期を対象にしており（小高,1998；久保田,1993；落合・佐藤，1996；小沢・湯沢，1989；渡邊，1994），成人期の親子関係の研究はわずかなものを除いてほとんどみあたらない。

青年期の母娘関係の研究において,高木・柏木（2000）は,大学生の娘と息子を持つ母は,娘とは息子以上に特別で親密な関係を持っており,娘に対し「自分の理解者」,「一心同体」であるという感情や「将来の世話期待」を強く抱いていることを明らかにしている。渡邊(1994)は,中・高・大学生の男女を対象に,母-娘の絆・依存が,母-息子,父-娘,父-息子の依存・絆より格別に強いことを示唆している。小沢・湯沢（1989）は,心理的離乳プロセスにおける男女差で,男性より女性のほうが「親への甘え」が強いこと,女性より男性のほうが「親から仲間への離脱」が強いことを示している。また,加藤・高木(1980)は,中・高・大学生の男女を対象に,女子と男子における「親への依存」の意味の相違を示し,女子においては親への依存性は必ずしも独立への障害にはならないことを明らかにしている。

しかし,一方で,このような親密的・依存的な母と娘の関係が,わが国特有の傾向であるとは言えず,親子関係の日米比較をした研究（小野寺,1993）によれば,わが国の娘よりもアメリカの娘の方が「母との情緒的結びつき」が強いことを明らかにしている。また,母娘関係の発達的変化についての研究において,久保田（2009）は,中学生の娘と母,大学生の娘と母との組み合わせで,課題を実施し観察比較をした結果,課題がなされている間,中学生の娘と母の場合は,子どもが中心となって課題を進めていき,母は子どもを援助するという立場をとっていたが,大学生の娘と母との組み合わせでは,両者が対等な立場で課題を遂行していた。つまり,娘の発達に伴い,母の娘への関わり方が変化しているのを明らかにしている。そして,精神的自立の発達的変化について福島（1992）は,中学生から成人を対象とした研究で,男子では,まず,親から分離し,親と自分は異なる存在であることが意識され,そのうえで,自己の主体性や判断・責任性の確立がなされていき,親との自立した関係が再構

成されるが,女子では,親からの独立の意識が緩やかに上昇し,それと平行して親との信頼関係の確立がなされ,親との信頼関係を軸として,自己の確立にいたるとして発達的様相が男女で異なることを示唆している。

このように,親子関係の発達的様相に男女差があり,女子では他者との関係性,とりわけ母と娘の濃密で依存的な関係は青年期以降も維持され,発達過程に様々な影響を及ぼすと推測される。それゆえ,青年期以降,母と娘の関係がどのように展開されていくのかを明らかにする必要があると言えよう。

2. 成人期初期の未婚女性における母娘関係の研究

母娘関係における母と娘の結びつきは,人生のすべてのステージにわたって強いままであり（Chodorow,1978;渡辺,1997),多くの研究で,母と息子より母と娘のより強い愛情の結びつきとより大きな信頼を報告している（Pillemer & Suitor,2002 ; Suitor & Pillemer, 2000,2006）。

しかし,わが国における心理学領域の成人期初期の親子関係の研究は,大半の研究が,「子育て」に関するものに焦点化され（伊藤・小渕・駒崎,2002;柏木,2003;相良,2007）,成人期初期における未婚の娘と母との母娘関係の研究はほとんどみられないのが現状である。数少ない研究のうち,北村・無藤（2001）は,成人女性（27～34 歳）を対象に娘の適応状態に及ぼす母娘関係の影響を検証し,独身群においては,母との関係が親密であったり,母からサポートを多く受け取っていると感じていると,抑うつ傾向が低く,生活満足感が高いことを示唆している。また,北村（2008）は,成人女性（26～35 歳）を対象に過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応について検証し,娘が過去の愛着感情の想起が安定している場合は現在の母に対して親密的な感情を抱く傾向にあることを示し,独身女性においては,母に対する現在の親密的感情,過去の関係に関する記憶のいずれもが,娘の心理的適応にとって重要な役割を果たしていることを示唆している。永田・新美・松尾(2007)は,成人女性（23～35 歳）を対象に,「母と娘の絆」には年齢の影響がないこと,「相互支援」では 23 歳から 26 歳の早期初期成人期の娘にはまだ母の支援が必要なことなどを報告しており,母娘の絆が年齢に関係なく継続され,年齢の若い未婚女性ほど母の支援を必要としていることを示唆している。また,水本・山根（2010,2011）は,青年期から成人期への移行が延長するに伴い,“emerging adulthood”(Arnett,2000,2004,2007)と呼ばれる独立した発達段階が青年期と成人期の間に確立されつつあるとして,大学生女子を対象に青年期

から成人期への移行期における母娘関係を検討している。大学生女子と母のペアデータを用いた研究では（水本・山根,2010）,母娘関係を類型化し,これらをもとに母娘間距離には遠近といった量的特性だけではなく,その関係性において娘が自己統制感を持つことができているかどうかという質的特性があり,娘の自立や適応とかかわていることを示した。そして,大学生女子(18～24 歳)を対象にした研究では（水本・山根,2011）,「母親との信頼関係」と「母親からの心理的分離」から成る母娘関係における精神的自立尺度を作成し,それを元に,母との関係を類型化して,「母親との信頼関係」は適応と関連した親子関係の個人差を示す指標であり,「母親からの心理的分離」は発達的に変化する指標であることを示した。さらに,水本(2016)は,母への親密性が精神的自立に与える影響を検討し,３つの親密性（「母親への心づかい」,「母親への絶対的安心感」,「母親の価値観への捉われ」）が精神的自立に異なる影響を与えることを示唆している。山岸(2009)は,縦断的データと面接調査を用いて,青年期から成人期にかけての母親認知の変化を青年期までの良好性や問題性の観点と,成人期の認知の肯定性ー否定性の観点からパターンに分けその特徴やそこに関与している要因について検証し,成人期も女性の母親認知が母との過去の関係の影響を受ける一方,現在の発達的状況的要因の影響も受けることを示している。

近年,“Emerging adulthood”(Arnett,2000)の研究は,諸外国で多くみられるようになってきた（Buhl,2007;Shulman,Feldman,Blatt,Cohen＆Mahler,2005）。Arnett（2000）は,成人感の獲得は経済的自立と心理的側面（自分自身に対する責任を認め自立した決定をすること）を重要としたが,白井（1988）は,わが国の 20 歳代の男女を対象にした調査で,男性は年齢が上がるにつれて成人感が増加するが,女性では増加しないことを示唆している。

また,20 歳代後半の女性を対象にした調査（白井,2010)では,Arnett（2000）と同様に,心理的側面が重要であることは同様であったが,十分な大人になるという個人的な側面よりも,他者への配慮や感情の制御などといった共同的な側面が重要であることを報告している。この結果から,白井（2010）は,Hofstede（2001）が示唆するように,アメリカの個人主義の文化に対してわが国では関係的な側面が重視される文化的な影響が考えられることを指摘している。Rothbaum,Pott,Azuma,Miyake＆Weisz(2000)も,日本とアメリカにおける親密な関係性の発達は異なっており,日本は共生的な調和を成していき,アメリカは関係性に緊張を発生させながら成されていくことを報告している。

これらを考慮すると,白井（2010）が示唆するように,文化的な影響の違いから,Arnett（2000)の唱える emerging adulthood と呼ばれる独立した発達段階における若者の発達と,

わが国の若者の発達には差異があると思われる。

わが国における成人期初期の若者は,学卒後,労働市場に参入し,もはや青年期とはいえないが,かといって,親に依存をしている現状を考慮すると,成人としての役割や責任を負っているとは言い難い。近年の社会変動に伴い,発達上のライフイベントの指標としての,学卒,就職,経済的自立,離家,結婚というものが多様化し,青年がどの段階で成人に達したのかということをもはやはっきりと断言できるような段階は見えてこない。親は生き方の指針にはなりえなくなった（岩上,2013）という指摘があるように,親をモデルにして大人になるという生き方は崩れ,従来のライフコース論では語れない生き方を今の若者は模索せざる得ず,それに伴い親子関係のあり方も変容してきていると推測される。

成人期初期の親子関係は,親が子を育てる過程での前期親子関係や親が高齢になってからの後期親子関係でもなく,親子双方が自立し情緒的な交流を重ね深めあうような関係性が,本来ならば保たれるはずであろう。しかしながら,親が成人に達した子の世話をいまだに続け,重要なサポート源のひとつとして機能している（川浦・池田・伊藤・本田,1996）現状のもと,母と同居の未婚女性の母娘関係がいかなる変容をなしているのか検討が急がれるところである。

3. 成人期初期の未婚女性の心理的健康

わが国では,これまで主に臨床現場で,成人になっても母に支配され,追い詰められる娘が数多く報告されてきた（信田,2008：斎藤,2001,2004）が,一般成人において,母娘関係が娘の心理的健康にいかなる影響を及ぼすかについての実証的検討はほとんどなされておらず,検討の必要性があると思われる。

Onayli & Baker（2013）は,母娘関係が精神的健康(自尊感情,生活満足感)と密接な関連があることを指摘し,母との関係が娘の成人期でも重要であり続けることを示唆し,Barnett,Kibria,Baruch & Pleck(1991）は,成人の娘（25 歳～55 歳）を対象とした研究で,母との肯定的な関係は成人の未婚女性の抑うつの低さや主観的幸福感の高さと関連することを示している。また,Fingerman, Pitzer, Lefkowitz,Birditt & Mroczek(2008)は,成人の子（22 歳～49 歳）と両親を対象とした研究で,親子の関係性におけるアンビバレンスを報告する親子は,精神的健康が低いことを明らかにしている。

わが国の成人女性の研究における数少ない研究のうち,北村・無藤（2001）は,成人女性(27～34 歳)を対象に娘の適応状態に及ぼす母娘関係の影響を検証し,娘の結婚や出産によ

って母娘関係がどのような発達的移行を経るかを検討している。その結果,過去の愛着感情の想起が安定している場合は,現在の母に対して親密的な感情を抱く傾向にあることを示している。そして,独身女性の心理的適応にとって,過去の関係に関する記憶・現在の関係に対する感情のいずれもが,重要な役割を果たしていることを示唆している。さらに,北村（2008）は,成人女性（26～35 歳）を対象とした,過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応の研究で,独身女性においては,母に対する現在の親密的感情,過去の関係に関する記憶のいずれもが,娘の抑うつ傾向や自尊感情の高さに結びつくことを明らかにしている。そして, 母と同居している独身女性が日常的に多く接触があることで,母に対しより複雑な感情を抱くことが推測されることを示している。

これらの研究（北村・無藤,2001；北村,2008）では,対象者である成人女性を,独身群・無子既婚･有子既婚の 3 群に分けて成人女性における心理的適応について検討しているが,このように娘の結婚･出産の前後で母娘関係がどう変化するのかではなく,結婚というライフイベントに着目しつつも,まだ親の監督下にいる大学生時から,学業を終え社会人となり母との関係が互恵的なものに変化していく未婚の社会人,そして,結婚して子を持つことによって娘自身が母と同じ立場である母になるという,娘と母との関係が変化していくなかでの娘の心理的健康について検討する必要性があると考える。

4. 成人期初期の未婚女性の親密さと葛藤

(1) 成人期初期の母娘関係

多くの研究で,母と息子より,母と娘のより強い愛情の結びつきとより大きな信頼が報告されているが（Pillemer & Suitor,2002；Suitor & Pillemer,2000,2006）,成人期以降の親子関係は,親役割や子役割といった互いの役割関係が曖昧であるため,情緒的満足のために結びつく親子の繋がりがあらわれやすいことが示唆されており(中西,2008),従来の青年期を対象にした親子関係の研究(小高,1998;久保田,1993;落合・佐藤,1996;渡邊,1994)だけではなく,成人期以降の母と娘の関係性を明らかにする必要性があると思われる。

また,成人期初期になると母と娘は,親子という「タテ」の関係だけでなく,一人の大人同士としての「ヨコ」の関係が新たに構築される（中西,2008）ことが指摘されているが,成人期初期の娘は母との関係をどのようにとらえているのであろうか。そして,成人期初期の母娘関係は,青年期後期からどのように変容しているのであろうか。

そこで,量的研究では得られにくい母娘関係の特徴を質的研究によってさらに詳細に検

討する必要もあると考える。面接調査による成人期初期の未婚女性の語りから,母親認知についてさらに詳細に検証することで,成人期初期の母娘関係の親密さと葛藤が浮かび上がってくるのではないかと考える。また,山岸(2009)は,成人期の母親認知は生育過程での母との関係をどうとらえていたかが重要であることを指摘しており,未婚女性の語りを参考に生育史の観点から,特に親密な母娘関係である者と特に葛藤がある母娘関係の者をとりあげ,その両者の違いを検討する必要もあると考える。

(2) 青年期後期における親子の対立・葛藤の検討の必要性

わが国の母娘研究で親密さを取り上げた研究(水本,2016;高木・柏木,2000;渡邊,2004)はみられるが,親子の対立・葛藤を取り上げた研究については,愛着の視点から山岸の研究(2005,2006)があるものの,成人の研究はみあたらず,成人期の前段階である青年期後期における研究も少なく,実証的研究となるとほとんどなく,性差についての検討もなされていない。

青年期は,心理的離乳(西平,1990;落合,1995;落合・佐藤,1996)へと向かう時期であり,青年自身が今まで価値観や判断の基準であった親からの分離をめぐって,親子間で対立・葛藤を生じさせながら親子関係の再構築がなされていく。

そして,青年期後期では多くの場合,「親との対立」(小高,1998;小沢・湯沢,1989)や「反抗」(渡邊,1994)を経て自立を遂げていくが(福島,1992;渡邊, 1994),他方で,子離れできない母親の存在や親が子を抱え込む(落合・佐藤,1996)ことで,子の側が葛藤を強めることがある。通常であれば,青年期も後期になると,「一人の人間として親を認知」(小高,1998)し,「子が親から信頼・承認されている関係」(落合・佐藤, 1996)である相互的な関係を築いていくはずが,親子関係の歪みから,親から自由になれない事例が臨床の現場から報告されている(斉藤,1995,2004)。

また,親子関係の発達過程の変化(落合,1995;落合・佐藤,1996;Renk,Liljequist, Simpson & Phares,2005)に伴い,親子間の葛藤は青年期初期に最も多く,青年期後期に最も少なくなっているというが(Clark-Lempers,Lempers & Ho,1991; Laursen,Coy & Collins, 1998),青年期後期においても親子間の対立や不一致,葛藤がなくなるわけではなく,それらは青年にさまざまな形で影響を及ぼすことが考えられる。

心理的離乳に関する研究(小高,1998,2008;落合・佐藤,1996;小沢・湯沢,1989)では,青年期における自立と依存の相互作用的な側面がみられる。青年期後期では,親との相互的な関係を築きつつも,一方では,自立に向けた子側の親からの分離をめぐる親子間の葛藤が見

受けられる(井上,2002)。西平(1990)は,第二次心理的離乳における反抗は,盲目的な衝動に動かされるものではなく,自律的な価値観に従って批判する形を取り,抵抗に高められていくと指摘している。青年は,自分自身の生き方を追求するようになることで,自立を阻害するような親の言動に反発する（小高,1998；小沢・湯沢,1989）であろうし,また,親を一人の人間として捉える(小高,1998)ようになるにつれ,今まで理想化していた親イメージに幻滅し,親の欠点に対し非難をするであろう。

しかしながら,たとえ親子間に対立・葛藤があっても,青年の親への依存は依然として存在し(渡邊,1994),青年は自立と依存のアンビバレントな感情で揺れることとなる。例えば,渡邊(1994)は,親への絆・依存が強いほど青年は自己主張ができることを示唆している。また,青年期後期の親子間の葛藤や不一致に関する研究(平井,2000; 杉村・竹尾・山崎,2007;山崎・杉村・竹尾,2002)では,親子間の葛藤場面において青年が自己の欲求を主張・優先する傾向にあることを明らかにしている。その理由として,杉村他 (2007)は,青年は自己主張し親は否定するといったように双方が自分の欲求を主張するものの,その背景には,関係性が崩れることはないという青年の信念,つまり,許容の期待があることを示唆している。

これらの先行研究から明らかにされたように,青年期後期における親子間の対立・葛藤において,この時期に特有な青年の親に対する反応があると考えられる。そこで,青年期後期における親子間の対立・葛藤の場面での青年の親に対する反応の特徴を明らかにする実証的な検討が必要であると思われる。また,親子関係では,親子の性別による組み合わせで異なる知見が得られており(Renk et al.,2005;小高,2008;渡邊,1994),青年側の男女別,親側の父母別を組み合わせ,特に,親子間葛藤の先行研究では明らかにされていない性差についての検討が必要である。

そして, 親子の対立・葛藤を取り上げた研究がほとんどなされていないことを考慮すると,青年期後期での親子の対立・葛藤における青年の反応の特徴を明らかにしたうえで,それらと成人期初期の未婚女性の語る青年期後期における否定的な母親認知を比較し,類似性のある結果が得られているのかを検証することで研究の質を高める必要があるであろう。

(3) 母娘関係における未解決の問題と関係の良好さ

臨床の領域において母と娘の関係を扱った事例が多くみられるが,信田 (2008)の過干渉の母をもつ「墓守娘」等,多くは母が娘を支配するというものである(香山,2014;高木,2008)。

河野（1995）は,母娘関係の障害は母自身が深い精神的欠損感情を持っていて,娘を十分に満たしてやれないところからくることを指摘し,結果的に母は娘を拒否または無視する

という。そういう満たされない娘の母に対する愛情欲求がうかがえる臨床領域の研究として,大場・安藤・宮崎・河村・濱田・大野・龍田・苅部・近喰・吾郷・小牧・石川（2002）は,摂食障害の家族環境要因として,「母親に甘えられずさびしい」が最も発症に関与しているという結果を報告している。

概して母と娘の関係というのは,心理的距離をとりにくく,母は娘を自分の体の延長のように感じてしまい,自分と同じように感じているはずだと考え,娘がどのように感じるかに思いがいたらない（斎藤,1995）ゆえに,娘は母の言動に傷つき,いまだに娘自身の中で解決できずにいる未解決の問題を抱えていると思われる。

母と娘の対立・葛藤において,女子青年における母との葛藤などによる精神的受傷は多いにもかかわらず,それが母に対する悪い評価とは結びつきにくいとする見解(山田,1986)や,娘が母との接触や交渉が頻繁で緊密なため相互に傷つけあうことも多いが,信頼感や親密感も多く,親子関係の修復が比較的容易であるとする(山田,1988)報告がある反面,母の言動に対し,「母は,なぜあのようなことを言ったのか」,「母は,どうしてそのような行動をとったのか」等,いまだに納得できず,解決できずに問題を抱えたままの娘は,その未解決の問題をどのようにとらえているのであろうか。

これまでの研究で扱われてこなかった母娘間の積み残しの問題である未解決の問題について実証的に検討する必要があると考える。

現代青年の親子関係は穏やかである(小高,2008;Steinberg,2001;渡邊,1994)と言われ,一卵性親子(信田,1997)や友達のような親子(斎藤,2009)と呼ばれる仲の良い親子が見受けられるが，その一方で，児童虐待は年々増加の一途である（厚生労働省,2013)。

斎藤(1999)は，「児童虐待」といえるあからさまな虐待だけでなく，「親の期待で子どもを縛る」という「見えない虐待」があることを示唆している。小高（2006）は，「見えない虐待」を「親から心理的・精神的に傷つけられること」と表現し，子が親から心理的・精神的に傷つけられたということが，親の統制的な養育行動の経験と親の優しさの欠如した情緒的支持の低い養育行動の経験に関連することを指摘している。小高(2006)では,「親から心理的・精神的に傷つけられたこと」が，その後，時間の経過とともに青年の心理的・精神的な傷が薄れていったのか，それとも，今でも青年の心の中で解決できずに引きずったままなのかは触れられていない。しかしながら，親子間で対立・葛藤が起きたときに，青年が親から心理的・精神的に傷つけられ，青年が心の中で解決できずに引きずったままの問題に直面し親子関係が危機的状況になった事例や，青年が親子間の未解決の問題を引き

ずり成人になっても親子関係の問題で苦闘している事例等が，臨床の現場から多く報告されている（香山,2008;信田,2011b;岡田,2014;斎藤,2012;内田,2014)。

斎藤(2008)は，親子間に必ずしも暴力的虐待がなかった場合でも，ある種の感情が繰り返されることで，子どもの人生に深刻な影響がもたらされることを，今や疑う人はいないと指摘しており，親子間で対立・葛藤が起きたときに，青年が親から心理的・精神的に傷つけられ，今でも心の中で解決できずに引きずったままの問題を抱えている状況を看過できないと考える。

そこで，青年の親子の対立・葛藤における親子関係の認知に,青年が今でも心の中で解決できずに引きずったままの未解決の問題や親子関係の良好さ・非良好さによって，どのような違いがあるのかを検討することにより，現代青年の親子関係の認知についての側面を解明する必要があると考える。親子関係において，今でも心の中で解決できずに引きずったままの未解決の問題を抱えている者は，そうでない者と比べ親子の対立・葛藤における親子関係の認知に違いがあるのだろうか。また,親子関係の良好さの程度によって，青年の親子の対立・葛藤における親子関係の認知は異なっているのであろうか。さらに,親子関係が良好であるにもかかわらず,未解決の問題を抱えている者は，そうでない者と比べ親子の対立・葛藤における親子関係の認知に違いがあるのだろうか。 これらについての実証的な検証はまだ行われておらず,研究の必要性があると思われる。また，親子関係では，親子の性別による組み合わせで異なる知見が得られており(小高,2008;Renk et al,2005;渡邊,1994)，青年側の男女別，親側の父母別を組み合わせて検討する必要性もあると考える。

そしてこれらを検証することによって,成人期初期の未婚女性のうち未解決の問題を抱えている娘の未解決の問題に対する認知が,青年期後期からいかに変容しているのかを解明できると考える。

(4) 支配的な母に対する娘の葛藤

近年,臨床の現場から支配的な母に振り回される娘の姿を報告する事例(香山,2008,2014;信田,2008,2011a,2011b;斎藤,2008)が数多く見受けられる。娘にとって母は,身近な相談相手としてサポート源になると同時に,娘の生活や価値観に干渉してくる重い存在にもなる(信田 2008)。母との関係が親密であるがゆえに,母は娘により侵入的であり(Fingerman,1996),娘は母に呑みこまれそうであることを自覚せざる得ず,母の「あなたのため」という態度をもはや愛情としてだけでとらえられなくなり,母を「重い」と感じるのだと思われる(信田,2008,2011b)。信田(2008)は,カウンセリングにおける母娘問題のほ

とんどが娘側からの訴えであり,「母が重くてたまらない」と切実に感じている娘が,母から離れたい,でも母を捨てるのはしのびないという葛藤にさいなまれていることを指摘している。では,カウンセリングの場面に登場することのない一般の未婚女性は,支配的な母についてどのようにとらえているのであろうか。そこで,母が「重い」と感じるときの娘の母親認知と母への反応がどのようなものであるのかを検討することによって,支配的な母に対する成人の娘の葛藤を明らかにする必要性があると考える。

第 4 節　本論文の目的

本研究では,まず,未婚の社会人女性に着目し,青年期後期から成人期初期にかけてどのような母娘関係の展開がみられるのか,母との同･別居により母娘関係にいかなる違いがみられるのか,そして,母娘関係が未婚女性の精神的健康にいかに影響を及ぼしていくのかを比較検討することで,未婚の社会人女性の母娘関係の特徴をとらえたいと考える。具体的には,20 歳代から 40 歳未満の女性を対象とし,対象者を発達段階で青年期群・未婚群・子育て群の 3 群を設定し,これら 3 群で比較することで,母娘関係の特徴と母との同・別居を要因として,未婚の社会人女性の母娘関係を検討する。

これら 3 群の設定については,結婚というライフイベントに着目しつつも,結婚・出産の前後で母娘関係がどう変化するのかではなく,まだ親の監督下にいる大学生から,学業を終え社会人となり母との関係が互恵的なものに変化していく未婚の社会人,そして,結婚して子を持つことによって娘自身が母と同じ立場である母親になった時,娘と母との関係がどう変化していくのかを検討するために,大学生･未婚の社会人･既婚で子育て中の女性という組み合わせで対象者を設定した。青年期後期から成人期にかけてという時間の流れの中で,この 3 つの対象者間で明らかに母との関係が変化すると予想され,未婚の社会人の娘の母に対する関係性がより明確化できるのではないかと考える。

次に,成人期初期の未婚女性における母娘関係の親密さと葛藤について検討することにする。そこで,まず,青年期後期での親子の対立・葛藤における青年の反応の特徴,および,親子関係における未解決の問題を明らかにしたうえで,それらを参考に,成人期初期の未婚女性の母娘関係の特徴について明らかにし, 青年期後期と比較していかに変容しているのかを検討する。そして,生育史の観点から,特に親密な母娘関係である者と特に葛藤がある

母娘関係の者をとりあげ,その両者の違いを検討する。また,母娘関係における未解決の問題に対する娘の認知について明らかにし,青年期後期と比較していかに変容しているのかを検討する。さらに,母との関係を「重い」と感じるときの娘の母親認知と反応について検討することで,支配的な母に対する成人の娘の葛藤をさらに追及したいと考える。

以上,これらを検討することによって,本研究では,成人期初期の未婚の社会人女性における母娘関係を明らかにすることを目的とする。

具体的には,以下の点について検討をおこなう。

(1)青年期後期から成人期初期にかけての女性（20 歳代から 40 歳未満）を対象に,発達段階により青年期群・未婚群・子育て群の 3 群を設定して,母娘関係の構造を明らかにし,また母との同・別居を要因として,3 群を比較検討することにより成人期初期における未婚女性の母娘関係の特徴を明らかにする。

(2)青年期後期から成人期初期にかけての女性（20 歳代から 40 歳未満）を対象に,発達段階により青年期群・未婚群・子育て群の 3 群を設定して,母娘関係のあり方が女性の心理的健康にいかに影響を及ぼしているのかを比較検討し,未婚女性の母娘関係と心理的健康との関連の特徴を明らかにする。

(3) 大学生を対象に,青年期後期での親子の対立・葛藤における青年の反応の特徴を検討する。そして,それらを参考に,成人期初期の未婚女性の語る青年期後期における否定的な母親認知と比較し,類似性のある結果が得られているのかを検証するために用いることとする。

(4) 大学生を対象に,親子の対立・葛藤における青年の反応と未解決の問題・親子関係の良好さとの関連を検討する。そして,それらを参考に,成人期初期の未婚女性のうち,現在の母娘関係が良好でありながらも未解決の問題を抱えている娘の未解決の問題に対する認知が,青年期後期からいかに変容しているのかを解明するために用いることとする。

(5)成人期初期の母と同居している未婚女性を対象に, 半構造化面接によって,量的研究では詳細にとらえることができなかった成人期初期の母娘関係についてその特徴を明らかにするとともに,青年期後期からいかに変容しているのかを検討する。そしてその検討にあたり,解明された青年期後期の親子の対立・葛藤における青年の親子関係の認知と成人期初期の未婚女性の語る青年期後期における否定的な母親認知とを比較し,類似性のある結果が得られているのかを検証する。次に,生育史の観点から,特に親密な母娘関係である者と特に葛藤がある母娘関係の者をとりあげ,その両者の違いを検討する。そして,成人期初期の

未婚女性のうち,現在の母娘関係が良好であるとしながらも未解決の問題を抱えている娘の未解決の問題に対する認知を明らかにし,解明された青年期後期における未解決の問題の認知と比較していかに変容しているのかを検討する。さらに,支配的な母に対する娘の葛藤を明らかにするために,母が「重い」と感じるときの娘の母親認知と反応について検討することで,成人期初期の未婚女性における母娘関係を明らかにしたいと考える。

第 5 節　本論文の構成

第 1 章では,母娘関係についての研究を展望し,成人期初期の未婚女性における母娘関係の問題点を明らかにした。近年,女性の高学歴化に伴い,晩婚・非婚化が進んでいるなか,学卒後社会人になっても母との同居を続ける未婚女性は,非同居の未婚女性と比較して,道具的依存だけでなく,心理的にも青年期を引きずり母に依存していると考えられ,わが国ではまだ研究が不足している,心理学領域における成人期初期の未婚女性についての母娘関係に言及・実証した研究の意義を指摘した。母と娘は,情緒的にも経済的にも互恵的な関係を結びやすく,親密にすることでお互いに得るものがある支えあいの関係にあるものの,反面,葛藤も存在し,臨床現場では,成人になっても母に支配され,追い詰められる娘の報告が数多くなされてきたが,一般成人において,母娘関係が娘の心理的健康にいかなる影響を及ぼすかについての実証的検討は少なくその検討の必要性を指摘した。また,成人期初期の母娘関係の特徴を質的研究でさらに詳細に検討し青年期後期からいかに変容したかを明らかにする必要があること,それに伴い,親子の対立・葛藤を取り上げた青年期後期の研究の必要性があること,そして,母娘関係で未だに納得できず解決できずに未解決の問題を抱えた娘が,未解決の問題をどのようにとらえているのかというこれまでの研究で扱われてこなかった母娘関係の未解決の問題について本研究で明らかにすることの必要性を指摘した。さらに,支配的な母に対する娘の葛藤を明らかにするために,母が「重い」と感じるときの娘の母親認知と反応を検討する必要性を指摘した。

第 2 章では,**＜研究 1＞**として,青年期後期から成人期初期にかけての女性（20 歳代から 40 歳未満）を対象に,発達段階により青年期群・未婚群・子育て群の 3 群を設定して,母娘関係の構造を明らかにし,また母との同・別居を要因として,3 群を比較検討することにより成人期初期における未婚女性の母娘関係の特徴を明らかにする**〈調査 1〉**,**〈調査 2〉**,

〈調査 3〉。

第 3 章では,**＜研究 2＞**として,青年期後期から成人期初期にかけての女性（20 歳代から 40 歳未満）を対象に,発達段階により青年期群・未婚群・子育て群の 3 群を設定して,母娘関係のあり方が女性の心理的健康にいかに影響を及ぼしているのかを比較検討し,未婚の社会人女性の母娘関係と心理的健康との関連の特徴を明らかにする**〈調査 1〉**。

第 4 章では,**＜研究 3＞**として,大学生を対象に,青年期後期の親子の対立・葛藤における青年の反応の特徴を明らかにする**〈調査 1〉**,**〈調査 2〉**,**〈調査 3〉**。そして,それらを＜研究 5＞で,成人期初期の未婚女性の語る青年期後期における否定的な母親認知と比較し,類似性のある結果が得られているのかを検証するために用いることとする。

第 5 章では,**＜研究 4＞**として,大学生を対象に,親子の対立・葛藤における青年の反応と未解決の問題・親子関係の良好さとの関連を明らかにする**〈調査 1〉**,**〈調査 2〉**。そして,それらを＜研究 5＞で,成人期初期の未婚女性のうち,未解決の問題を抱えている娘の未解決の問題に対する認知が青年期後期からいかに変容しているのかを解明するために用いることとする。

第 6 章では,**＜研究 5＞**として,成人期初期の親と同居している未婚女性を対象に,半構造化面接によって,量的研究では詳細にとらえることができなかった未婚女性の母娘関係についての特徴を明らかにするとともに,青年期後期からいかに変容しているのかを検討する。そしてその検討にあたり,＜研究 3＞で明らかとなった青年期後期の親子の対立・葛藤における青年の親子関係の認知と成人期初期の未婚女性の語る青年期後期における否定的な母親認知と比較し,類似性のある結果が得られているのかを検証する。また,生育史の観点から,特に親密な母娘関係である者と特に葛藤がある母娘関係の者をとりあげ,その両者の違いも検討することにする**〈分析 1〉**。次に,成人期初期の未婚女性のうち未解決の問題を抱えている娘の未解決の問題に対する認知を検討し,＜研究 4＞で明らかとなった青年期後期の母娘関係における未解決の問題に対する認知からいかに変容しているのかを検討する**〈分析 2〉**。さらに,支配的な母に対する娘の葛藤を明らかにするために,母が「重い」と感じるときの娘の母親認知と反応を検討する**〈分析 3〉**ことで,成人期初期の未婚女性における母娘関係の親密さと葛藤を明らかにする。

第 7 章は,本研究のまとめであり,成人期初期の未婚女性における母娘関係のあり方を述べる。第 1 節では,本研究で得られた結果から,成人期初期の未婚女性における母娘関係の特徴を考察し,第 2 節で本研究の結論,第 3 節で本研究の問題点と今後の課題を述べ,本論文

の結びとする。

以上に述べた本論文の構成は,図に示すと次のようになる（Fig. 1-5-1)。

題目 ： 成人期初期の未婚女性における母娘関係

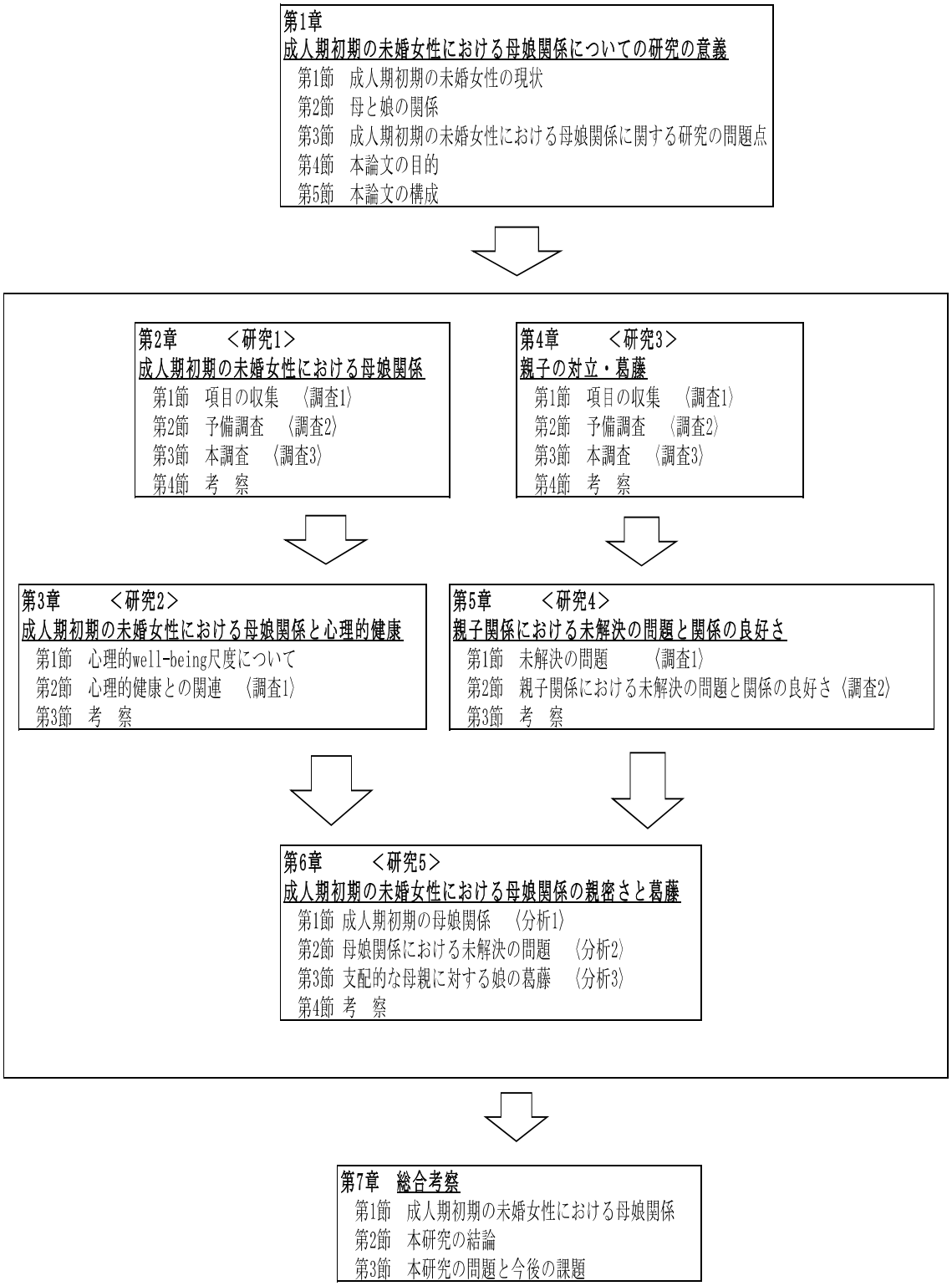

Fig.1-5-1 本論文の構成

第 2 章　成人期初期の未婚女性の母娘関係＜研究 1＞

本章では, 青年期後期から成人期初期における母娘関係を測定する尺度を作成するために, まず, わが国における青年期の親子関係についての先行研究の尺度を整理し, これらを参考に領域を設定して項目を収集･精選することにより母娘関係尺度を作成する。そして, 青年期後期から成人期初期における母娘関係の発達的変化を検討し, ライフステージおよび母との同･別居による母娘関係のあり方の変化を検証することにより, 成人期初期の未婚女性の特徴を明らかにしたいと考える。

第 1 節　項目の収集〈調査 1〉

1. 目 的

青年期後期から成人期初期における母娘関係の項目を収集することを目的とする。

2. 方 法

まず, 青年期から成人期における親子関係を測定する尺度を作成するために, わが国における青年期の親子関係についての先行研究（小高, 1998 ; 久保田, 1993 ; 落合・佐藤, 1996 ; 小沢・湯沢, 1989 ; 渡邊, 1994）の尺度を整理した。

小高（1998）は, 大学生男女を対象に, 青年の親への態度・行動についての因子分析の結果,「親からのポジティブな影響」,「親との対立」,「親への服従」,「親との情愛的な絆」,「一人の人間として親を認知」を抽出している。久保田（1993）は, 大学生男女を対象に, 現在の母親との関係に関する認識の因子分析の結果,「母親への愛着」,「母親への情緒的依存」,「母親への気遣い」を抽出している。また, 落合・佐藤（1996）は, 中学生・高校生・大学生・大学院生の男女を対象に, 母娘関係のあり方からみた心理的離乳への過程として, 第 1 段階親「子どもを抱え込む関係」･「親が子と手を切る関係」, 第 2 段階「親が子を危険から守る関係」, 第 3 段階「子が困った時には親が支援する関係」, 第 4 段階「子が親から信頼・承認されている関係」, 第 5 段階「親が子を頼りにする関係」を明らかにしている。小沢・湯沢（1989）は, 大学生男女を対象に, 心理的離乳尺度として,「信頼感の確立」,「親への甘え」,「親子の対立」,「親から子への世代交代」,「親から仲間への離脱」を抽出し

ている。そして，渡邊（1994）は,中学生・高校生・大学生の男女を対象に,父母との関係の因子分析で,「父:絆・依存・反抗」,「母：絆・依存」,「母:自己主張」,「母:反抗」,「父：自己主張」「父母：一人前扱い」を抽出している。

これらの青年期における尺度を参考にし,本研究の領域を考えると,まず,どの研究でも共通して取り上げられている領域として 2 つの領域があげられる。一つ目の領域は,「信頼」,「愛着」,「絆」などであり,親との信頼関係が親子関係の基盤として考えられ,これを本研究では「母への信頼感」という領域として設定した。二つ目の領域は,「甘え」,「依存」と呼ばれる領域で,成人期初期でも存在するであろう「母への依存」を設定した。

また,先行研究では分離・個体化あるいは反抗期に伴う「対立」,「反抗」などの領域があるが,本研究では同様にネガティブな関係でも,母娘関係が以前にも増して悪化する場合や,今まで押さえ込まれていた不満が,結婚や出産などのライフイベントを契機に一挙に表面化して関係が悪化する場合を考え,「不信・拒否」として設定した。

次に,先行研究では「親から子への世代交代」,「一人前扱い」などの領域があるが,青年期以降の母娘関係は,それまでの親に頼る関係から,親に一人前と認められ,時には親に頼られ,子が親の支えになるような関係に変容していく（落合・佐藤,1996）といわれる。そこで娘側が母に対して,「支えてあげたい」,「世話をしてあげたい」などの気持ちが出てくると考え,「母への支え」の領域を設定した。

一方,先行研究では「親が子を抱え込む親子関係」,「親への服従」などの領域がある。仲の良い母と娘が一卵性母娘（信田,1997）と呼ばれるように,母と娘は,情緒的にも経済的にも互恵的な関係を結びやすく,親密にすることでお互いに得るものがある支えあいの関係にある。しかし,ひとたびお互いの提供する支えのバランスが崩れたときには「母に呑み込まれる娘」につながる危険をはらむ（大野,2001）ものとなってしまう。そこで,成人であっても母が娘を支配したがる場合を考え,「母の支配」の領域を設定した。

最後に,これまでの青年期の親子関係をとらえる領域にはみられないが,この時期は過去の対立・葛藤を再構築する時期でもある。心理的離乳の過程において,多くの場合「親との対立」（小高,1998；小沢・湯沢,1989）や「反抗」（渡邊,1994）を経て自立を遂げていくが（福島,1992；渡邊,1994）,他方で,子離れできない母の増加（松元,1996）や親が子を抱え込む（落合・佐藤,1996）ことで,子の側が葛藤を強めることがある。青年期も後期,成人期初期ともなれば,通常ならば母と娘は程よい距離感で相互的な関係になっているはずが,このような母娘関係の歪みから,母から自由になれないケースを臨床家や精神科医の多くが

指摘している（河野,1995；木村・馬場,1988；斎藤,1995,2004）。そこで,過去（青年前・中期）に母との対立を経験した後に,そこでの葛藤が解決済みであるか否かを問う「過去の対立・葛藤」を設定し,この領域の発達的および臨床的特徴を明らかにしたいと考える。

このように,わが国における青年期の親子関係について先行研究（小高,1998；久保田,1993；落合・佐藤,1996；小沢・湯沢,1989；渡邊,1994）を整理・参考にしながら,青年期後期から成人期初期における母娘関係をとらえる領域として,「母への信頼感」,「母への依存」,「不信・拒否」,「母への支え」,「母の支配」,「過去の対立・葛藤」の6領域を設定した。

上述のように,本研究で設定した 6 領域と先行研究における青年期の親子関係をとらえる尺度を,Table2-1-1 にまとめた。

Table2-1-1　設定した6領域と,先行研究における青年期の親子関係をとらえる尺度

設定した6領域	小沢・湯沢（1989） 5因子	久保田(1993) 3因子	渡邊(1994) 6因子	落合・佐藤(1996) 6因子	小高(1998) 5因子
母への信頼感	信頼感の確立	母親への愛着	(父・母) 絆・依存	子が親から信頼・承認されている親子関係	親からのポジティブな影響
母への依存	親への甘え	母親への情緒的依存		子が困った時には親が支援する親子関係	親との情愛的絆
不信・拒否	親子の対立		(父・母) 反抗	親が子と手を切る親子関係	親との対立
			(父・母) 自己主張		
母への支え	親から子への世代交代		(父・母) 一人前扱い	親が子を頼りにする親子関係	一人の人間として親を認知
		母親への気づかい			
	親から仲間への離脱				
				親が子を危険から守る親子関係	
母の支配				親が子を抱え込む親子関係	親への服従
過去の対立・葛藤					
(概念) 愛着・自立 (対象) 大学生・成人 女	心理的離乳 大学生 男女	愛着 大学生 男女	自立 中・高・大学生 男女	心理的離乳 中・高・大・院生 男女	親への態度・行動 大学生 男女

3. 結　果

これら 6 領域に沿って先行研究の尺度を参考に,独自の項目も加えて項目を作成した。そして,領域ごとに必要な事項が網羅されているかを先行研究に照らしあわせ検討し,さらに心理学研究者・大学院生数名による検討を経て全 84 項目を作成した。

青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度作成のために収集・精選された 84 項目は,以下のとおりである。

母への信頼感(15 項目)

- なんでも話ができる
- 一緒にいると心がなごむ
- 母には嘘がつけないと思う
- 私の幸せを自分の幸せのように喜んでくれる
- 母に期待されると嬉しい
- 私の味方である
- 母の言うことは正しいと思う
- 私をひとりの人間として認めてくれる
- 母を信頼している
- 困っているときは,いつでも助けてくれる
- 私の人生のよき理解者だ
- 母と仲がいい
- 私の気持ちを理解してくれる
- 私の考えを尊重し,自分の意見を押し付けてこない
- 母の人生に共感を覚えるようになった

母への依存(14 項目)

- 反対されると自信がなくなる
- 母の顔色をうかがうことがある
- 母に頼りすぎていると思う
- 一緒に買い物に出かけ,物をよく買ってもらう
- どんな時も,母に見捨てないでほしい
- 悩みがあるときは,必ず相談する

- 期待にそえないと, 申し訳ないと思う
- 母が喜べば私も嬉しい
- 母に励ましてもらうと元気になる
- 困った時は, 母に頼りたくなる
- 母を失ったら私の人生は味気ないものになってしまう
- 買い物で, 物を選ぶのをよく手伝ってもらう
- 何かにつけ, つい頼ってしまう
- 母によく電話やメールをする

母への支え(11 項目)

- 私を頼りにしてくる時は, 役に立ちたい
- 精神的な面で頼られると支えてあげたい
- あれこれと母の世話をしてあげたい
- 愚痴をこぼす時は, 親身に聞いてあげたい
- 私をあてにする時は応えてあげたい
- できるだけ母のそばに住みたい（いたい）
- 困っている時は, 力になってあげたい
- 相談事を持ちかけてきたら, 親身に聞いてあげたい
- 何かと, 母の支えになってあげたい
- 母の気持ちを理解してあげたい
- 病気の時は世話をしてあげたい

過去の対立・葛藤(12 項目)

- 昔は, 母がいやでしかたなかった
- 昔は, 母に口答えばかりしていた
- 昔は, 母と気が合わなかった
- 昔は, よくほったらかしにされた
- 昔は, 母とよく意見が衝突した
- 昔は, 私が何をしてもお構いなしだった
- 昔, 母とほとんど口をきかない時があった

- 以前は, 母がうっとうしかった
- 以前は, 母と言い争いが絶えなかった
- 以前は, 母の愛情をうとましく感じていた
- 昔は, 私に関心を示してくれなかった
- 昔は, 母から解放されたいと思っていた

不信・拒否(19 項目)

- しぐさや態度が「母に似ている」と言われるといやな気になる
- 口をきくのも面倒だ
- 母が, うっとうしい
- あまりかかわりたくない
- 困っていても, 相談をする気はない
- 母の態度を押し付けがましいと感じる
- 母には好かれていないと感じる
- 母のことを考えると気分が沈む
- 母がつまらない人間に思える
- 今の母とは違う母が欲しいと思う
- 母とほとんど会話がない
- 母の世話になりたくない
- あまり近づきたくない
- 口出しされると, いやな気になる
- 私の本当の気持ちをわかっていない
- 母に, 絶対に許せないと思っていることがある
- 母のようにはなりたくない
- 気が合うほうではない
- 母に対して素直になれない

母の支配(13 項目)

- 母のできなかった事や夢を私に託そうとする
- 私のことを何でも知りたがる

- 私がやるべき事にまで手を出してくる
- 私に「いい子」でいることを期待していた
- 私の将来の道を勝手に決めようとする
- 母は,親の言う事を子ども(私)がきくのは当たり前だと思っている
- 結局,母の言う通りになってしまいやすい
- 私の事を自分の思い通りにしなくては気が済まない
- 自分の意見を押し付けてくる
- 私のことに何でも口を出したがる
- 私の進路なのに母の考えで決めようとする
- 私を手放したがらない
- 母の思う様にしないと,機嫌が悪い

第2節　予備調査〈調査2〉

1. 目　的

青年期後期から成人期初期における母娘関係を測定する尺度を作成するために,予備的な因子分析により項目間の関連を明らかにし,項目の精選をおこなうことを目的とする。

2. 方　法

(1) 調査対象

関東圏 X 女子大学の大学生 192 名を対象に実施した。有効回答は 176 名で,平均年齢は,19.87 歳（*SD* =1.49)であった。

(2) 手続き

2005 年 5 月,講義時間内にて無記名式質問紙調査を実施・回収した。

(3) 調査内容

1)青年期後期から成人期初期における母娘関係

調査 1 で,精選した 84 項目を用いた。回答は,「非常にあてはまる（5)」,「あてはまる（4)」,「どちらでもない（3)」,「あてはまらない（2)」,「全くあてはまらない(1)」の 5 件法で評定を求めた。

2)フェイスシート

対象者の年齢を尋ねた。

(4) 倫理的配慮

調査前に口頭及び文書で,対象者に調査の目的,回答の任意性,個人情報の非特定,そして調査目的のみにデータを用いることを説明してプライバシー保護に努めることを伝えた上で,調査の協力を依頼した。そして,プライバシー保護の観点から質問紙に「糊付の封筒」を添付し,回答後の質問紙を封筒に入れ封をして各自提出してもらうようにした。また,回答したくない場合や母との離死別等により回答できない場合には,記入しなくてよいことを伝え調査票を返信用の封筒に入れ返却してもらうようにした。

3. 結　果

(1) 項目の検討

弁別力のある項目を選択するため,各項目の平均値・標準偏差を求め,天井効果・フロア効果のみられた項目を検討し,16 項目を削除した。

＜削除した項目＞

- 私を頼りにしてくれるときは,役に立ちたい

  (平均値　4.239　　標準偏差　0.798　　M+*SD*　5.037)

- 母が喜べば私もうれしい

  (平均値　4.205　　標準偏差　0.800　　M+*SD*　5.005)

- 母を信頼している

  (平均値　4.153　　標準偏差　0.849　　M+*SD*　5.002)

- 今の母とは違う母が欲しいと思う

  (平均値　1.669　　標準偏差　0.953　　M－*SD*　0.716)

- 昔は,よくほったらかしにされた

  (平均値　2.006　　標準偏差　1.008　　M－*SD*　0.998)

- 口をきくのも面倒だ

  (平均値　1.794　　標準偏差　0.999　　M－*SD*　0.795)

- 母とほとんど会話がない

  (平均値　1.589　　標準偏差　0.836　　M－*SD*　0.753)

- 母が,うっとうしい

（平均値　2.045　　標準偏差　1.070　　M－*SD*　0.975）

- 私の進路なのに母の考えで決めようとする

（平均値　2.069　　標準偏差　1.104　　M－*SD*　0.965）

- あまりかかわりたくない

（平均値　1.983　　標準偏差　1.031　　M－*SD*　0.952）

- 母がつまらない人間に思える

（平均値　1.886　　標準偏差　0.941　　M－*SD*　0.945）

- 私の進路なのに母の考えで決めようとする

（平均値　2.000　　標準偏差　1.077　　M－*SD*　0.923）

- あまり近づきたくない

（平均値　1.829　　標準偏差　0.994　　M－*SD*　0.835）

- 私のことを自分の思い通りにしなくては気がすまない

（平均値　2.063　　標準偏差　1.070　　M－*SD*　0.993）

- 昔は,私に関心を示してくれなかった

（平均値　1.670　　標準偏差　0.862　　M－*SD*　0.808）

- 母には好かれていないと感じる

（平均値　1.739　　標準偏差　0.923　　M－*SD*　0.816）

次に,カテゴリー度数を求め,分布の偏りが,1 の回答と 2 の回答の合計,4 の回答と 5 の回答の合計がそれぞれ７５％以上のものを選び検討した。その結果,以下 7 項目は,項目として不適切と判断し,削除した。

＜削除した項目＞

- 私をあてにするときは,応えてあげたい

（4 の回答（54.0 %）　5 の回答（30.7%）　合計 84.7%）

- 昔は,私が何をしてもお構いなしだった

（1 の回答（38.1%）　2 の回答（41.5%）　合計 79.6%）

- 精神的な面で頼られると支えてあげたい

（4 の回答（56.6%）　5 の回答（22.3%）　合計 78.9%）

- 困っている時は,力になってあげたい

（4 の回答（50.9%）　5 の回答（29.1%）　合計 80.0%）

- 相談を持ちかけてきたら,親身に聞いてあげたい

  (4 の回答 (53.4 %)　5 の回答 (24.4%)　合計 77.8%)

- 母と仲がいい

  (4 の回答 (42.6 %)　5 の回答 (36.4%)　合計 79.0%)

- 病気の時は世話をしてあげたい

  (4 の回答 (50.6 %)　5 の回答 (35.2%)　合計 85.8%)

(2)予備的な因子分析

削除後の 61 項目について母娘関係の構造を明らかにするために,因子分析をおこなった。設定した領域が 6 領域であること,固有値の減衰状況,および因子の解釈のしやすさから 6 因子解を適当とし,主因子法・直交回転(バリマックス法),斜交回転(コバリミン法),プロマックス回転を順次おこない,まとまりのよい斜交回転(コバリミン法)による 6 因子解を採用した。結果は,Table2-2-1 に示すとおりである。

Table2-2-1 青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度の予備的因子分析結果　　N=176

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h^2
母への信頼（α=.92）							
悩みがあるときは、必ず相談する	.85	-.29	-.08	-.08	-.16	-.22	.49
なんでも話ができる	.80	-.26	-.27	-.01	-.28	-.21	.64
私の本当の気持ちをわかっていない *	-.75	-.01	.15	.22	.06	.22	.56
私の人生のよき理解者だ	.73	.04	-.12	-.04	.07	-.12	.61
困っていても相談する気はない *	-.70	.16	.19	-.01	-.04	.25	.67
母に対して素直になれない *	-.69	.03	.25	.21	.22	.30	.53
困った時は、母に頼りたくなる	.66	-.26	.01	.33	-.14	-.28	.69
私の気持ちを理解してくれる	.65	.35	-.22	.05	.12	.26	.63
母に励ましてもらうと元気になる	.61	.04	-.12	.12	.17	-.04	.59
私の味方である	.55	.30	-.18	.26	.00	.13	.56
私に「いい子」でいることを期待していた *	-.54	.04	.11	.12	.43	.42	.48
一緒にいると心がなごむ	.52	.29	-.37	.17	.17	.06	.67
母のようにはなりたくない *	-.51	-.27	.23	-.01	-.16	.11	.55
母を失ったら私の人生は味気ないものになってしまう	.50	.01	.06	.20	.07	-.01	.40
母に絶対に許せないと思っていることがある *	-.47	-.08	.27	-.04	-.06	.15	.41
母の言うことは正しいと思う	.45	-.05	-.10	.08	.15	-.13	.36
母の人生に共感を覚えるようになった	.45	.24	.06	-.12	.30	.20	.38
紐帯の切れなさ（α=.72）							
反対されると自信がなくなる	.22	-1.04	.01	.10	-.19	-.53	.50
母の顔色をうかがうことがある	-.12	-.97	.16	.04	.12	-.47	.55
結局、母の言う通りになってしまいやすい	.23	-.74	-.12	-.05	-.05	-.17	.40
自分の意見を押し付けてくる	-.01	-.68	.35	-.27	-.35	.13	.72
母は親の言うことを子ども（私）がきくのは当たり前だと思っている	-.03	-.60	.27	-.05	-.13	.04	.45
母の思うようにしないと機嫌が悪い	-.30	-.41	.10	-.11	-.03	.27	.54
過去の対立・葛藤（α=.91）							
以前は、母と言い争いが絶えなかった	.07	-.26	.84	-.12	-.12	-.14	.70
昔は、母とよく意見が衝突した	-.01	-.14	.82	-.09	-.09	-.03	.69
昔は、母がいやでしかたなかった	-.18	.05	.81	-.12	-.01	.16	.78
昔は、母に口答えばかりしていた	.18	-.16	.78	.02	-.24	-.16	.60
昔は、母と気が合わなかった	-.30	-.08	.76	.01	.05	-.02	.71
以前は、母がうっとうしかった	-.24	.12	.68	-.05	-.06	.37	.72
昔、母とほとんど口をきかない時があった	-.35	.13	.62	-.08	.15	.02	.55
以前は、母の愛情をうとましく感じていた	-.27	.16	.53	.03	-.02	.40	.51
母への依存（α=.79）							
一緒に買い物に出かけ、物をよく買ってもらう	-.14	.38	-.07	.79	.05	.27	.53
買い物で、物を選ぶのをよく手伝ってもらう	-.14	-.03	-.02	.78	.21	-.21	.57
何かにつけ、つい頼ってしまう	.28	-.04	-.08	.61	.04	-.15	.62
どんな時も、母に見捨てないで欲しい	.28	.24	-.18	.59	.21	.17	.65
母に頼りすぎていると思う	.19	-.19	-.22	.58	-.06	-.06	.54
母によく電話やメールをする	.15	.17	-.13	.48	.04	.04	.33
母への支え（α=.79）							
期待にそえないと申し訳ないと思う	-.24	-.20	-.06	.31	.76	-.18	.60
何かと母の支えになってあげたい	.29	.31	-.13	.15	.64	.10	.67
あれこれと母の世話をしてあげたい	-.06	.51	-.29	.21	.63	.47	.42
母の気持ちを理解してあげたい	.30	.31	-.13	.00	.58	.08	.56
母に期待されると嬉しい	.06	-.25	-.06	.16	.57	-.23	.49
できるだけ母のそばに住みたい（いたい）	.13	.27	-.33	.32	.45	.16	.47
母の束縛 （α=.70）							
私のことを何でも知りたがる	.14	.37	-.02	.03	.06	.98	.58
私を手放したがらない	-.29	.34	-.16	.19	.21	.89	.48
母のできなかった事や夢を私に託そうとする	.04	.25	-.01	-.15	.26	.65	.34
私がやるべき事にまで手を出してくる	-.04	.05	.15	.15	-.27	.61	.42
私のことに何でも口を出したがる	.23	-.29	.14	-.20	-.35	.59	.67
母の態度を押し付けがましいと感じる *	-.20	-.38	.32	-.10	-.47	.24	.67
口出しされると、いやな気になる	-.06	-.44	.18	-.08	-.38	.06	.32
私の考えを尊重し、自分の意見を押し付けてこない *	-.01	.44	-.32	.33	.38	-.16	.50
私をひとりの人間として認めてくれる	.42	.34	-.11	-.00	.36	-.09	.53
困っている時は、いつでも助けてくれる	.41	.27	-.19	.38	.13	.22	.53
母のことを考えると気分が沈む	-.38	-.40	.29	-.26	-.16	-.10	.52
気が合うほうではない	-.48	-.41	.51	-.09	-.04	-.29	.63
母には嘘がつけないと思う *	.66	-.72	.00	-.03	-.21	-.67	.49
昔は母から開放されたいと思っていた	-.10	.03	.45	-.13	.07	.55	.59
しぐさや態度が「母に似ている」といわれると嫌な気になる	-.16	-.39	.26	-.31	-.23	.02	.39
愚痴をこぼす時は親身に聞いてあげたい	.47	-.14	.02	-.22	.41	-.22	.54
私の幸せを自分の幸せのように喜んでくれる	.54	.44	-.21	.22	.14	.37	.61
母の世話になりたくない	-.36	-.19	.13	-.24	-.04	-.04	.30
因子間相関　F1		.32	-.55	.56	.59	-.20	
F2			-.32	.07	.04	-.53	
F3				-.28	-.38	.26	
F4					.45	-.02	
F5						.03	

*： 逆転項目

第 1 因子は,項目作成時に,主に「母への信頼感」,「母への依存」の領域にあげた項目と「不信・拒否」の領域が逆転項目として入り,「母への信頼」とした。第 2 因子は,項目作成時に,主に「母の支配」,「母への依存」の領域にあげた項目からなり,「紐帯の切れなさ」とした。第 3 因子は,項目作成時の「過去の対立・葛藤」の項目がひとまとまりの因子として抽出された。第 4 因子も,項目作成時の「母への依存」の項目がひとまとまりとなって抽出された。第 5 因子は,主に項目作成時の「母への支え」の項目が集まり,「母への支え」とした。第 6 因子は,項目作成時の「母の支配」の項目がひとまとまりになって娘を拘束したがる母親の姿がうかがえ,「母の束縛」とした。

(3)信頼性の検討

尺度の信頼性を示すα係数（Table2-2-1）は,「母への信頼」α=.92,「紐帯の切れなさ」α=.72,「過去の対立・葛藤」α=.91,「母への依存」α=.79,「母への支え」α=.79,「母の束縛」α=.70 で,各因子とも十分な内的整合性を有していることが確認された。

そして,本調査で使用するために,これらの項目をさらに,因子負荷量が高く,かつ,内容の重複を避けて項目を選び,最終的に 37 項目とした。

その結果,「母への信頼」（10 項目）,「紐帯の切れなさ」（5 項目）,「過去の対立・葛藤」（6 項目）,「母への依存」（6 項目）,「母への支え」（5 項目）,「母の束縛」（5 項目）の全 37 項目を母娘関係の調査項目とし,以下のとおりである。

本調査で使用する母娘関係尺度　37 項目

母への信頼(10 項目)

- なんでも話ができる
- 私の人生のよき理解者だ
- 私の気持ちを理解してくれる
- 一緒にいると心がなごむ
- 母の人生に共感を覚えるようになった
- 私の本当の気持ちをわかっていない*
- 困っていても,相談をする気はない*

- 母に対して素直になれない*
- 母のようにはなりたくない*
- 母に,絶対に許せないと思っていることがある*

紐帯の切れなさ(5 項目)

- 母の顔色をうかがうことがある
- 結局,母の言う通りになってしまいやすい
- 自分の意見を押し付けてくる
- 母は,親の言う事を子ども(私)がきくのは当たり前だと思っている
- 母の思う様にしないと,機嫌が悪い

過去の対立・葛藤(6 項目)

- 以前は,母と言い争いが絶えなかった
- 昔は,母とよく意見が衝突した
- 昔は,母がいやでしかたなかった
- 昔は,母に口答えばかりしていた
- 昔は,母と気が合わなかった
- 昔,母とほとんど口をきかない時があった

母への依存(6 項目)

- 一緒に買い物に出かけ,物をよく買ってもらう
- 買い物で,物を選ぶのをよく手伝ってもらう
- 何かにつけ,つい頼ってしまう
- どんな時も,母に見捨てないでほしい
- 母に頼りすぎていると思う
- 母によく電話やメールをする

母への支え(5 項目)

- あれこれと母の世話をしてあげたい
- 何かと,母の支えになってあげたい

- 母の気持ちを理解してあげたい
- 母に期待されると嬉しい
- できるだけ母のそばに住みたい（いたい）

母の束縛(5 項目)

- 私のことを何でも知りたがる
- 私のことに何でも口を出したがる
- 私を手放したがらない
- 私がやるべき事にまで手を出してくる
- 母のできなかった事や夢を私に託そうとする　　＊：逆転項目

第 3 節　本調査〈調査 3〉

1. 目　的

青年期後期から成人期初期における母娘関係を測定する尺度を作成し，ライフステージおよび母との同･別居の違いによる母娘関係のあり方の変化を検討することによって，成人期初期の未婚女性の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 方　法

(1) 対象者と手続き

本研究では，調査対象を青年期後期から成人期初期にかけての女性を 20 歳代から 40 歳未満に限定し，かつ，ライフステージにより，青年期群・未婚群・子育て群の 3 群を選んで設定した。

青年期群として，女子大学生 175 名。講義時間中に調査用紙を配布し，その場で回答を求めた [1)]。

未婚群は，以下の 3 つの方法で資料を収集した [2)]。

①青年期群の在籍する女子大学の卒業生 98 名。質問紙を郵送し，質問紙が手元に到着後 1 週間以内の返送を依頼し，39 名より回収した。うち，2 名は既婚であったため除外し，有効回答は 37 名だった（有効回収率：37.8%）。

②青年期群の在籍する女子大学の大学院生20名。質問紙を直接渡し,15名より回収した(有効回収率：75.0%)。

③企業に勤務する女性117名。予め調査に協力いただけるという承諾をいただけた方にのみ質問紙を郵送し,質問紙が手元に到着後1週間以内の返送を依頼し,64 名より回収した。うち,3名は40歳代であったため除外し,有効回答は61名だった(有効回収率：52.1%)。

子育て群は,以下の2つの方法で資料を収集した[2)]。

①2つの私立幼稚園園児の母312名。質問紙を幼稚園で配布し1週間以内の提出を依頼し,幼稚園にて176名から回収した。うち,39名は40歳代であったため除外し,有効回答は137名だった(有効回収率：43.9%)。

②子育て中の女性24名。予め調査に協力いただけるという承諾をいただけた方に質問紙を郵送し,質問紙が手元に到着後1週間以内の返送を依頼し,20名から回収した。うち,3名は40歳代であったため除外し,有効回答は17名だった(有効回収率：70.8%)。

以上,有効回答者数は,青年期群175名,成人期初期群113名,子育て群154名,計442名であった。

(2) 調査時期

2005年10月下旬～11月上旬に実施した。

(3) 調査内容

1)青年期後期から成人期初期における母娘関係

調査2で精選した37項目を使用した。回答は,「非常にあてはまる(5)」,「あてはまる(4)」,「どちらでもない(3)」,「あてはまるらない(2)」,「全くあてはまらない(1)」の5件法で評定を求めた。

2)フェイスシート

対象者の年齢,母との同居の有無,母の年齢,子どもの有無・人数・末子の年齢,就労状況,学歴を尋ねた。

(4) 倫理的配慮

調査にあったって口頭または文書で,参加者に調査の目的,回答の任意性,個人情報の非特定,そして調査目的のみにデータを用いることを説明してプライバシー保護に努めることを伝えた上で,調査の協力を依頼した。そして,プライバシー保護の観点から質問紙に「糊付の封筒」を添付し,回答後の質問紙を封筒に入れ封をして各自提出してもらうようにした。また,回答したくない場合や母親との離死別等により回答できない場合には,記入しなくて

よいことを伝え調査票を返信用の封筒に入れ返却してもらうようにした。

3. 結　果

(1) 対象者の属性

結果は,Table 2-3-1 年齢の内訳,Table 2-3-2 母の年齢,Table 2-3-3 学歴,Table 2-3-4 就労形態,Table 2-3-5 母の家からの距離,Table 2-3-6 子どもの数,Table 2-3-7 末子の月齢に示すとおりである。

Table2-3-1　各群の年齢の内訳　　*N*=442

年齢	青年期群 (*n*=175)	未婚群 (*n*=113)	子育て群 (*n*=154)
～19	58		
20～24	114	27	4
25～29		72	20
30～34		12	80
35～39		2	49
不明	3		1
平均年齢	19.91	26.17	32.98
SD	(0.87)	(2.88)	(3.41)

Table2-3-2　母の年齢　　*N*=442

年齢	青年期群 (*n*=175)	未婚群 (*n*=113)	子育て群 (*n*=154)
40～44	24	3	
45～49	67	9	
50～54	69	53	19
55～59	7	30	48
60～64	1	15	53
65～69		3	24
70～72			8
不明	7		2
平均年齢	48.82	54.34	60.32
SD	(3.86)	(4.71)	(5.03)

Table2-3-3　学 歴　　*N*=442

学　歴	青年期群 (*n*=175)	未婚群 (*n*=113)	子育て群 (*n*=154)
中　　卒			3
高　　卒		4	53
短大・専門卒		15	62
大卒(在学中含)	175	77	34
大学院卒(在学中含)		17	2

Table2-3-4　就労形態

	未婚群 (*n*=113)			子育て群 (*n*=154)			
	同居	別居	合計	同居	別居	不明	合計
フルタイム	35	34	69	3	5		8
パートタイム	9	4	13	5	19	1	25
自 営・他	8	3	11	1	4	1	6
無 職	2	3	5	7	105	3	115
大学院生	9	6	15				
合計	63	50	113	16	133	5	154

Table2-3-5 母の家からの距離　　*N*=442

	青年期群 (*n*=175)	未婚群 (*n*=113)	子育て群 (*n*=154)
同　居	112	63	16
同敷地内			1
近　所		3	15
公共手段で30分以内		3	33
公共手段で90分以内	1	8	25
日帰りできる距離	1	19	26
遠　方	57	17	33
不　明	4		5

Table2-3-6　子どもの数

子どもの数	子育て群（*N*=154）
1人	45
2人	80
3人	27
4人	2

Table2-3-７　末子の月齢

月　齢	子育て群（*N*=140）
1～12	14
13～24	18
25～36	17
37～48	27
49～60	30
61～72	22
73～84	11
85～96	1

各群の平均年齢は,青年期群 19.91 歳（*SD* =0.87）,未婚群 26.17 歳（*SD* =2.88）,子育て群 32.98 歳（*SD* =3.41）である。母の平均年齢は,青年期群 48.82 歳（*SD* =3.86）,未婚群 54.34 歳（*SD*=4.71）,子育て群 60.32 歳（*SD*=5.03）であった。学歴は,未婚群では大卒（68.1%）が最も多く,子育て群では高卒(34.4%),短大・専門学校卒（40.3%）および大卒(22.1%)が大半を占める。就労形態は,未婚群ではフルタイム（61.1%）が大半を占め,子育て群では無職(74.7%)が大半であった。母の家からの距離は,青年期群,未婚群ではほとんどが同居であり,子育て群では公共手段で 90 分以内までの距離の者が大半を占めた。また,子育て群の子どもの数は,2 人が大半を占めた。

(2) 青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度の因子構造

青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度を作成するために,因子分析（主因子法・プロマックス回転）をおこなった。想定した領域が 6 領域であり,予備調査でも 6 因子同様の手続きにより項目を採用した結果,因子の解釈の妥当性から 5 因子解が適当であると考えられ採用した。結果は,Table2-3-8 に示すとおりである。

Table2-3-8　青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度の因子分析結果

（主因子法，Promax回転）　　N=442

	F1	F2	F3	F4	F5	h^2
母への支え（α=.78）						
何かと母の支えになってあげたい	.78	.04	.06	-.17	-.08	.68
あれこれと母の世話をしてあげたい	.65	-.04	.08	.01	-.10	.36
母の気持ちを理解してあげたい	.62	.05	.01	-.29	-.13	.55
できるだけ母のそばに住みたい（いたい）	.55	-.07	-.07	.13	.28	.48
母に期待されると嬉しい	.55	-.04	.04	.05	-.05	.25
過去の対立・葛藤（α=.90）						
昔は、母とよく意見が衝突した	-.02	.86	.09	-.09	.01	.74
以前は、母と言い争いが絶えなかった	-.05	.83	.04	-.10	.06	.65
昔は、母に口答えばかりしていた	-.06	.83	-.05	-.12	.18	.58
昔は、母と気があわなかった	.01	.78	-.04	.14	-.06	.72
昔は、母がいやでしかたなかった	.06	.69	-.00	.19	-.14	.67
昔、母とほとんど口をきかない時があった	.11	.61	-.17	.23	-.06	.45
母の支配（α=.85）						
私のことに何でも口を出したがる	-.14	.02	.80	-.22	.08	.59
私のことを何でも知りたがる	.04	.07	.73	-.28	-.02	.48
自分の意見を押し付けてくる	-.12	.09	.67	.11	-.04	.64
母の思うようにしないと機嫌が悪い	.11	-.05	.62	.31	-.14	.57
私を手放したがらない	.08	-.13	.60	.06	-.01	.34
母のできなかった事や夢を私に託そうとする	.13	-.04	.54	-.01	-.21	.26
私がやるべき事にまで手を出してくる	-.21	.06	.53	-.05	.17	.36
結局、母の言う通りになってしまいやすい	.06	-.17	.48	.17	.24	.34
母は、親の言う事を子ども(私) がきくのは当たり前だと思っている	.14	.07	.47	.31	-.05	.43
母への信頼（α=.87）						
私の本当の気持ちをわかっていない*	-.06	.04	.07	.71	.09	.58
母のようにはなりたくない*	.01	.01	.08	.66	-.09	.53
私の気持ちを理解してくれる	.23	.00	.09	-.65	.03	.64
母に絶対に許せないと思っていることがある*	-.02	.15	.02	.63	.13	.47
母に対して素直になれない*	.02	.21	.04	.60	.06	.50
母の人生に共感を覚えるようになった	.19	.22	.11	-.60	-.08	.36
私の人生のよき理解者だ	.36	.03	-.00	-.53	.03	.67
困っていても、相談する気はない*	-.35	-.00	.03	.44	-.05	.55
なんでも話ができる	.15	-.03	.06	-.42	.23	.45
母の顔色をうかがうことがある*	.26	-.02	.28	.41	.22	.31
母への依存（α=.80）						
母に頼りすぎていると思う	-.12	-.06	.11	.02	.83	.64
何かにつけ、つい頼ってしまう	.06	.06	-.01	-.05	.76	.66
買い物で、物を選ぶのをよく手伝ってもらう	.01	.04	-.05	.10	.71	.44
一緒に買い物に出かけ、物をよく買ってもらう	-.07	.05	-.00	.04	.63	.33
どんな時も、母に見捨てないで欲しい	.38	.04	-.04	.06	.45	.48
一緒にいると心がなごむ	.39	-.06	-.04	-.38	.14	.65
母によく電話やメールをする	.29	.05	-.09	-.08	.26	.28
因子間相関	F1	-.28	-.10	-.60	.56	
	F2		.36	.46	-.22	
	F3			.39	.15	
	F4				-.43	

*：逆転項目

第１因子は,予備調査で「母への支え」として抽出された項目内容で,「何かと,母の支えになってあげたい」「あれこれと母の世話をしてあげたい」など,娘が母を支えたいという気持ちがうかがえ,「母への支え」と命名した。

第２因子は,予備調査で「過去の対立・葛藤」として抽出された項目内容で,「昔は,母とよく意見が衝突した」「以前は,母と言い争いが絶えなかった」など,母との過去の良好でない関係がみられ「過去の対立・葛藤」と命名した。

第３因子は,「私のことに何でも口を出したがる」「自分の意見を押し付けてくる」など,母親側の娘を囲い込もうとする様子がうかがえ「母の支配」と命名した。予備調査での「紐帯の切れなさ」4 項目と「母の束縛」５項目がひとつにまとまり,項目作成のために当初設定した領域である「母の支配」に戻った。

第 4 因子は,予備調査で「母への信頼」として抽出された項目内容で,「私の気持ちを理解してくれる」「私の人生のよき理解者だ」など,母を信頼している娘の気持ちがうかがえ「母への信頼」と命名した。ただし,予備調査での「紐帯の切れなさ」から「母の顔色をうかがうことがある（逆転項目）」の項目が負荷する一方,「母への信頼」項目だった「一緒にいると心がなごむ」が,残余項目となった。

第５因子は,予備調査で「母への依存」として抽出された項目内容で,「母に頼りすぎていると思う」「買い物で,物を選ぶのをよく手伝ってもらう」など,青年期後期以降の年齢になっても母親からなかなか自立できないでいる娘の姿がうかがえ「母への依存」と命名した。なお,「母によく電話やメールをする」は,残余項目となった。

以上より,青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度として,「母への支え」,「過去の対立・葛藤」,「母の支配」,「母への信頼」,「母への依存」の５因子が抽出された。

当初想定した 6 領域のうち「不信・拒否」が,逆転項目として「母への信頼」に入り 5 領域となったが,ほぼ想定通り,青年期後期から成人期初期における母娘関係をとらえる尺度を作成できたと考える。

(3)信頼性の検討

青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度の信頼性を検討するためにα係数を算出した（Table2-3-8)。その結果,「母への支え」α=.78,「過去の対立・葛藤」α=.90,「母の支配」α=.85,「母への信頼」α=.87,「母への依存」α=.80 で,各因子とも十分な内的整合性を有していることが確認された。

(4) ライフステージ及び母との同・別居による母娘関係

ライフステージ及び母との同・別居の違いによる母娘関係のあり方を明らかにするために,2 要因の分散分析をおこなった。結果は Table 2-3-9 に示す通りである。

なお,主効果のみられたものについて,各群の差異が明らかになるよう図示した(Fig.1～3)。その際,値を項目平均(尺度値を項目数で除した値)で示した。

ライフステージによる有意差がみられたのは「母への支え」,「母の支配」,「母への依存」で,母との同・別居による有意差が認められたのは「母の支配」,「母への依存」であった。「過去の対立・葛藤」,「母への信頼」はライフステージ及び母との同・別居による有意差はみられなかった。また,いずれの因子とも交互作用は抽出されなかった。なお,多重比較は Bonferroni 法によった。

「母への支え」では,ライフステージで,青年期群と子育て群（$t(427)=3.24$, $p<.01$）,未婚群と子育て群（$t(427)=2.53$, $p<.05$）で有意差がみられ(Fig.2-3-1),年齢が上がるにつれて,娘の母を支えていきたいという気持ちが強くなっていくのが明らかとなった。

「母の支配」では,ライフステージで,青年期群と子育て群（$t(427)=2.31$, $p<.05$）で有意差がみられ(Fig.2-3-2),年齢が上がるにつれ,娘からみた母の娘への支配は低下していた。また,母との同・別居（$t(427)=3.26$, $p<.01$）でも有意差がみられ,いずれの群においても別居より同居の得点が高かった。

「母への依存」では,ライフステージで,青年期群と未婚群（$t(427)=3.55$, $p<.001$）,青年期群と子育て群（$t(427)=3.82$, $p<.001$）で有意差がみられ（Fig.2-3-3）,年齢が上がるにつれ,娘の母への依存は低下していた。しかし,それも,母との同・別居による差が大きく（$t(427)=3.53$, $p<.001$）,青年期群では母との同・別居による差がさほど見られないが,未婚群・子育て群では母との同・別居による差は非常に大きくなっている。3 群とも別居より同居の得点が高く,なかでも,子育て群の同居は,未婚群の同居より高かった。

Table2-3-9　母娘関係の群別,同・別居による分散分析結果　　N=433

	青年期群 (N=171)		未婚群 (N=113)		子育て群 (N=149)		群別	同居・別居	群×同・別居	群間比較
	同居 (n=112)	別居 (n=59)	同居 (n=63)	別居 (n=50)	同居 (n=16)	別居 (n=133)	F値	F値	F値	
母への支え	17.13	16.92	17.79	16.58	18.25	18.16	5.60^{**}	2.04	0.85	青年・未婚<子育て
	(3.61)	(3.85)	(3.17)	(3.36)	(3.42)	(3.10)				
過去の対立・葛藤	15.02	16.42	16.16	15.34	17.56	15.36	0.08	0.00	2.24	
	(5.91)	(6.83)	(5.79)	(6.01)	(6.88)	(5.85)				
母の支配	24.58	22.88	23.73	20.38	22.81	20.52	3.21^{*}	10.66^{**}	0.52	別居<<同居
	(6.55)	(6.02)	(7.53)	(5.96)	(7.08)	(6.39)				子育て<青年
母への信頼	34.46	35.09	35.32	35.32	36.25	35.71	0.65	0.07	0.17	
	(7.12)	(7.40)	(7.26)	(6.23)	(8.04)	(6.65)				
母への依存	17.88	17.27	16.76	14.58	17.50	14.56	9.59^{***}	12.47^{***}	2.32	別居<<<同居
	(4.12)	(3.86)	(3.93)	(4.32)	(3.35)	(3.84)				未婚・子育て<<<青年

(　　)内は標準偏差.　　$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.01$,　$^{***}p<.001$.

群間差：　< $p<.05$,　<< $p<.01$,　<<< $p<.001$.

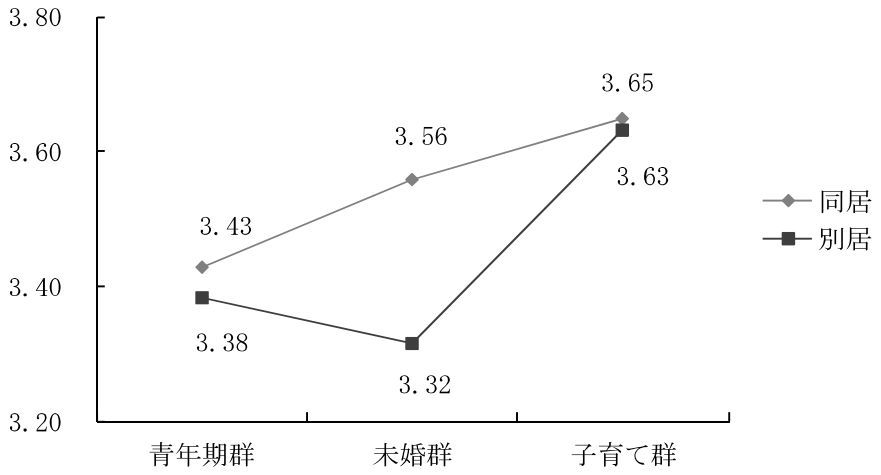

Fig. 2-3-1　母への支え因子の平均得点

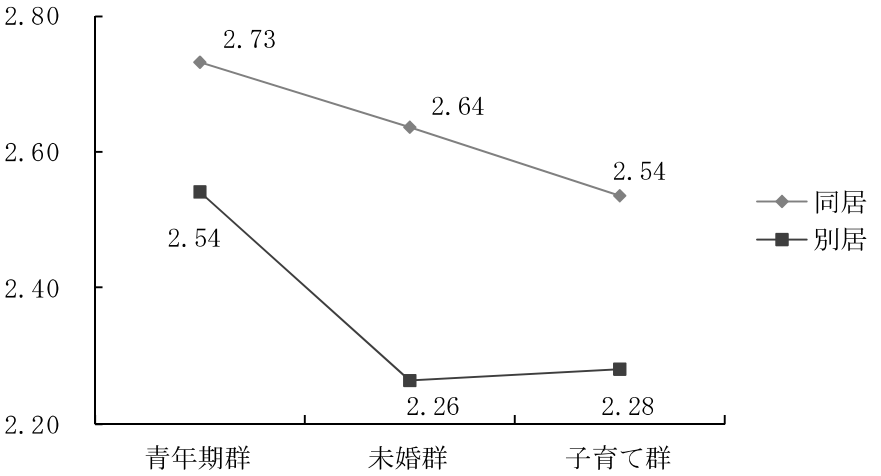

Fig. 2-3-2　母の支配因子の平均得点

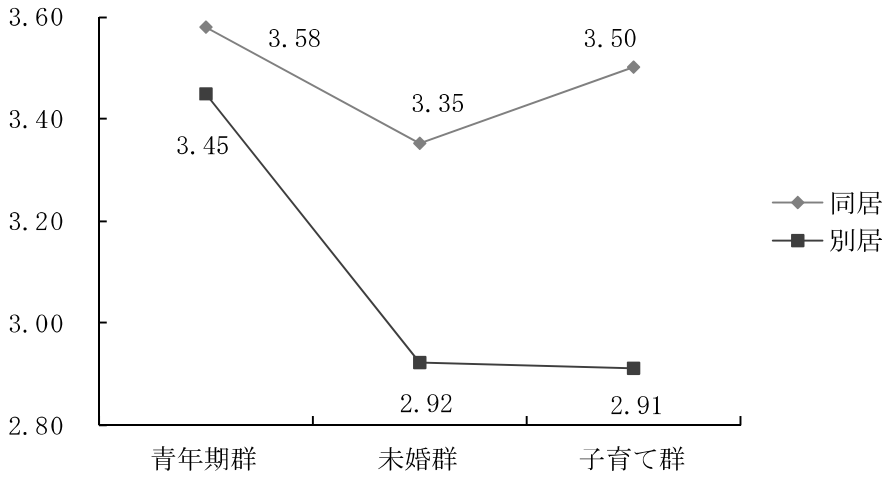

Fig.2-3-3　母への依存因子の平均得点

(5) 学歴の違いによる母娘関係

母との同・別居以外の要因として,学歴の違いによって母娘関係のあり方に違いがあるのかを検討した。学歴では,未婚群と子育て群では学歴構成が異なっており,それが母娘関係のあり方に影響があるのかを検討するために,未婚群・子育て群で 2 要因の分散分析をおこなった。結果は,Table 2-3-10 に示すとおりである。いずれにおいても有意差はみられなかった。

Table 2-3-10　母娘関係の群別,学歴別の分散分析結果　　*N*=267

	未婚群 (*n*=113)			子育て群 (*n*=154)			群別	学歴	群別×学歴
	中・高 (*n*=4)	短大・専 (*n*=15)	大・院 (*n*=94)	中・高 (*n*=56)	短大・専 (*n*=62)	大・院 (*n*=36)			
母への支え	18.25 (1.50)	17.27 (2.74)	17.21 (3.44)	17.96 (4.53)	17.74 (3.35)	17.92 (4.30)	0.90	0.09	0.12
過去の対立・葛藤	17.75 (6.40)	16.47 (5.67)	15.61 (5.93)	15.25 (6.85)	14.85 (6.05)	15.72 (6.05)	0.42	0.05	0.52
母の支配	16.75 (5.12)	19.73 (7.11)	22.88 (6.98)	19.50 (6.69)	21.60 (6.91)	19.56 (7.57)	1.42	1.28	2.97
母への信頼	36.50 (6.66)	34.53 (6.02)	35.39 (6.97)	34.43 (9.17)	35.84 (7.25)	35.22 (9.03)	0.01	0.30	0.31
母への依存	13.25 (3.59)	10.80 (3.55)	12.20 (3.77)	10.82 (3.89)	11.48 (3.38)	10.89 (4.04)	2.10	0.11	1.55

(　　)内は標準偏差.

(6) 就労形態の違いによる母娘関係

就労形態の違いによって母娘関係のあり方に違いがあるのかを検討した。就労形態では,経済的自立が母娘関係に影響があるのか,また子育て群では,就労形態により母からのサポートに差があると予測され,母娘関係のあり方に影響があるのかを検討した。就労形態では,未婚群にのみ大学院生が含まれるため,未婚群・子育て群それぞれで1要因の分散分析をおこなった。結果は,Table2-3-11に示すとおりである。

分散分析の結果,未婚群の「母への依存」で有意($F(4,107)=2.79$, $p<.05$)となり,TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較をおこなったところ,パートタイム＞フルタイム,パートタイム＞自営・他という結果が得られた。他方,子育て群では有意差はみられなかった。

Table 2-3-11　親子関係の就労別の分散分析結果

＜未婚群＞　　N=113

	フルT (n=69)	パートT (n=13)	自・他 (n=11)	無職 (n=5)	院生 (n=15)	F値	
母への支え	16.80 (3.11)	18.15 (3.51)	17.09 (3.08)	19.00 (4.74)	18.13 (3.54)	1.21	
過去の対立・葛藤	15.42 (5.67)	17.54 (5.91)	16.64 (6.04)	16.40 (5.68)	15.20 (7.07)	0.46	
母の支配	21.75 (6.53)	26.00 (5.76)	20.09 (7.73)	24.80 (8.61)	22.00 (8.81)	1.46	
母への信頼	35.77 (6.48)	34.92 (6.06)	33.82 (6.72)	34.20 (9.34)	35.07 (8.56)	0.25	
母への依存	11.71 (3.43)	14.77 (3.17)	10.70 (3.68)	12.00 (4.42)	13.00 (3.48)	2.79*	パートT>フルT,自・他

( )内は標準偏差.　　*$p<.05$.

＜子育て群＞　　N=154

	フルT (n=8)	パートT (n=25)	自・他 (n=6)	無職 (n=115)	F値
母への支え	17.00 (3.70)	18.68 (2.81)	15.50 (7.97)	17.87 (3.97)	1.17
過去の対立・葛藤	19.75 (5.78)	16.68 (6.01)	12.17 (8.26)	14.72 (6.19)	2.60
母の支配	23.75 (6.63)	22.84 (5.01)	17.83 (9.93)	19.71 (7.14)	2.30
母への信頼	32.00 (9.86)	35.88 (5.88)	30.50 (16.49)	35.50 (8.19)	1.12
母への依存	12.88 (3.44)	11.60 (3.11)	12.20 (2.95)	11.12 (3.48)	0.86

( )内は標準偏差.

第4節　考　　察

1. 青年期後期から成人期初期の母娘関係尺度の因子構造の検討

青年期後期から成人期初期の母娘関係尺度として,「母への支え」,「過去の対立・葛藤」,「母の支配」,「母への信頼」,「母への依存」の5因子が抽出された。

「母への支え」は,「母の支えになってあげたい」,「母の気持ちを理解してあげたい」など「何かを母親にしてあげたい」という欲求をあらわしている。母との対等な立場以上に母を支える側としての娘の意識がうかがえ,世代交代を感じさせる領域である。先行研究における青年期の親子関係をとらえる尺度（Table2-1-1）と比較すると,親が子を頼りにする親子関係（落合・佐藤, 1996）に相当する。また,世代交代という意味においては,親から子への世代交代（小沢・湯沢,1989）,一人前扱い（渡邊,1994）なども含まれるものと考える。

「過去の対立・葛藤」は,「以前は母と言い争いが絶えなかった」,「昔は母がいやでしかたがなかった」など過去における母との軋轢をあらわしている。青年期の親子関係ではこれまで取り上げられていない領域であるが,青年期から成人期への移行期に親子関係の再構築が行われることを考慮すれば,この時期固有の因子として抽出されたものと思われる。

「母の支配」は,「私のことに何でも口を出したがる」,「自分の意見を押し付けてくる」など母が娘を自分の支配下に置こうとするものである。「母の支配」は,予備調査で抽出された「紐帯の切れなさ」と「母の束縛」がひとつにまとまって,項目作成のために当初設定した領域「母の支配」に再び戻る結果となった。このことは,予備調査では対象者が大学生集団だけだったのに対し,本調査では対象者の範囲が広がったことにより,当初設定した領域が抽出されたのではないかと考える。先行研究と比較すると,親が子を抱え込む親子関係（落合・佐藤,1996）,親への服従（小高,1998）に相当するものといえよう。

「母への信頼」は,「私の気持ちを理解してくれる」,「私の人生のよき理解者だ」など母と娘の信頼関係をあらわしている。先行研究でも必ず取り上げられている領域であり,信頼感の確立（小沢・湯沢,1989）,母親への愛着(久保田,1993),子が親から信頼・承認されている親子関係（落合・佐藤,1996）などがこれに相当する。

「母への依存」は,「何かにつけつい頼ってしまう」,「買い物で物を選ぶのをよく手伝ってもらう」など娘が母に頼っている状態をあらわしている。先行研究の親への甘え（小沢・湯沢,1989）,母親への情緒的依存（久保田,1993）に相当しており,青年期後期から成人期

初期においても,娘の母への依存は続いているといえよう。

2. ライフステージによる母娘関係の発達的変化

ライフステージによる差がみられたのは,「母への支え」,「母の支配」,「母への依存」であった。

「母への支え」では,年齢が上がるにつれて母を支えたいという意識が高くなっており,娘が母に頼る関係から,成人として時には母に頼られるような相互的な関係に発達・変化していく(落合・佐藤,1996)のがうかがえた。

「母の支配」では,年齢が上がるにつれて得点は下がり,娘が一人の成人として,母との自立した関係が再構成されていくのがうかがえた。

「母への依存」では,青年期後期から成人期初期にかけて急速に低下する。しかし,結婚して子どもができても娘の母への依存は続いている。高橋(1970)は,女子の依存の対象として中学から大学まで母が重要な位置を占めていると指摘しているが,本研究の結果は,成人になっても,結婚して子どもがいても,娘の母への依存は解消されることなく続いていることを示唆している。また,女性は成人になって結婚・出産しても,母との関係は親密的・依存的である(北村・無籐,2001)という指摘とも相通じる。

「過去の対立・葛藤」,「母への信頼」には有意な差はみられず,青年期後期の段階には母娘間の信頼関係が築かれ,過去の問題も多くの場合ほぼ解決済みということになろう。

「過去の対立・葛藤」については,女子青年における母との葛藤などによる精神的受傷は多いにもかかわらず,それが母に対する悪い評価とは結びつきにくいとする見解(山田,1986)や,娘が母との接触や交渉が頻繁で緊密なため相互に傷つけあうことも多いが,信頼感や親密感も多く,親子関係の修復が比較的容易であるとする見解(山田,1988)に沿うものであると考える。しかし他方で,他領域に比較した場合のこの領域の分散(*SD*)の大きさから(Table2-3-9),その個人差が発達差ではとらえきれない他の要因(臨床的問題)をはらんでいるように思われる。

「母の支配」,「母への依存」は,年齢が上がるにつれ低下し,「母への支え」は年齢が上がるにつれて,娘の母を支えていきたいという気持ちが強くなっているという結果は,福島(1992)の「女子では,精神的自立が大学生以降成人期に急激に獲得されていく」という指摘と同様の方向性が本研究でも示されたと考える。

3. 学歴,就労形態の違いによる母娘関係

学歴,就労形態の違いによって母娘関係のあり方に違いがあるのかを検討したが,学歴による差はみられなかった。一方,就労形態で有意な差がみられたのは,未婚群における「母への依存」であり,パートタイムで働く娘はフルタイムや自営・他で働く娘に比べ母に対する依存が強いことが明らかとなった。雇用不安や所得の停滞という現状のなか,未婚群の娘にとって,経済的自立が母娘関係に影響を及ぼしていると考えられる。

4. 成人期初期において母との同居が娘にもたらすものの功罪

母との同・別居による差が認められたのは「母の支配」,「母への依存」であり,両因子とも同居の方が 3 群とも得点が高く,母との日常的な接触頻度が高いことに起因しているものと思われる。

まず,「母の支配」では,学卒後社会人として働く未婚群で同・別居による差が非常に大きい。別居群では,青年期後期から成人期初期にかけて急激に低下するものが,同居群での変化は緩やかである。言い換えれば,成人になり社会人として働くようになっても,娘は母と同居していることで,母からの押し付けや口出し,囲い込みなど「母の支配」を受け続けることになる。そしてそのことが,結果として成人期になっても母への強い依存を生むことに繋がっていくと考えられる。実際,「母への依存」においても,別居群では青年期後期から成人期初期にかけて急激に低下するが,同居群での変化は少ない。母と一緒に買い物をしたり物を選ぶのを手伝ってもらったり,母に頼りすぎていると娘自身が自覚するくらいに,道具的・情緒的両側面で娘が母に頼ってしまう様子がうかがえる。このように学校を卒業して社会人となり,親から物理的に独立して別居していれば遂げたであろうはずの自立が,母と同居していることで困難になることが示唆されよう。

一方,未婚群の成人期初期から子育て期にかけては,別居群では,「母の支配」,「母への依存」とも変化はなく,少なくとも母から独立し別居していれば,成人期以降のライフステージでは,結婚し子どもを持っても母娘関係に変化はないといえる。他方,少数派ながら母と同居している子育て期の娘では,未婚同居群に比べ,「母の支配」はわずかに減少するが,「母への依存」では逆に上昇し,母への物理的・精神的依存を高めている。また,母と同居している子育て期の娘のうち,有職者が無職より若干多かった(χ^2=9.479, df=1, p<.01)。母と娘の心理的結びつきの強さは日常生活における家事・育児・介護といった行動面での結びつきに裏打ちされている(渡邊,2004)というが,母を育児へのサポートとして,また主婦

業・子育てのロールモデルとして頼ることが,「母への依存」の高さの一因となっていると考えられる。北村・無藤（2001）も,出産群のほうが独身群よりも母との親密性が高く,母へサポートを求める気持ちが強いことを示唆している。

以上,本章では,母との同居を続ける未婚の社会人女性が,道具的にも精神的にも母に依存している現状が明らかにされた。このことは,子が親に依存した青年期が長期化し,心理的には青年期をそのまま引きずっていることを示唆しており,子側は学卒後も親と同居することで,親への依存をますます断ち切れないでいる。また,親側も子どもに苦労させまいと,特に娘に対して長期間サポートする（山田,1999）ことで,結果的に娘との同居が長期化してしまい,そのことが晩婚化を推し進める要因のひとつとなっていると考えられる。

これまでわが国では,学卒後,娘の場合,結婚するまでは親元にとどまるというのが慣行であった。しかし,結婚への押しの要因も引きの要因も低下する中で(伊藤,1996),今日のような晩婚化が進行し,結果として,経済的には自立していながら,物理的(生活面)・心理的に親に依存する期間が長期化し,このことが成人としての自立の遅れをもたらしていることは十分に考えられることだろう。いずれにせよ,親側・娘側双方にとって,「パラサイト・シングル」（山田,1999）の生活について今一度再考する必要性があるようである。親側の「子どものために」イデオロギー（宮本・岩上・山田,1997）は娘の結婚をためらわせる要因であり,何よりも娘の自立にとってマイナスでしかないことを親は認識すべきであろう。そして,家族自体の個人化（目黒,1987）が進み,社会のシステムも個人を単位とする方向に変わっていくなかで（落合,1995）,これから「自立した個人」（宮本他,1997）であることを否応なく要求されるであろうことを娘側は認識すべきである。

5. 本研究の問題点と今後の課題

本章では,青年期後期から成人期初期にかけて,どのような母娘関係の展開がみられるのか,また,母との同・別居により母娘関係に違いがみられるのかを検討した。

今後の研究課題としては,青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係のあり方が娘の心理的発達にどのように影響を及ぼすのか,また,母からみた母娘関係についても検討することが必要であると考える。

本研究の問題点としては,対象者のサンプリングの問題があげられる。本研究では未婚群に大学院生を含んでいるが,山岸（2008）が指摘するように自我同一性等との観点から考慮すると,20 歳台前半の大学院生は青年期群に入れたほうが妥当であったと考える(藤

原・伊藤,2008)。なお,本研究の調査対象の大学院では,社会経験を積んだ社会人大学院生が多く在籍し,本研究の対象者の未婚群に含まれる大学院生も23歳から30歳と幅広い年齢であった。うち,20歳台前半の大学院生は,8 名であった。

また,本研究では,青年期後期から成人期初期にかけての年齢層を研究対象としたが,成人期初期の特に未婚群については,これまでも対象者を集めることが困難なためほとんど研究されてこなかった。また,既婚者でも子どもを持たない者については今回の対象者に含まれていない。今日,DINKS を含めさまざまな理由で子どもを持たないカップルの増加を勘案すると,ライフステージ上の一時期として,あるいは一つのライフスタイルとして,成人期初期には無視できない存在だといえる。しかし,これらはいずれもマスとしてデータが非常に得にくい層であるため,今回の結果についてはサンプルの偏りに留保しつつ,今後は,半構造化面接などによる質的な研究によってそれらの部分を補っていく必要があるだろう。

注

1) 調査開始前に内容を説明し,母との離死別等により回答できない場合は記入しなくてよいことを伝えた。
2) 回答したくない場合には,調査票を返信用の封筒に入れ返却してもらうようにした。

第 3 章　成人期初期の未婚女性の母娘関係と心理的健康
＜研究 2＞

第 2 章では,未婚の社会人女性に着目し,青年期後期から成人期初期にかけての女性においてどのような母娘関係の展開がみられるか,また,母との同・別居により母娘関係に違いがみられるのかを検討した。その結果,母と同居を続ける未婚の社会人女性が,道具的（経済的余裕･家事負担のない快適さなど)にも精神的にも親に依存している現状を見出した。

成人になっても心理的に母に依存し,青年期を引きずったままという親子関係の状況は,成人の娘の心理的健康にいかなる影響を及ぼしているであろうか。

これまでは主に臨床現場で,成人になっても母に支配され,追い詰められる娘が数多く報告されてきた (信田,2008;斎藤,1995,2004)。しかし,一般成人において,母娘関係が娘の心理的健康にいかなる影響を及ぼすかについての実証的検討はほとんどなされておらず,晩婚化に伴い,近年急速に増加している成人期初期の未婚女性の適応に母娘関係がどのような影響を及ぼしているかに焦点を当てた研究が必要である。

そこで本章では,青年期後期から成人期初期,そして結婚して子をもうけるまでの女性の心理的健康を発達的視点から捉え,そこに母娘関係のあり方がどのようにかかわっているかを検証することにする。

第1節　心理的 well-being 尺度について

本研究における心理的健康を捉える測度として,西田（2000)の心理的 well-being 尺度を採用することにする。西田（2000)は,Ryff（1989）の Psychological Well-Being の概念に基づき,日本の成人女性を対象に信頼性・妥当性を検討した 6 次元からなる心理的 well-being 尺度を作成し,幅広い年代の成人女性（25～65 歳）においてライフスタイル要因との関連を検討している。

西田・齊藤（2001）によれば,Ryff（1989）の Psychological Well-Being の概念は,成人期全般に適用でき,各期の心理的様相をとらえることができるとしている。人生のさまざまな危機の克服による心理的発達や成人女性が担う多様な役割による心理的発達をとらえることができ,成人女性の心理的発達を把握する指標として適しているという。

Ryff(1989)の提唱したPsychological Well-Beingは,生涯発達的知見および臨床的知見からその基本的な特徴を定義しており（西田, 1999）,「人格的成長」,「人生における目的」,「自律性」,「環境制御力」,「自己受容」,「積極的な他者関係」の6次元からなる。それらは,継続的な個人の成長,人格的成長,成熟,成人の発達など,発達的視点に基づくポジティブな心理的機能としての特性を示しており,それゆえ本研究の心理的適応の指標としてふさわしいと考える。

なお,ここで,心理的well-beingという表現に関して,西田（2000）の尺度では,自尊感情との相関がかなり高い（r=.49～.75）ことや,尺度そのものの内容から考慮すると,心理的well-beingよりも心理的健康と表現するほうが適切だと考えられ,本研究では心理的健康とした。

以上により,本章では,娘の心理的健康を捉える尺度として西田（2000）の心理的well-being尺度を用いて,青年期後期から成人期初期における母娘関係のあり方が,女性の心理的健康にいかに影響を及ぼしているのかを検討する。

西田（2000）の心理的well-being尺度の定義と項目は,以下のとおりである。

心理的well-being尺度(43項目)

人格的成長(8項目)

定義：発達と可能性の連続上にいて,新しい経験に向けて開かれている感覚

- これからも,私はいろいろな面で成長し続けたいと思う
- 新しいことに挑戦して,新たな自分を発見するのは楽しい
- 私には,もう新しい経験や知識は必要ないと思う*
- これ以上,自分自身を高めることはできないと思う*
- 自分らしさや個性を伸ばすために,新たなことに挑戦することは重要だと思う
- 私は,新しい経験を積み重ねるのが,楽しみである
- 私の能力は,もう限界だと思う*
- 私の人生は,学んだり,変化したり,成長したりする連続した過程である

人生における目的(8項目)

定義：人生における目的と方向性の感覚

- 私は現在, 目的なしにさまよっているような気がする*
- 私の人生にはほとんど目的がなく, 進むべき道を見出せない*
- 本当に自分のやりたいことが何なのか, 見出せない*
- 自分がどんな人生を送りたいのか, はっきりしている
- 私はいつも生きる目標を持ち続けている
- 私は, 自分が生きていることの意味を見出せない*
- 私の人生は退屈で, 興味がわかない*
- 私は, 自分の将来に夢を持っている

自律性(8 項目)

定義：自己決定し, 独立, 内的に行動を調整で生きるという感覚

- 私は何かを決めるとき, 世間からどうみられているかとても気になる*
- 重要なことを決めるとき, 他の人の判断に頼る*
- 自分の生き方を考えるとき, 人の意見に左右されやすい*
- 自分の考え方は, そのときの状況や他の人の意見によって, 左右されがちである*
- 何かを判断するとき, 社会的な評価よりも自分の価値観を優先する
- 私は, 自分の行動は自分で決める
- 自分の行動を決定するとき, 社会的に認められるかどうかをまず考える*
- 習慣にとらわれず, 自分自身の考えに基づいて行動している

自己受容(7 項目)

定義：自己に対する積極的な感覚

- 私は自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる
- 私は, 自分自身が好きである
- 私は, 自分の性格についてよく悩むことがある*
- 良い面も悪い面も含め, 自分自身のありのままの姿を受け入れることができる
- 私は, 今とは異なる自分になりたいとよく思う*
- 私は, これまでの人生において成し遂げてきたことに, 満足している
- 私は, 自分に対して肯定的である

環境制御力（6 項目）

定義：複雑な周囲の環境を統制できる有能さの感覚

- 私は, うまく周囲の環境に適応して, 自分を生かすことができる
- 状況をよりよくするために, 周りに柔軟に対応することができる
- 自分の身に降りかかってきた悪いことを, 自分の力でうまく切り抜けることができる
- 自分の周りで起こった問題に, 柔軟に対応することができる
- 私の今の立場は, 様々な状況に折り合いをつけながら, 自分で作り上げたものである
- 私は, 周囲の状況にうまく折り合いをつけながら, 自分らしく生きていると思う

積極的な他者関係（6 項目）

定義：暖かく, 信頼できる他者関係を築いていけるという感覚

- 私は, あたたかく信頼できる友人関係を築いている
- 他者との親密な関係を維持するのは, 面倒くさいことだと思う*
- 私はこれまでに, あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった*
- 私は他者といると, 愛情や親密さを感じる
- 私は他者に強く共感できる
- 自分の時間を他者と共有するのはうれしいことだと思う

*：逆転項目

第 2 節　心理的健康との関連

1. 目　的

成人期初期の未婚女性に着目し,青年期後期から子育て期における女性の心理的健康とそこにおける母娘関係のあり方との関連を明らかにすることを目的とする。

2. 方　法

(1)対象者と手続き

＜研究 1＞の〈調査 3〉と同様である。

(2) 調査時期

＜研究 1＞の〈調査 3〉と同様である。

(3)調査内容

1) 青年期後期から成人期初期における母娘関係

第 2 章で作成した青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度（5 因子 35 項目）を用いた。下位尺度は,「母への支え」,「過去の対立・葛藤」,「母の支配」,「母への信頼」,「母への依存」の 5 次元から構成され,回答は,「非常にあてはまる(5)」,「あてはまる(4)」,「どちらでもない(3)」,「あてはまらない(2)」,「全くあてはまらない(1)」の 5 件法で評定を求めた。

2) 女性の心理的健康

Ryff（1989）の Psychological Well-Being を西田（2000)が翻訳し,日本の成人女性において信頼性・妥当性が検討された「心理的 well-being 尺度」(43 項目,6 件法)を用いた。下位尺度は,「人格的成長」,「人生における目的」,「自律性」,「環境制御力」,「自己受容」,「積極的な他者関係」の 6 次元から構成され,回答は,「非常にあてはまる(6)」,「あてはまる(5)」,「ややあてはまる(4)」,「ややあてはまらない(3)」,「あてはまらない(2)」,「全くあてはまらない(1)」の 6 件法で評定を求めた。

3) フェイスシート

＜研究 1＞の〈調査 3〉と同様である(Table 2-3-1 ～ Table 2-3-7 参照)。

(4)倫理的配慮

＜研究 1＞の〈調査 3〉と同様である。

3. 結　果

(1)心理的健康の因子構造の検討

西田（2000）とは参加者の年齢が異なるため,心理的健康の因子構造を確認するために因子分析をおこなった。西田(2000)と同様に,6 因子で主成分分析,バリマックス回転による分析をした。分析結果は,Table 3-2-1 に示すとおりである。

Table3-2-1 心理的健康尺度の因子分析結果（バリマックス回転）　　*N*=154

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
人格的成長（α＝.83）							
これからも、私はいろいろな面で成長し続けたいと思う	.78	−.14	−.03	.07	.10	.11	.66
私は、新しい経験を積み重ねるのが、楽しみである	.69	−.17	−.03	.06	.22	.18	.59
自分らしさや個性を伸ばすために、新たなことに挑戦することは重要だと思う	.64	−.04	−.07	.08	.07	.10	.43
新しいことに挑戦して、新たな自分を発見するのは楽しい	.63	−.24	−.04	.06	.26	.22	.58
これ以上、自分自身を高めることはできないと思う*	−.50	.31	.23	−.11	−.02	−.16	.43
私には、もう新しい経験や知識は必要ないと思う*	−.49	.16	.05	.03	.06	−.07	.27
私の人生は、学んだり、変化したり、成長したりする連続した過程である	.47	−.28	−.04	.21	.23	.16	.42
私の能力は、もう限界だと思う*	−.40	.21	.21	−.29	.01	−.21	.37
何かを判断するとき、社会的な評価よりも自分の価値観を優先する	.39	−.03	−.27	.13	.24	−.12	.31
人生における目的（α＝.89）							
私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道を見出せない*	−.21	.73	.22	−.19	−.07	−.22	.71
本当に自分のやりたいことが何なのか、見出せない*	−.12	.73	.14	−.17	−.11	−.03	.60
私は現在、目的なしにさまよっているような気がする*	−.12	.72	.18	−.14	−.04	−.25	.65
自分がどんな人生を送りたいのか、はっきりしている	.17	−.62	−.03	.10	.19	.06	.46
私は、自分の将来に夢を持っている	.37	−.59	.03	.07	.15	.04	.51
私は自分が生きていることの意味を見出せない*	−.17	.54	.28	−.30	−.07	−.30	.59
私はいつも生きる目標を持ち続けている	.36	−.50	−.10	.25	.26	.11	.53
私の人生は退屈で、興味がわかない*	−.28	.47	.25	−.32	−.07	−.28	.54
自律性（α＝.79）							
自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい*	−.02	.09	.72	−.05	−.14	.11	.56
自分の考え方は、そのときの状況や他の人の意見によって、左右されがちである*	−.05	.20	.68	−.08	−.15	.07	.54
重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る*	−.17	.10	.65	−.12	−.11	.06	.50
私は何かを決めるとき、世間からどうみられているかとても気になる*	−.08	.06	.56	−.12	−.02	−.01	.34
自分の行動を決定するとき、社会的に認められるかどうかをまず考える*	−.15	.10	.52	−.02	.10	−.15	.34
私は、自分の行動は自分で決める	.26	−.12	−.37	.19	.28	−.11	.34
自己受容（α＝.81）							
私は、自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる	.12	−.21	−.13	.69	.22	.21	.63
よい面も悪い面も含め自分自身のありのままの姿を受け入れることができる	.11	−.19	−.08	.64	.33	.07	.58
私は、自分自身が好きである	.13	−.18	−.16	.62	.17	.12	.51
私は、自分に対して肯定的である	.17	−.12	−.10	.60	.10	.04	.43
環境制御力（α＝.79）							
状況をよりよくするために、周りに柔軟に対応することができる	.17	−.11	−.02	.07	.69	.28	.60
自分の身に降りかかってきたわるいことを、自分の力でうまく切り抜けることができる	.13	−.18	−.17	.20	.64	.03	.52
自分の周りで起こった問題に、柔軟に対応することができる	.10	−.12	−.22	.16	.61	.17	.50
私は、うまく周囲の環境に適応して、自分を生かすことができる	.04	−.12	.05	.30	.58	.29	.52
私の今の立場は、様々な状況に折り合いをつけながら、自分で作り上げたものである	.28	−.10	.09	.29	.35	−.05	.31
積極的な他者関係（α＝.76）							
他者との親密な関係を維持するのは、面倒くさいことだと思う*	−.07	.17	.15	−.02	−.07	−.66	.49
私はこれまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった*	−.02	.17	.18	−.21	.02	−.57	.43
私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている	.14	−.13	.06	.14	.13	.57	.40
私は他者といると、愛情や親密さを感じる	.23	−.08	.26	.09	.21	.55	.48
自分の時間を他者と共有するのはうれしいことだと思う	.20	−.11	.26	.02	.17	.50	.41
私は他者に強く共感できる	.25	−.03	.28	.13	.15	.37	.32
私は、これまでの人生において成し遂げてきたことに、満足している	.06	−.32	−.13	.30	.27	.15	.31
私は、今とは異なる自分になりたいとよく思う*	.18	.26	.39	−.41	−.07	−.12	.43
習慣にとらわれず、自分自身の考えに基づいて行動している	.32	−.03	−.28	.16	.34	−.11	.33
私は、自分の性格についてよく悩むことがある*	.11	.09	.48	−.47	−.10	−.14	.50
私は、周囲の状況にうまく折り合いをつけながら自分らしく生きていると思う	.13	−.19	−.04	.50	.49	.13	.55
負荷量の二乗和	4.06	4.01	3.46	3.30	2.99	2.68	
寄与率（%）	9.44	9.32	8.05	7.68	6.96	6.22	

*は逆転項目.

結果は,西田(2000)と同様6因子が抽出され,一部残余項目が出たものの因子ごとの項目のまとまりもほぼ同様のものとなった。

本研究では,残余項目を出さずに西田（2000)と同じ因子構造と項目内容で心理的健康を検討し,研究結果を比較することも考えたが,西田(2000)とは調査対象者の年齢に違いがあり,今回は心理的発達に母娘関係がどう影響を及ぼしているかを検討することを主たる目的としたため,年齢に沿った項目内容の本結果を採用した。

以下,西田(2000）の結果との異同を中心にみていくことにする。

第1因子は,新しいことに挑戦し,新たな自分を発見するという「人格的成長」を示す内容で,これに「自律性」の「何かを判断するとき,社会的な評価よりも自分の価値観を優先する」が負荷した。

第 2 因子は,自分の人生の目的や進むべき方向が明確だという「人生における目的」を示す内容で,項目に変動はない。

第 3 因子は,自分の生き方を考えたり,何か重要な判断をするとき,人の意見に左右されないという「自律性」を示す内容で,「習慣にとらわれず,自分自身の考えに基づいて行動している」は残余項目となった。

第4因子は,自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができるという「自己受容」を表す内容である。このうち「私は,自分の性格についてよく悩むことがある」「私は,今とは異なる自分になりたいとよく思う」はともに「自律性」にも負荷し,また,「私は,これまでの人生において成し遂げてきたことに,満足している」はいずれにも負荷せず,この3項目が残余項目となった。

第5因子は,周囲に柔軟に対応し,折り合いをつけ適応できるという「環境制御力」と命名された内容である。このうち「私は,周囲の状況にうまく折り合いをつけながら,自分らしく生きていると思う」は,「自己受容」にも高く負荷していたため残余項目とした。

第6因子は,友人関係や信頼できる人間関係を積極的に築いていこうとするもので「積極的な他者関係」と命名された。なお,項目に変動はない。

以上のように,青年期群が加わったことで,若干の項目の移動がみられ,特に西田（2000）で「自己受容」に含まれていた項目が「自律性」あるいは「環境制御力」に負荷したが,因子構造はおおむね西田（2000）の結果が確認できた。

(2)信頼性の検討

尺度の信頼性を検討するためにα係数を算出した(Table 3-2-1)。その結果,「人格的成長」

α=.83,「人生における目的」α=.83,「自律性」α=.83,「環境制御力」α=.83,「自己受容」α=.83,「積極的な他者関係」α=.83 で，各因子とも十分な内的整合性を有していることが確認された。

(3)心理的健康の発達的変化

心理的健康の発達的変化を明らかにするために,心理的健康の 6 因子について,群別の平均値と *SD* を算出し,1 要因 3 水準で分散分析をおこなった。結果は,Table 3-2-2 に示すとおりである。その際,値を項目平均(因子に含まれる項目の単純加算値を項目数で除した値)で示した。なお,多重比較は Bonferroni 法によった。

群の主効果がみられたのは,「自律性」,「自己受容」,「積極的な他者関係」の 3 因子で,「自律性」(Fig.3-2-1 参照)では,青年期群と未婚群（$t(439)=2.15$, $p<.10$）,青年期群と子育て群（$t(439)=2.43$, $p<.05$）で有意な差がみられ,年齢が上がるにつれて自律性が強くなっていくのが明らかとなった。「自己受容」(Fig.3-2-2 参照)では,未婚群が子育て群より有意に高く（$t(439)=2.23$, $p<.10$）,「積極的な他者関係」(Fig.3-2-3 参照)では,青年期群が子育て群より有意に高かった（$t(439)=3.06$, $p<.01$)。他の因子では発達的変化はみられなかった。

Table3-2-2 心理的健康の平均値と群による分散分析の結果　　*N*=443

	青年期群 (*n*=175)	未婚群 (*n*=113)	子育て群 (*n*=154)	*F*値	
人格的成長	4.82 (0.68)	4.83 (0.64)	4.72 (0.59)	1.49	
人生における目的	4.16 (0.98)	4.24 (0.96)	4.19 (0.87)	0.25	
自律性	3.55 (0.86)	3.77 (0.83)	3.78 (0.80)	3.69^{*}	青年<子育・未婚
自己受容	3.93 (0.94)	4.14 (0.94)	3.89 (0.85)	$2.76^{\dagger}$	子育<未婚
環境制御力	4.03 (0.76)	3.99 (0.68)	4.01 (0.68)	0.11	
積極的な他者関係	4.51 (0.76)	4.38 (0.71)	4.26 (0.68)	4.72^{**}	子育<<<青年

(　　)は標準偏差.　$^{\dagger}p<.10$,　$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.01$.
群間差：<　p<.10,　<<<　p<.01.

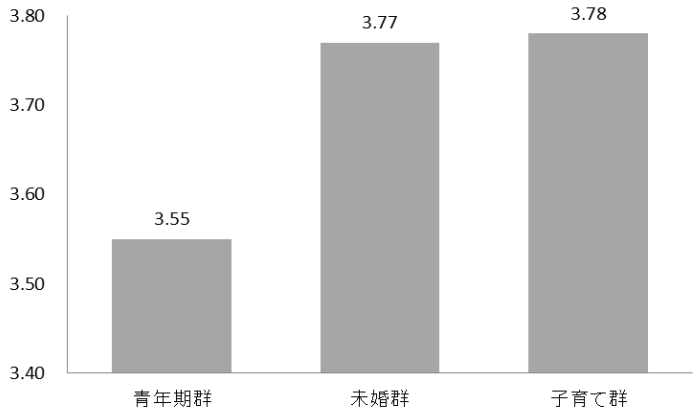

Fig.3-2-1　自律性因子の平均得点

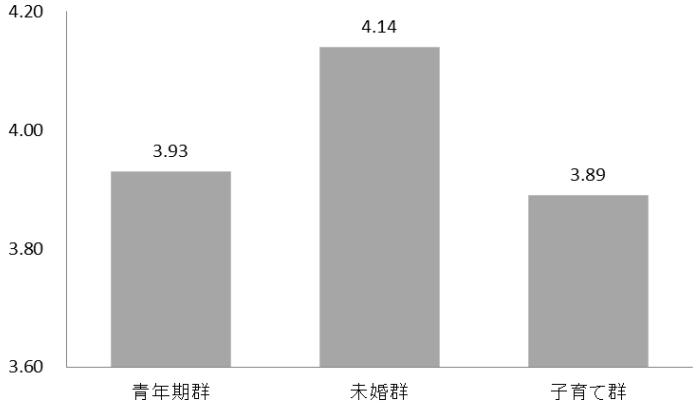

Fig.3-2-2　自己受容因子の平均得点

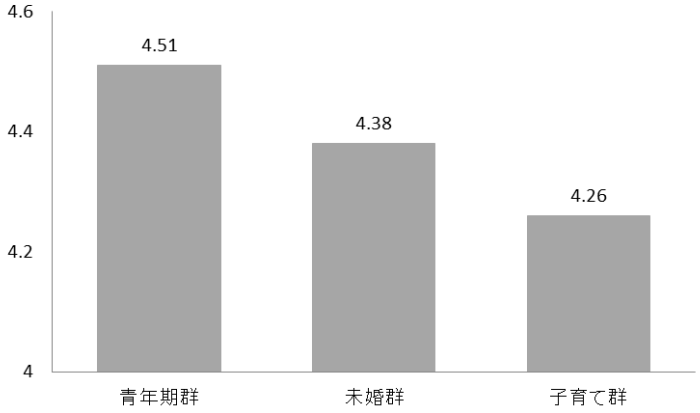

Fig.3-2-3　積極的な他者関係因子の平均得点

(4)母娘関係と心理的健康の各尺度間の関連性

親子関係の 5 因子「母への支え」,「過去の対立・葛藤」,「母の支配」,「母への信頼」,「母への依存」と心理的 well-being の 6 因子「自己受容」,「積極的な他者関係」,「自律性」,「環境制御力」,「人生における目的」,「人格的成長」との関連性を明らかにするために,群別に相関係数を求めた。分析結果は,Table 3-2-3 に示すとおりである。

Table 3-2-3　母娘関係尺度と心理的well-being尺度の各因子間の相関

＜青年期群＞ (n=175)

	人格的成長	人生における目的	自律性	自己受容	環境制御力	積極的な他者関係
母への支え	.07	.14	-.09	-.02	-.06	.16*
過去の対立・葛藤	.00	-.07	-.16*	-.08	-.15	-.25**
母の支配	-.01	-.01	-.31**	-.04	.03	-.08
母への信頼	.15*	.22**	.15	.21**	.15	.35**
母への依存	-.09	-.11	-.15	-.08	-.14	-.00

＜未婚群＞ (n=113)

	人格的成長	人生における目的	自律性	自己受容	環境制御力	積極的な他者関係
母への支え	.21*	.15	-.22*	.15	.05	.32**
過去の対立・葛藤	-.06	-.19*	-.06	-.23*	-.10	-.15
母の支配	-.21*	-.17	-.40**	-.26**	-.15	-.17
母への信頼	.17	.33**	-.01	.27**	.12	.35**
母への依存	-.07	-.03	-.30**	-.14	-.23*	.11

＜子育て群＞ (n=154)

	人格的成長	人生における目的	自律性	自己受容	環境制御力	積極的な他者関係
母への支え	.05	.11	.02	.13	.19*	.23**
過去の対立・葛藤	.05	.02	-.09	-.10	-.04	.01
母の支配	-.04	-.06	-.18*	.01	-.05	-.08
母への信頼	.05	.19*	.14	.20*	.19*	.26**
母への依存	.02	-.00	-.13	.10	.09	.15

*p<.05, **p<.01.

1) 青年期群における母娘関係と心理的 well-being 尺度の各因子間の関連性

「母への支え」は「積極的な他者関係」と正の関連があり,「過去の対立・葛藤」は,「自律性」,「積極的な他者関係」と負の関連があった。また,「母の支配」は「自律性」と負の関連があり,「母への信頼」は「人格的成長」,「人生における目的」,「自己受容」,「積極的な他者関係」と正の関連が見られた。

全体的に相関係数はさほど強い関係がみられるわけではないが,「母への信頼」は母娘関係の他の因子に比べて,心理的 well-being の４つの側面に関連しており,「母への信頼」が娘の心理的発達に特に関わっていると考えられる。

2) 未婚群における母娘関係と心理的 well-being 尺度の各因子間の関連性

「母への支え」は,「人格的成長」,「積極的な他者関係」と正の関連があり,「自律性」とは負の関連があった。「過去の対立・葛藤」は,「人生における目的」,「自己受容」,「積極的な他者関係」と負の関連があった。また,「母の支配」は,「自律性」,「自己受容」と負の関連があり,「母への信頼」は,「人生における目的」,「自己受容」,「積極的な他者関係」と正の関連がみられた。「母への依存」は「人生における目的」,「自律性」,「環境制御力」と負の関連があった。

未婚群は,3 群の中で,母娘関係と心理的 well-being 尺度の各因子間の関連がもっとも多くみられ,母娘関係の 5 つの側面のすべてが娘の心理的発達に何らかの関連性があると考えられる。

3) 子育て群における母娘関係と心理的 well-being 尺度の各因子間の関連性

「母への支え」は,「環境制御力」,「積極的な他者関係」と相関があり,「過去の対立・葛藤」は,「自己受容」と負の相関があった。また,「母への信頼」は,「人生における目的」,「自己受容」,「環境制御力」,「積極的な他者関係」と正の関連が見られ,「母への依存」は,「積極的な他者関係」と正の関連があった。

青年期群と同様に,全体的に数値上ではさほど強い相関関係がみられるわけではないが,「母への信頼」は母娘関係の他の因子に比べて,心理的 well-being の４つの側面に関係しており,「母への信頼」が娘の心理的発達に特に関わっていると考えられる。

(4)母娘関係が心理的健康に及ぼす影響

母娘関係が,青年期後期から成人期初期の女性の心理的健康にどのように影響を及ぼしているのかを明らかにするために,群別に重回帰分析をおこなった。

母娘関係の5因子を説明変数に,心理的健康の各因子を目的変数として,変数一括投入法にておこなった。結果は,Table 3-2-4に示すとおりである。

Table 3-2-4　母娘関係の各因子を説明変数とし,心理的健康の各因子を目的変数としたときの重回帰分析結果　(数値は標準偏回帰係数)

＜青年期群＞　(n=175)

	人格的成長	人生における目的	自律性	自己受容	環境制御力	積極的な他者関係
母への支え			$-.22^{*}$	$-.24^{*}$	$-.24^{*}$	
過去の対立・葛藤					$-.15^{\dagger}$	
母の支配			$-.26^{**}$		$.16^{*}$	
母への信頼	$.27^{*}$	$.32^{**}$	$.26^{*}$	$.45^{***}$	$.32^{**}$	$.45^{***}$
母への依存	$-.17^{*}$	$-.23^{**}$	$-.21^{**}$	$-.15^{\dagger}$	$-.19^{*}$	$-.15^{\dagger}$
決定係数(R^2)	.05	$.10^{**}$	$.19^{***}$	$.11^{**}$	$.11^{**}$	$.17^{***}$

＜未婚群＞　(n=113)

	人格的成長	人生における目的	自律性	自己受容	環境制御力	積極的な他者関係
母への支え	$.34^{*}$					$.24^{\dagger}$
過去の対立・葛藤						
母の支配			$-.34^{**}$			
母への信頼		$.42^{**}$		$.24^{\dagger}$		$.23^{\dagger}$
母への依存	$-.25^{*}$	$-.27^{*}$		$-.38^{**}$	$-.43^{**}$	
決定係数(R^2)	$.13^{*}$	$.16^{**}$	$.22^{***}$	$.20^{***}$	$.14^{**}$	$.16^{**}$

＜子育て群＞　(n=154)

	人格的成長	人生における目的	自律性	自己受容	環境制御力	積極的な他者関係
母への支え					$.18^{\dagger}$	
過去の対立・葛藤						
母の支配						
母への信頼		$.27^{*}$	$.24^{*}$	$.22^{\dagger}$	$.21^{\dagger}$	$.22^{\dagger}$
母への依存			$-.17^{\dagger}$			
決定係数(R^2)	.02	.05	$.08^{*}$	.05	$.09^{*}$	$.10^{*}$

$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$.

まず, 青年期群の特徴として, 「母への信頼」が心理的健康の 6 因子すべてに正の効果をもち, 特に「自己受容」と「積極的な他者関係」では強い規定力を示していた。また「母への依存」も, 6 因子すべてに負の効果がみられ, 青年期後期の女性にとって, 母との信頼関係が強く, かつ, 母に対する依存が低いことが, 心理的健康と結びついていることを示唆しているといえよう。一方,「母への支え」は, 青年期群では「自律性」,「自己受容」,「環境制御力」で負の効果がみられた。なお,「母の支配」は「自律性」に負,「環境制御力」に正の規定力を,「過去の対立・葛藤」は,「環境制御力」に負の規定力を有していた。

次に, 未婚群の特徴として, 青年期群と比べ, 母娘関係の各側面が心理的健康に関連することが少なくなっていることがみてとれる。青年期群では, 心理的健康の 6 因子すべてに正の効果がみられた「母への信頼」が, 未婚群では「人生における目的」,「自己受容」,「積極的な他者関係」の 3 因子であった。また,「母への依存」は,「人格的成長」,「人生における目的」,「自己受容」,「環境制御力」の 4 因子で負の効果がみられた。影響を及ぼす側面は減少したが, 青年期群に比べ全般に規定力が上がっており, 特に後二者で高かった。未婚群では青年期群以上に, 母に対する依存が低いことが, 心理的健康と結びついていた。なお,「母の支配」は, 青年期群と同様「自律性」に負の効果がみられた。他方,「母への支え」は, 青年期群とは逆転して「人格的成長」,「積極的な他者関係」に正の規定力を有していた。

最後に, 子育て群では, 母娘関係の心理的健康への関連はさらに少なくなり,「母への信頼」が,「人格的成長」を除く 5 因子に正の効果がみられた。また,「母への支え」は,「環境制御力」に正の,「母への依存」は,「自律性」に負の規定力を有していた。しかし, いずれの場合もその値は全般に低い。

これらから, 青年期から成人期初期にかけての娘にとって母との信頼関係は, 心理的発達に重要な役割を果たしているといえよう。また,「母への依存」は, 青年期群・未婚群ともに心理的健康に対して負の効果がみられ, 特に未婚群ではその影響は大きいが, 子育て群では「自律性」に負の関連がみられるのみだった。自らの家庭を持つ子育て中の娘にとって, 母との関係は心理的健康にほとんど影響しなくなっているといえよう。

第3節　考　察

本章では,近年の晩婚化に伴い,学卒後,社会人になっても親元にとどまり続ける成人期初期の未婚女性に着目し,青年期後期から子育て期における女性の心理的健康とそこにおける母娘関係のあり方との関連を明らかにすることを目的とした。心理的健康をとらえる測度として,Ryff(1989)のPsychological Well-Beingの6次元からなる尺度（西田,2000）を用いた。抽出された因子は,対象年齢が異なることから多少の項目の移動はみられたが,おおむね西田(2000）と同様の結果が得られた。

1. 心理的健康の発達的変化

心理的健康において,ライフステージによる差がみられたのは,「自律性」,「自己受容」,「積極的な他者関係」の3因子であった。

「自律性」では,年齢が上がるにつれて上昇し,西田（2000）の結果と同様だった。特に,青年期と成人期以降で差が開き,学生から社会人あるいは親となることによって自律性が高まるのだといえよう。福島（1992）も,中学生から成人を対象とした研究で,女子では,精神的自立が大学生以降に急激に獲得されていくとしており,本研究と同様の結果だった。

「自己受容」では,未婚群が最も高く,次いで青年期群,子育て群の順で子育て群が最も自己受容が低かった。子育て中の母は,育児不安（沢宮・田上,2005;相良,2007）や育児ストレス（伊藤他,2002）を抱えており,一方で子どもや育児への肯定的感情を強くもちながら,他方,これとは逆の育児や子どもの存在への否定的な感情ももつアンビバレントな心理状況だと言われている（柏木・若松,1994)。このことから,子育て中の母親が,子育てをしている現状を自分の人生のなかではっきりと位置付けることができない,つまり,現在の自分の生き方をそのまま受け入れがたいのではないかと思われる。また,本研究では,子育て群の母は専業主婦が大半であり,育児期の専業主婦が「個」としての欲求を強くもっている（平山,1999）ことも,育児に追われる自分自身の姿をありのままに受け入れられないでいる要因のひとつになっているといえよう。

「積極的な他者関係」では,年齢が上がるにつれむしろ低下している。青年期群は,大学生であり活動範囲が広いのに対し,未婚群は,有職の社会人のため活動範囲が職場に集中するであろうし,子育て群の母は大半が専業主婦のため,大学生や有職の社会人ほどには社会とのかかわりが多くないと考えられる。また,上記したように,子育て期は,人間関係も子ど

もや家族に限定されがちである。西田（2000）では,子育てが終了した中年期以降（55～65歳）で高い値を示しており,このことから,女性は家庭・家族を持つことで「積極的な他者関係」はいったん低下するが,子育て終了後再び上昇するというU字型を描くものと考えられる。

2. 母娘関係が心理的健康に及ぼす影響

母娘関係が,青年期後期から成人期初期の女性の心理的健康にどのように影響を及ぼしているのかを検討するために群別に重回帰分析をおこなった。

青年期群では,青年期後期の女性にとって,母への信頼が高く,かつ,母に対する依存が低いことが,心理的健康と結びついていることが明らかとなった。なかでも,母への信頼は「自己受容」および「積極的な他者関係」と強く関連しており,青年期後期においても,女子にとっては母との信頼関係が自己を受容し,他者関係を築き上げる重要なアンカー・ポイントになっているのだといえる。

福島（1992）は,中学生から成人を対象とした研究で,女子は,親からの独立の意識が男子に比べ緩やかに上昇し,それと平行して親との信頼関係の確立がなされ,その信頼関係を軸として自己の確立にいたることを示唆している。青年期後期における心理的発達において,母への信頼が築けているか否かが大きな課題だといえよう。

次に,未婚群では,青年期群と比べ母娘関係の各側面が心理的健康に関連することが少なくなっている。しかし,全般に決定係数は他の群に比べ高くなっており,むしろ,未婚群の方が,母との関係のあり方が娘の心理的健康に大きな影響を及ぼしていると考えられる。特に「母への依存」は,青年期群に比べ影響を及ぼす側面は減少したものの,影響の程度は上昇しており,なかでも「自己受容」,「環境制御力」とは強く関連していた。すなわち,成人期になっても母への依存が過度に続くと,ありのままの自己を受容しにくく,周囲の人々や生じた出来事に柔軟に対処していく力が損なわれてしまうことを示唆している。また,成人期においてもなお「母の支配」が続くことが娘の自律性を阻むひとつの要因といえる。このように,これまで臨床事例を通して指摘されてきた（河野,1995；木村・馬場,1988；信田,2008；斎藤,1995,2004）母の緩やかな支配やそれに絡めとられた娘の依存が,娘の側に自己肯定感や自律性の欠如を生み,外界への対処能力を損ねてしまうことを実証的に明らかにできた意義は大きい。

なお,「母への支え」は,「人格的成長」,「積極的な他者関係」で影響がみられた。他

方,青年期群では「自律性」や「自己受容」,「環境制御力」と負の関連が見られており,この段階では,「母への支え」というより母にまだ寄り添っていたいという紐帯の切れなさの現われと考えられる。青年期後期のアイデンティティの確立を経て,成人期になりようやく真の意味で母を支えたいと思えることが,人格的成長や積極的他者関係へと繋がっていくと思われる。

子育て群では,母娘関係の心理的健康への関連はさらに少なくなり,その影響の程度も全般に低くなっている。子育て中の娘にとっては,母との関係でたとえ課題の積み残しがあったとしても,自らの家庭を持つことで大方親との関係が清算され（富岡・高橋,2005）,親との関係から夫との関係に移行していくものと考えられる。

ちなみに,心理的健康の6因子の合計得点を用いて,母娘関係の各因子を説明変数として重回帰分析をおこなったところ,青年期群は R^2 =.18(p<.001),未婚群は R^2 =.21(p<.001),子育て群は R^2 =.09 （p<.05）だった。成人期初期の未婚の娘にとって母との関係のあり方が心理的健康に大きな影響を及ぼすことを示唆したといえる。同様の指摘が,他の研究(Barnett et al,1991；北村・無藤,2001)でもなされており,成人の未婚女性にとって母との関係の質が心理的適応に影響を及ぼす要因になっている。

その一方で,Table 3-2-4 の決定係数が全般的に低いものであったが,この点は,例えば子育て中の娘が親との関係から夫との関係に移行していくことが推測されたように,心理的健康に対して母娘関係だけでなく他の要因も影響していることが考えられる。質問紙ではとらえきれなかった関係性の側面や発達過程の個別性等,今後はそれら他の要因を視野に入れて検討する必要があるだろう。

3. 本研究の問題と今後の課題

本章では,学卒後,社会人になっても親元にとどまり続ける成人期初期の未婚女性に着目し,青年期後期から子育て期における女性の心理的健康とそこにおける母娘関係のあり方との関連を検討した。

これまでの親子関係研究はもっぱら青年期までで,成人期初期を視野に入れた発達研究は非常に少ない。その理由のひとつが,この年齢の未婚の社会人女性からデータが得にくいという事情がある。本研究では,さまざまな方法を介して対象者を募ったが,サンプリングの問題はやはり課題のひとつといえる。また,女性の生き方が多様化している今日,成人女性の生き方はさまざまであり,結婚そのものを人生の選択肢として選ばない女性や,DINKS

を含めさまざまな理由で子どもを持たない女性など,それらは一つのライフスタイルとして無視できない存在になってきている。今後は,半構造化面接などによる質的な研究によってそれらの部分を補っていく必要があるだろう。

注

1）調査開始前に内容を説明し,母親との離死別等により回答できない場合は記入しなくてよいことを伝えた。

2）回答したくない場合には,調査票を返信用の封筒に入れ返却してもらうようにした。

第 4 章　親子の対立・葛藤＜研究 3＞

本章では, 大学生を対象に, 親子の対立・葛藤における青年の反応を測定する尺度を作成し, その信頼性と妥当性を検証し, 特徴（性差, 対象差）を明らかにするとともに, それらが精神的自立に及ぼす影響について検討する。そして, それらを参考に＜研究 5＞で, 成人期初期の未婚女性の語る青年期後期における否定的な母親認知と比較し, 類似性のある結果が得られているのかを検証するために用いることとする。

第 1 節　項目の収集〈調査 1〉

1. 目　的

親子の対立・葛藤における青年の反応の項目を収集することを目的とする。

2. 方　法

(1) 調査対象

首都圏Ｘ大学の学生 137 名を対象に実施した。有効回答は, 男性 41 名, 女性 91 名, 計 132 名で, 平均年齢は, 19.54 歳（*SD* =1.13）であった。

(2) 手続き

2012 年 6 月, 講義時間内にて無記名式質問紙調査を実施・回収した。

(3) 調査内容

1) エピソードの自由記述

青年に, ここ 1, 2 年に起きた親子の対立・葛藤場面を想起してもらい, 自由記述によりどのような場面で親子間の対立･葛藤が生じ, その時に青年がどう感じたかを記してもらった。

2) フェイスシート

性別, 年齢, 学年を尋ねた。

(4) 倫理的配慮

調査前に口頭及び文書で, 対象者に調査の目的, 回答の任意性, 個人情報の非特定, そして調査目的のみにデータを用いることを説明してプライバシー保護に努めることを伝えた

上で,調査の協力を依頼した。また,プライバシー保護の観点から質問紙に「糊付の封筒」を添付し,回答後の質問紙を封筒に入れ封をして各自提出してもらった。

3. 結 果

自由記述より 405 のエピソードが得られた。まず,それらを青年の反応に着目して,以下の 3 つのカテゴリーに大別した。

1. 親に対するネガティブな感情反応
2. 自己を優先する感情反応
3. 親に支配されている感情反応

そしてそれら３つの領域を再度分類し,著者のほかに心理学専攻の大学院生２名も加わって,以下の 5 つの領域に分類した。

１．親に対するネガティブな感情反応として

「親への反発」

「親への落胆」

「親の過剰な期待」

２．自己を優先する感情反応として

「自己優先」

３．親に支配されている感情反応として

「親への依存・同調」

これら 5 つの領域のエピソードについての集計は,Table 4-1-1 に示すとおりである。

Table 4-1-1　5つの領域のエピソード数

	男性	女性	合計
親への反発	54	226	280
親への落胆	7	35	42
自己優先	11	24	35
親への依存・同調	8	27	35
親の過剰な期待	3	10	13
	83(20.5%)	322(79.5%)	405(100%)

注：エピソードのうち,領域が複数にまたがっているものは複数でカウントしている。

これら５つの領域「親への反発」「親への落胆」「自己優先」「親への依存・同調」「親の過剰な期待」のエピソードの例として以下のような記述があった。

＜親への反発＞

- 帰りが遅いとしつこく言われる。もう大学生だし,自分だって若い頃は好き勝手やってきたくせに
- 私が好きでやっていることを父に「バカじゃねーのー」と馬鹿にされた。好きな事は好きだし,それに一生懸命になるのがなぜいけない？

＜親への落胆＞

- 母と喧嘩して母が悪いのに話を逸らして自分の非を認めなかった時はさすがに呆れた
- 母に「お前に払う学費はない」と言われた。自分はタクシーで出かけようとしている

＜自己優先＞

- 「同じような服を買ってこないの」と言われるが,好きな継投がある程度決まっているから仕方ないじゃん。気にせず自分の服を買う
- 趣味の時間を制限されるが,従うつもりは毛頭ない

＜親への依存・同調＞

- 進路の話をするとき,親は「自分のやりたいことをやればいい」といつも言うが,いつも言われると,親は私に興味がないのではないか,期待などしていないのではないかと感じてしまう・・・無関心が不安,見放されるのではないか
- 存在を無視されていたことがあった。自分がただ耐えればよいのだと考えていた・・・見放さないで欲しい

＜親の過剰な期待＞

- どんなに良い成績を取っても父は認めてはくれない
- テストの成績が良くても褒められず空しくなった。どうやったら,自分は認めてもらえるのだろうかと感じた

これらの自由記述と先行研究(藤原・伊藤,2007; 池田・大竹・落合,2006;小高,2006)を

参考にしながら,予備調査の質問項目として,親子の対立・葛藤における青年の反応の項目を作成した。次に,心理学専攻の大学院生8名による項目の妥当性の検討がおこなわれた。池田(2009)を参考に,親子の対立・葛藤における青年の反応として,各項目が五つの領域それぞれを尋ねる項目として妥当であるかを「妥当である(5)」から「妥当でない(1)」の 5 段階で評価した。また,項目自体の文章に修正が必要と思われる場合は,その修正も求めた。そして項目の評価点平均が 3.5 以上[1)]の項目を選び,項目の文章の修正を検討した結果, 5 領域で構成される親子の対立・葛藤における青年の反応の質問項目として全 70 項目を設定した。

自由記述の内容は,「親への反発」についての記述が大半であり,親側の親としての自覚の欠如した言動が多く語られ,親自身の親としてふるまうための原体験の少なさ(斎藤,2009)という親側の問題が絡んでいることがうかがわれた。

5 領域で構成される「青年 - 両親間の対立における感情反応」の質問項目は,以下のように設定した。

予備調査用質問項目 70 項目

注：各項目の最後にある(　)は評価点平均を表す

「親への反発」(21 項目)

- 私のすることにいちいち口をはさまないでほしい（4.63）
- 親は私の意見を無視していると思う（3.63）
- 私の事に,親は干渉しないでほしい（4.75）
- 私のことは放っておいてほしい（4.25）
- 私は,親の理不尽な言動（体罰・叱責・ののしるなど）は許せない（3.88）
- 理由をろくに聞かずに怒る親の態度は許せないと思う（3.88）
- 親は,私のプライベートな部分に勝手に入ってこないでほしい（4.25）
- 親は,私の友人関係にまで口出ししないでほしい（4.25）
- 親は,私に関心がないと思う（3.50）
- 親の意見を私に押し付けないでほしい（4.63）
- 親は,私をほかの子（友人・きょうだいなど）と比べないでほしい（3.88）
- 親は,私にだけきびしくしないでほしい（4.00）

- 私は,親が私を馬鹿にしていると感じる時がある（3.88）
- 私は自分の本心を親に打ち明ける気になれない（3.88）
- 親としての愛情を感じられないときがある（3.50）
- 親は,私に命令ばかりしないでほしい（4.38）
- いくら親でも,私のプライドを傷つけるのは許せないと思う（4.00）
- 親なら,私の言い分に耳を傾けてくれてもいいと思う（3.75）
- 親は,私より世間体のほうが大事なのだと思う（3.63）
- 私は,親に振り回されたくはない（4.25）
- 親は,ささいな事で私を非難しないでほしい（4.25）

「親への落胆」（10 項目）

- 私は,親がつまらない人間に思える（4.75）
- 私は,親にいらだちを感じるときがある（3.63）
- 私は,親は親らしくしっかりしていてほしいと思う（4.50）
- 私は,親とできるだけ一緒にいたくない（3.88）
- 私は,親はたよりにならないと思う（4.75）
- 私は,親の言動に幻滅してしまう（4.63）
- 私は,「他の人が私の親だったらいいのに」と思う（4.00）
- 私は,親の価値観に疑問を感じてしまう（4.63）
- 私は,親の常識を疑ってしまう（4.25）
- 親の考えは自己中心的だと思う（4.50）

「親の過剰な期待」（６項目）

- 私は,親の期待に何でもこたえられるわけではない（4.63）
- 親の言動は,私にとって重荷に感じる（4.88）
- 私は,親の意見にすべてそうことはできない（4.75）
- 私は,親の満足感を満たすためだけに従うことはできない（4.13）
- 私なりに頑張っているのに,これ以上は無理だ（4.75）
- 私は,これ以上親の求めるようないい子ではいられない（ 4.88）

「自己優先」（14 項目）

- 私は,親に納得がいかないときは再び話し合いたい*　（3.50）
- 私は,親の言うことより私の欲求や考えを優先したい（4.63）
- 私は,親の意見はどうでもいいと思う（3.63）
- 親の意見は,私には関係ないと思う（4.00）
- 親の意見よりも,私の意思を尊重して生きていたい（5.00）
- 私の人生なのだから,私の思いどおりにしたい（4.88）
- 私は,親の意見にすべて従わなければならないとは思わない（4.88）
- 親と私とは考え方が違うと思う（4.13）
- 私は,親のいいなりになってばかりはいられないと思う（4.25）
- 親と対立して私自身が傷つきたくはない（3.63）
- 親に振り回されずに,自由にやりたいと思う（4.50）
- 親の話は表面上聞くだけで,実際には自分の思いどおりにしたい（4.25）
- 私は,親の目の届かないところでは,自分の思いどおりにしたい（3.88）
- 親の前では親の意見を受け入れたふりをするが,実際には自分の思うようにしたい（4.13）

「親への依存・同調」（19 項目）

- 私は,親を裏切ってしまうのではないかと不安になる（4.75）
- 私は,親に見放されてしまうのではないかと不安になる（5.00）
- 私は,親が機嫌を損ねるのではないかと不安になる（4.13）
- 親の言うようにしないと,親が気を悪くするのではないかと心配だ（4.38）
- 私は,親の要求にこたえないと見放されるのではないかと不安になる（4.75）
- 私は,親の言うことを聞いていれば間違いないと思う（4.63）
- 私は,親の前ではいい子でいたい（3.75）
- 私は,親に失望されたくはないと思う（4.25）
- 私は,親の意見に従わなければと思う（4.63）
- 私は,親には逆らえない（4.50）
- 親は私の事を心配してくれているのがわかるので仕方ない（4.25）
- 私は,親の理不尽な言動（体罰・叱責・ののしるなど）が怖くて逆らえない（4.13）

- 私は,親にいやな思いをさせてまで私の意見を通したくはない（4.50）
- 私は,嫌だと思いながらも親の意見に従ってしまう（4.75）
- 私は,親と意見や考えが違う時は私の意見は言わない（4.13）
- 私は,親の考えにそうようにしている（4.88）
- 私は親の見ている前では,表面上だけでも親の期待にそうように行動したい（4.38）
- 親の機嫌を損ねたくないので,直接私の意見は言わないが,実際は私の思いどおりにしたい（4.25）
- 親の前ではいい子を演じ,私の意見や考えを主張しないが,実際には自分の思いどおりにしたい（4.13）

第2節　予備調査〈調査2〉

1. 目　的

親子の対立・葛藤における青年の反応を測定する尺度を作成するために,予備的な因子分析により項目間の関連を明らかにし,項目の精選をおこなうことを目的とする。

2. 方　法

(1)調査対象

首都圏X大学の学生156名を対象に実施した。有効回答は,男性47名,女性104名,計151名で,平均年齢は,19.41歳(SD = 1.13)であった。

(2)手続き

2012年6月,講義時間内にて無記名式質問紙調査を実施・回収した。

(3)調査内容

1)親子の対立・葛藤における青年の反応

調査1で収集し作成した70項目を用いて,親子間の対立・葛藤場面で親[2)]に対してどう思ったり考えたりしたか回答を求めた。回答は,「あてはまる(5)」,「ややあてはまる(4)」,「どちらでもない(3)」,「あまりあてはまらない(2)」,「あてはまらない(1)」の5件法で評定を求めた。

2)フェイスシート

性別,年齢,学年を尋ねた。

(4)倫理的配慮

〈調査 1〉と同様の配慮をおこなった。

3. 結　果

(1) 項目の検討

弁別力のある項目を選択するため,各項目の平均値・標準偏差を求め,天井効果・フロア効果のみられた項目を検討した。その結果,以下の 20 項目を項目として不適切と判断し,削除した。

＜除外項目＞

- 親に振り回されずに,自由にやりたいと思う
  (平均値　4.16　標準偏差　0.93　M+*SD* 5.09)
- 私は,親の意見にすべてそうことはできない
  (平均値　4.35　標準偏差　0.90　M+*SD* 5.25)
- 私は,親に見放されてしまうのではないかと不安になる
  (平均値　1.99　標準偏差　1.13　M-*SD* 0.86)
- 私は,親のいいなりになってばかりはいられないと思う
  (平均値　3.87　標準偏差　1.15　M+*SD* 5.02)
- 私は,親の満足感を満たすためだけに従うことはできない
  (平均値　3.96　標準偏差　1.12　M+*SD* 5.08)
- 私は,親と意見や考えが違う時は私の意見は取り下げたい
  (平均値　2.20　標準偏差　1.29　M-*SD* 0.91)
- 私は,親はたよりにならないと思う
  (平均値　2.04　標準偏差　1.11　M-*SD* 0.93)
- 私は,親には逆らえない
  (平均値　2.08　標準偏差　1.15　M-*SD* 0.93)
- 私の人生なのだから,私の思いどおりにしたい
  (平均値　4.22　標準偏差　0.83　M+*SD* 5.05)
- 親は,私のプライベートな部分に勝手に入ってこないでほしい
  (平均値　3.83　標準偏差　1.18　M+*SD* 5.00)

- 私は,親の要求にこたえないと見放されるのではないかと不安になる

（ 平均値　1.94　標準偏差　1.11　M-*SD* 0.83 ）

- 私は,親の理不尽な言動（体罰・叱責・ののしるなど）が怖くて,逆らえない

（ 平均値　1.77　標準偏差　1.14　M-*SD* 0.64 ）

- 私は,親の意見にすべて従わなければならないとは思わない

（ 平均値　4.15　標準偏差　1.09　M+*SD* 5.24 ）

- いくら親でも,私のプライドを傷つけるのは許せないと思う

（ 平均値　4.17　標準偏差　0.83　M+*SD* 5.00 ）

- 親の前では親の意見を受け入れたふりをするが,実際には自分の思うようにしたい

（ 平均値　4.17　標準偏差　0.83　M+*SD* 5.00 ）

- 親は,私に関心がないと思う

（ 平均値　1.87　標準偏差　1.07　M-*SD* 0.80 ）

- 私は,親にいらだちを感じる

（ 平均値　4.12　標準偏差　0.90　M+*SD* 5.02 ）

- 私は,親に対して許せないと思う

（ 平均値　2.05　標準偏差　1.24　M-*SD* 0.81 ）

- 私は,「他の人が私の親だったらいいのに」と思うことがある

（ 平均値　2.23　標準偏差　1.33　M-*SD* 0.90 ）

- 私は,親の期待に何でもこたえられるわけではない

（ 平均値　4.31　標準偏差　0.81　M+*SD* 5.12 ）

次にカテゴリー度数を求めた。分布の偏りが,１の回答と２の回答の合計,４の回答と５の回答の合計がそれぞれ75%以上のものを選び検討した。その結果,以下の２項目は,項目として不適切と判断し削除し,残りの項目について因子分析をおこなった。

＜除外項目＞

- 親の意見よりも,私の意思を尊重して生きていたい

（ ４の回答（42.4%）,５の回答(34.4%)　合計 76.8% ）

- 私は,親に振り回されたくない

（ ４の回答（47.7%）,５の回答(33.1%)　合計 80.8% ）

(2) 予備的な因子分析

親子の対立・葛藤における青年の反応の構造を明らかにするために,因子分析をおこなった。因子分析は,1）項目の検討で,偏りのあった項目を削除して,48 項目について主因子法で行った。探索的に因子分析（主因子法・Promax 回転）をおこなったところ,スクリープロットと意味のまとまりのよさから 5 因子構造が妥当であるとして採用した。その結果,十分な因子負荷量を示さなかった以下の 10 項目を分析から除外した。

＜除外項目＞

- 私は,嫌だと思いながらも親の意見に従ってしまう
- 私は,親と対立して私自身が傷つきたくはないと思う
- 私のすることにいちいち口をはさまないでほしい
- 親は,私の友人関係にまで口出ししないでほしい
- 私は,これ以上親の求めるようないい子ではいられない
- 私は,親の目の届かないところでは,自分の思いどおりにしたい
- 私は,親の言うことより私の欲求や考えを優先したい
- 私なりに頑張っているのに,これ以上は無理だ
- 親と私とは考え方が違うと思う
- 私は,自分の本心を親に打ち明ける気になれない

そして再度,残りの 38 項目に対して主因子法･Promax 回転による因子分析をおこなった。最終的な因子分析結果と因子相関は,Table 4-2-1 に示すとおりである。なお,回転前の 5 因子で 38 項目の全分散を説明する割合は 54.395%であった。

Table4-2-1 親子の対立・葛藤における青年の反応の予備的因子分析の結果（主因子法　Promax回転）　N=151

	F1	F2	F3	F4	F5	h^2
親への依存・同調（α=.86）						
私は親の見ている前では、表面上だけでも親の期待にそうように行動したい	.89	-.04	.05	.23	-.15	.72
私は、親の前ではいい子でいたい	.77	-.15	.20	.00	-.17	.57
私は、親の考えにそうようにしている	.75	-.04	.00	-.04	.13	.62
私は、親を裏切ってしまうのではないかと不安になる	.70	-.05	-.06	.07	.02	.48
私は、親の言うことを聞いていれば間違いないと思う	.59	-.16	-.11	.04	.01	.35
私は、親に失望されたくはないと思う	.55	.01	-.37	-.13	.16	.48
私は、親の意見に従わなければと思う	.54	.05	.20	.02	.23	.56
親にいやな思いをさせてまで私の意見を通したくはない	.47	.08	-.13	-.12	.13	.30
親への反発（α=.83）						
親は、私に命令ばかりしないでほしい	-.11	.86	-.15	.09	.06	.73
親の意見を私に押し付けないでほしい	-.06	.75	.02	.03	-.10	.53
理由をろくに聞かずに怒る親の態度は許せないと思う	-.25	.74	-.01	-.17	.05	.47
私のすることにいちいち口をはさまないでほしい	-.02	.62	.15	.08	-.10	.51
親は、ささいな事で私を非難しないでほしい	-.01	.59	-.09	.11	.09	.43
親なら、私の言い分に耳を傾けてくれてもいいと思う	.08	.52	-.08	.03	-.10	.22
親は、私をほかの子（友人・きょうだいなど）と比べないでほしい	-.03	.49	.13	-.15	-.03	.24
親は、私にだけきびしくしないでほしい	.11	.39	.07	.08	.09	.31
自己優先（α=.83）						
親の意見は、私には関係ないと思う	-.01	-.23	.71	.20	-.13	.48
親の前ではいい子を演じ、私の意見や考えを主張しないが、実際には思い通りにしたい	.36	.21	.67	-.30	.03	.70
親の機嫌を損ねたくないので直接私の意見は言わないが、実際は私の思い通りにしたい	.24	.17	.57	-.12	.06	.53
私のことは放っておいてほしい	-.06	.12	.57	.04	-.05	.40
私は、親の意見はどうでもいいと思う	-.07	-.10	.56	.29	.00	.50
私の事に、親は干渉しないでほしい	-.14	.22	.53	.05	-.16	.41
私は、親に納得がいかないときは再び話し合いたい＊	.12	.16	-.48	.14	-.24	.24
私は、親とできるだけ一緒にいたくない	-.17	.05	.44	.20	.12	.47
親の話は表面上聞くだけで、実際には私の思いどおりにしたい	.06	.08	.40	.06	.05	.28
親への落胆（α=.84）						
私は、親の常識を疑ってしまう	.01	-.13	.13	.83	.04	.74
私は、親の言動に幻滅してしまう	-.09	-.08	.09	.71	.22	.69
私は、親は親らしくしっかりしていてほしいと思う	.22	.13	-.08	.69	-.39	.43
私は、親の価値観に疑問を感じてしまう	.00	.20	.01	.59	.10	.58
私は、親がつまらない人間に思える	-.04	.05	.15	.43	.18	.43
親の考えは自己中心的だと思う	.01	.05	.31	.33	.15	.47
親へのへつらい（α=.72）						
親の言うようにしないと、親が気を悪くするのではないかと心配だ	.24	.00	.01	-.10	.79	.75
私は、親が機嫌を損ねるのではないかと不安になる	.31	-.01	-.15	.02	.69	.61
親が私を馬鹿にしていると感じる時がある	-.08	.12	-.09	.19	.54	.42
親は私の事を心配してくれているのがわかるので仕方ない＊	.39	.27	-.24	.16	-.47	.28
親の言動は、私にとって重荷に感じる	.19	.14	.11	.09	.41	.46
親は、私より世間体のほうが大事なのだと思う	-.01	.04	.27	.08	.36	.38
親は私の意見を無視していると思う	-.01	.15	.19	.20	.34	.48

因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F1		.13	.10	-.105	.28
F2			.52	.51	.50
F3				.55	.49
F4					.36

＊：逆転項目

第一因子は,以下の８項目からなり,項目作成時に設定した親への依存・同調の領域の項目がひとまとまりになっており,「親への依存・同調」と命名した。

- 私は親の見ている前では,表面上だけでも親の期待にそうように行動したい
- 私は,親の前ではいい子でいたい
- 私は,親の考えにそうようにしている
- 私は,親を裏切ってしまうのではないかと不安になる
- 私は,親の言うことを聞いていれば間違いないと思う
- 私は,親に失望されたくはないと思う
- 私は,親の意見に従わなければと思う
- 親にいやな思いをさせてまで私の意見を通したくはない

第二因子は,以下の８項目からなり,項目作成時に設定した親への反発の領域の項目がひとまとまりになっており,「親への反発」と命名した。

- 親は,私に命令ばかりしないでほしい
- 親の意見を私に押し付けないでほしい
- 理由をろくに聞かずに怒る親の態度は許せないと思う
- 私のすることにいちいち口をはさまないでほしい
- 親は,ささいな事で私を非難しないでほしい
- 親なら,私の言い分に耳を傾けてくれてもいいと思う
- 親は,私をほかの子（友人・きょうだいなど）と比べないでほしい
- 親は,私にだけきびしくしないでほしい

第三因子は,以下の９項目からなり,項目作成時に設定した自己優先の領域に,親への依存・同調の領域から２項目「親の前ではいい子を演じ,私の意見や考えを主張しないが,実際には思い通りにしたい」「親の機嫌を損ねたくないので直接私の意見は言わないが,実際は私の思い通りにしたい」,親への落胆の領域から１項目「親の意見は,私には関係ないと思う」が入ってきている。親への依存・同調から入ってきた２項目と,親の価値下げの領域から入ってきた１項目の項目は,意味のとり方によっては自己優先に通じると考えられ,「自己優先」と命名した。

- 親の意見は,私には関係ないと思う
- 親の前ではいい子を演じ,私の意見や考えを主張しないが,実際には思い通りにしたい
- 親の機嫌を損ねたくないので直接私の意見は言わないが,実際は私の思い通りにした

い

- 私のことは放っておいてほしい
- 私は,親の意見はどうでもいいと思う
- 私の事に,親は干渉しないでほしい
- 私は,親に納得がいかないときは再び話し合いたい*
- 私は,親とできるだけ一緒にいたくない
- 親の話は表面上聞くだけで,実際には私の思いどおりにしたい

第四因子は,以下の 5 項目からなり,項目作成時に設定した親への落胆の領域の項目がひとまとまりになっており,「親への落胆」と命名した。

- 私は,親の常識を疑ってしまう
- 私は,親の言動に幻滅してしまう
- 私は,親は親らしくしっかりしていてほしいと思う
- 私は,親の価値観に疑問を感じてしまう
- 私は,親がつまらない人間に思える

第五因子は,以下の 5 項目からなり,親への依存・同調の領域から 3 項目「親の言うようにしないと,親が気を悪くするのではないかと心配だ」「私は,親が機嫌を損ねるのではないかと不安になる」「親は私の事を心配してくれているのがわかるので仕方ない」,親への反発の領域から 1 項目「親が私を馬鹿にしていると感じる時がある」,親の過剰な期待の領域から 1 項目「親の言動は,私にとって重荷に感じる」が入ってきている。これらの項目の意味や表現から考えると,不安や反発・諦めを感じながらも親の機嫌をとっている様子がうかがえ,「親へのへつらい」と命名した。

- 親の言うようにしないと,親が気を悪くするのではないかと心配だ
- 私は,親が機嫌を損ねるのではないかと不安になる
- 親が私を馬鹿にしていると感じる時がある
- 親は私の事を心配してくれているのがわかるので仕方ない*
- 親の言動は,私にとって重荷に感じる　　* ： 逆転項目

(3)信頼性の検討

尺度の信頼性を検討するためにα係数を算出した(Table 4-2-1)。その結果,「親への依存・同調」α=.86,「親への反発」α=.83,「自己優先」α=.83,「親への落胆」α=.84,「親へのへつらい」α=.72となり,各因子の一貫性は保たれ十分な内的整合性が示された。

第3節　本調査〈調査3〉

1. 目　的

親子の対立・葛藤における青年の反応を測定する尺度を作成し,その信頼性と妥当性を検証し,特徴(性差,対象差)を明らかにするとともに,それらが精神的自立に及ぼす影響について検討することを目的とする。

2. 方　法

(1)調査対象

首都圏X・Y大学の大学生422名を対象に実施した。本調査では両親の揃った学生のみを分析対象としたため,男性138名,女性222名,計360名で,平均年齢は,19.51歳(*SD* = 1.12)であった。

(2)手続き

2012年7月,講義時間内にて無記名式質問紙調査を実施・回収した。

(3)調査内容

1)親子の対立・葛藤における青年の反応

〈調査2〉で精選した35項目を用い,父母それぞれに対する回答を求めた。回答は,「あてはまる(5)」,「ややあてはまる(4)」,「どちらでもない(3)」,「あまりあてはまらない(2)」,「あてはまらない(1)」の5件法で評定を求めた。

2)自尊感情

尺度の妥当性を検討するため,Rosenberg(1965)のSelf-Esteem Scaleを桜井(2000)が和訳したもの10項目(5件法)を用いた。親子の対立・葛藤における青年の反応は,青年の自尊感情と負の相関があると予測される。回答は,「あてはまる(5)」,「ややあてはまる(4)」,「どちらでもない(3)」,「あまりあてはまらない(2)」,「あてはまらない(1)」の5件法で評定を求めた。

3)親子関係の良好さ

同じく,尺度の妥当性を検討するため,父・母それぞれとの関係性の良好さを尋ねた。親との関係が良好な青年より非良好な青年の方が,親子の対立・葛藤における青年の反応は強いと予測される。回答は,「良好でない(4)」,「あまり良好でない(3)」,「やや良好である(2)」,「良好である(1)」のうちひとつを選択してもらった。

4)精神的自立

福島(1992)の精神的自立尺度 22 項目(5 件法)を用いた。これは,「主体的自己」(自分の将来・進路に関し目標を持っているなど 7 項目),「判断責任性」(困ったとき,なるべく人の助けを借りずに自分で判断するなど 6 項目),「親からの心理的分離」(親には親の,自分には自分の考えがあると思うなど 5 項目),「親との信頼関係の確立」(親は私の事を信頼してくれていると思うなど 5 項目)の 4 次元から構成されており,回答は,「あてはまる(5)」,「ややあてはまる(4)」,「どちらでもない(3)」,「あまりあてはまらない(2)」,「あてはまらない(1)」の 5 件法で評定を求めた。

5)フェイスシート

性別,年齢,学年,両親の年齢を尋ねた。

(4)倫理的配慮

〈調査 1〉と同様の配慮をおこなった。また,調査票の教示に「答えられる方のみ記入してください」と記し,死別や離別等で父母との関係を記入できない者に配慮した。

3. 結　果

(1)両親の年齢

両親の年齢は,Table 4-3-1 に示すとおりである。親の年齢については,大半が 45 歳以上 59 歳未満であった(父の 83.3%,母の 87.3%)。

Table 4-3-1　親の年齢

	父親		母親	
	度数	(%)	度数	(%)
40歳未満	2	(0.6)	2	(0.6)
40～44歳	21	(5.8)	36	(10.0)
45～49歳	90	(25.0)	136	(37.8)
50～54歳	143	(39.7)	141	(39.2)
55～59歳	67	(18.6)	37	(10.3)
60～64歳	31	(8.6)	4	(1.1)
65～69歳	2	(0.6)	2	(0.6)
70歳以上	2	(0.6)	2	(0.6)
不明	2	(0.6)		
合計	360	(100)	360	(100)

(2)親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の因子構造

親子の対立・葛藤における青年の反応尺度を作成するために,父親票・母親票を込みにして因子分析をおこなった。結果は,Table 4-3-2 に示すとおりである。回転前の 4 因子で 29 項目の全分散を説明する割合は 48.44%であった。

先に 5 因子解が得られたので,5 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行ったが,第五因子の負荷量が低く,因子として採用できる項目がなかった。そこで,固有値 1 以上を基準に抽出した 7 因子から順に因子数を減らしながら,再度探索的に因子分析(主因子法･Promax 回転)をおこなったところ,4 因子構造が妥当であると考えられ採用した。その結果,十分な因子負荷量を示さなかった以下の 6 項目は分析から除外した。

＜除外項目＞

- 親の言動は,私にとって重荷に感じる
- 私は,親は親らしくしっかりしていてほしいと思う
- 親は私の事を心配してくれているのがわかるので仕方ない*
- 親が私を馬鹿にしていると感じる時がある
- 私は,親に納得がいかないときは再び話し合いたい*
- 親の話は表面上聞くだけで,実際には自分の思いどおりにしたい　　*： 逆転項目

Table 4-3-2　親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の因子分析の結果　(主因子法　Promax回転)　　N=360

	F1	F2	F3	F4	h^2
親への反発（α=.86）					
親は、ささいな事で私を非難しないでほしい	.78	-.04	-.03	-.05	.53
親の意見を私に押し付けないでほしい	.75	-.12	.05	-.02	.57
親は、私に命令ばかりしないでほしい	.74	-.08	-.04	.04	.50
私のすることに親はいちいち口をはさまないでほしい	.66	-.08	-.06	.27	.58
私の事に、親は干渉しないでほしい	.58	-.16	-.01	.33	.58
親は私をほかの子（友人・きょうだいなど）と比べないでほしい	.57	.09	-.07	-.01	.31
親なら、私の言い分に耳を傾けてくれてもいいと思う	.57	.10	-.15	-.02	.27
理由をろくに聞かずに怒る親の態度は許せないと思う	.56	-.06	.22	-.14	.43
親は、私にだけきびしくしないでほしい	.41	.18	.06	.12	.33
親への依存・同調（α=.87）					
私は親の見ている前では、表面上だけでも親の期待にそうように行動したい	-.07	.77	.05	.03	.57
私は、親の意見に従わなければと思う	-.10	.65	-.03	.06	.39
私は、親の考えにそうようにしている	.00	.65	-.11	.11	.41
私は、親の前ではいい子でいたい	-.01	.65	-.07	.00	.41
私は、親を裏切ってしまうのではないかと不安になる	-.06	.61	.06	-.02	.36
親の言うようにしないと父(母）が気を悪くするのではないかと心配だ	.09	.61	.28	-.07	.53
親にいやな思いをさせてまで私の意見を通したくはない	-.08	.60	-.11	-.07	.38
私は、親に失望されたくはないと思う	.08	.57	-.16	-.18	.42
親の前ではいい子を演じ、私の意見や考えを主張しないが、実際には思いどおりにしたい	.22	.51	.05	.15	.43
私は、親が機嫌を損ねるのではないかと不安になる	.21	.51	.18	-.18	.45
私は、親の言うことを聞いていれば間違いないと思う	-.12	.46	-.23	.09	.24
親の機嫌を損ねたくないので直接私の意見は言わないが、実際は私の思いどおりにしたい	.28	.43	.09	.08	.39
親への落胆（α=.89）					
私は、親の言動に幻滅してしまう	-.09	.01	.86	.08	.71
私は、親の常識を疑ってしまう	.02	-.10	.83	-.08	.66
私は、親の価値観に疑問を感じてしまう	.14	-.05	.74	-.02	.67
私は、親がつまらない人間に思える	-.10	.05	.68	.25	.58
私は、親とできるだけ一緒にいたくない	-.10	-.01	.60	.37	.60
自己優先（α=.79）					
私は、親の意見はどうでもいいと思う	-.02	-.06	.36	.57	.63
親は、私のことは放っておいてほしい	.20	.11	.15	.54	.58
親の意見は、私には関係ないと思う	.00	-.01	.30	.53	.52
因子間相関　F1		.27	.63	.43	
F2			.06	-.13	
F3				.44	

第一因子は,以下の 9 項目からなり,調査 6 の「親への反発」の全 8 項目と,「自己優先」から 1 項目（私の事に,親は干渉しないでほしい）が加わり,「親への反発」と命名した。

- 親は,ささいな事で私を非難しないでほしい
- 親の意見を私に押し付けないでほしい
- 親は,私に命令ばかりしないでほしい
- 私のすることに親はいちいち口をはさまないでほしい
- 親なら,私の言い分に耳を傾けてくれてもいいと思う
- 親は私をほかの子（友人・きょうだいなど）と比べないでほしい
- 理由をろくに聞かずに怒る親の態度は許せないと思う
- 私の事に,親は干渉しないでほしい
- 親は,私にだけきびしくしないでほしい

第二因子は,以下の 12 項目からなり,調査 6 の「親への依存・同調」の全 8 項目と「自己優先」から 2 項目（親の前ではいい子を演じ,私の意見や考えを主張しないが,実際には思いどおりにしたい；親の前ではいい子を演じ,私の意見や考えを主張しないが,実際には思いどおりにしたい）,「親へのへつらい」から 2 項目（親の言うようにしないと親が気を悪くするのではないかと心配だ；親は私の事を心配してくれているのがわかるので仕方ない）が加わり,「親への依存・同調」と命名した。

- 私は親の見ている前では,表面上だけでも親の期待にそうように行動したい
- 親の言うようにしないと親が気を悪くするのではないかと心配だ
- 私は,親の前ではいい子でいたい
- 私は,親の意見に従わなければと思う
- 私は,親を裏切ってしまうのではないかと不安になる
- 私は,親の考えにそうようにしている
- 親にいやな思いをさせてまで私の意見を通したくはない
- 私は,親に失望されたくはないと思う
- 私は,親が機嫌を損ねるのではないかと不安になる
- 親の前ではいい子を演じ,私の意見や考えを主張しないが,実際には思いどおりにしたい
- 私は,親の言うことを聞いていれば間違いないと思う
- 親の機嫌を損ねたくないので直接私の意見は言わないが,実際は私の思いどおりにし

たい

第三因子は,以下の 5 項目からなり,調査 6 の「親への落胆」の 4 項目と,「自己優先」から 1 項目（私は,親とできるだけ一緒にいたくない）が加わり,「親への落胆」と命名した。

- 私は,親の言動に幻滅してしまう
- 私は,親の常識を疑ってしまう
- 私は,親の価値観に疑問を感じてしまう
- 私は,親がつまらない人間に思える
- 私は,親とできるだけ一緒にいたくない

第四因子は,以下の 3 項目からなり,調査 2 の「自己優先」の項目がまとまり,「自己優先」と命名した。

- 親は,私のことは放っておいてほしい
- 私は,親の意見はどうでもいいと思う
- 親の意見は,私には関係ないと思う

以上のように,青年期後期での親子の対立・葛藤における青年の反応尺度は,「親への反発」(9 項目）,「親への依存・同調」(12 項目）,「親への落胆」(5 項目）,「自己優先」(3 項目）の全 29 項目となった。

(3)信頼性の検討

尺度の信頼性を検討するためにα係数を算出した(Table 4-5-2)。その結果,「親への反発」α=.86,「親への依存・同調」α=.87,「親への落胆」α=.89,「自己優先」α=.79 で,各因子とも十分な内的整合性を有していることが確認された。

(4)妥当性の検討

「親子の対立・葛藤における青年の反応」尺度の妥当性を検討するために,「自尊感情」尺度を用いて父母それぞれとの関係における相関を求めた。結果は,Table4-3-3 に示すとおりである。全体に高くはないが,母とはすべてで,また,父とは男女ともに「父への依存・同調」と女性の「父への落胆」で,負の相関が得られた。

Table4-3-3　自尊感情との相関係数

	男　性 (n=138)	女　性 (n=222)
父への反発	-.04	-.11
父への依存・同調	-.36 ***	-.24 ***
父への落胆	-.06	-.21 **
自己優先(父)	-.08	-.13
母への反発	-.21 *	-.23 **
母への依存・同調	-.29 **	-.18 **
母への落胆	-.25 **	-.28 ***
自己優先(母)	-.28 **	-.18 **

$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$.

また，親子関係の良好さの程度によって親子の対立・葛藤における青年の反応の各下位尺度得点に対象別(父,母)・男女別で差がみられるのかを検討した。その際,親子関係の良好さを,「良好である」,「やや良好である」を「良好」,「あまり良好でない」,「良好でない」を「非良好」として検討した。結果は,Table4-3-4 に示すとおりである。男女ともに「父（母）への依存・同調」以外は全て有意差が示され，親子の対立・葛藤における青年の反応は,親との関係が良好な青年より非良好な青年の方が高かった。

Table4-3-4　親子関係の良好さにおける得点の比較の結果

＜父との関係＞　　N=360

	男性 (n=138) 良好 (n=118)	男性 非良好 (n=20)	t値	女性 (n=222) 良好 (n=176)	女性 非良好 (n=46)	t値
父への反発	2.74	3.24	2.47 *	2.95	3.86	7.13 ***
	(0.85)	(0.88)		(0.77)	(0.70)	
父への依存・同調	2.55	2.42	*n. s.*	2.65	2.53	*n. s.*
	(0.74)	(0.86)		(0.66)	(0.79)	
父への落胆	2.38	3.55	5.43 ***	2.37	4.04	11.71 ***
	(0.86)	(1.08)		(0.90)	(0.70)	
自己優先	2.51	3.30	3.70 ***	2.59	3.83	9.39 ***
	(0.86)	(1.01)		(0.80)	(0.79)	

＜母との関係＞　　N=360

	男性 (n=138) 良好 (n=128)	男性 非良好 (n=10)	t値	女性 (n=222) 良好 (n=207)	女性 非良好 (n=15)	t値
母への反発	2.79	3.71	3.27 **	3.25	4.13	4.34 ***
	(0.86)	(0.78)		(0.77)	(0.69)	
母への依存・同調	2.62	3.02	*n. s.*	2.88	2.74	*n. s.*
	(0.80)	(0.88)		(0.67)	(1.03)	
母への落胆	2.17	3.88	6.09 ***	2.19	4.12	7.89 ***
	(0.85)	(0.94)		(0.91)	(0.96)	
自己優先	2.47	3.90	5.03 ***	2.62	3.91	4.28 **
	(0.87)	(0.89)		(0.89)	(1.14)	

(　　) は標準偏差.　$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.01$,　$^{***}p<.001$.

(5) 親子の対立・葛藤における青年の反応の性差,対象差の検討

親子の対立･葛藤における青年の反応の男女別,父母別に違いがみられるかを検討するために,2 要因の分散分析をおこなった。結果は Table 4-3-5 に示すとおりである。

親子の対立・葛藤における青年の反応で男女で有意差がみられたのは,「親への反発」,「親への依存・同調」,「自己優先」で,いずれも男性より女性の方が高かった。また,父母で有意差がみられたのは,「親への反発」,「親への依存・同調」で父より母の方が高く,「親への落胆」では母より父の方が高かった。なお,いずれも交互作用は抽出されなかった。

Table4-3-5　「親子の対立・葛藤における青年の反応」の男女別,父母別の分散分析結果

N=360

	男性 (*n*=138) 父	男性 母	女性 (*n*=222) 父	女性 母	男・女 *F*値	父・母 *F*値	男・女×父・母 *F*値		
親への反発	2.81	2.86	3.14	3.31	27.08 ***	4.62 *	*n.s.*	男<女,	父<母
	(0.87)	(0.89)	(0.84)	(0.79)					
親への依存・同調	2.53	2.64	2.62	2.87	4.86 *	27.07 ***	*n.s.*	男<女,	父<母
	(0.76)	(0.81)	(0.69)	(0.70)					
親への落胆	2.55	2.30	2.71	2.32	*n.s.*	23.57 ***	*n.s.*		父>母
	(0.98)	(0.96)	(1.09)	(1.04)					
自己優先	2.62	2.57	2.84	2.71	4.24 *	*n.s.*	*n.s.*	男<女	
	(0.92)	(0.94)	(0.94)	(0.96)					

(　)内は標準偏差.　$^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$.

(6)精神的自立の下位尺度得点の平均値と性差の検討

精神的自立の下位尺度得点の平均値・標準偏差を求め,その平均について性差を検討した。結果はTable4-3-6 に示すとおりである。 *t* 検定の結果,「主体的自己」,「判断・責任性」で有意差がみられ,いずれも女性より男性の方が高かった。

Table4-3-6 精神的自立と自尊感情における
下位尺度得点の平均値と標準偏差,および性差の結果

N=360

	男性 (*n*=138)	女性 (*n*=222)	*t*値	
精神的自立				
主体的自己	3.64	3.46	2.41 *	女<男
	(0.67)	(0.66)		
判断・責任性	3.82	3.65	2.38 *	女<男
	(0.62)	(0.66)		
親からの心理的分離	4.37	4.36	*n.s.*	
	(0.56)	(0.48)		
親との信頼関係の確立	3.72	3.72	*n.s.*	
	(0.72)	(0.74)		
自尊感情	2.99	2.80	2.59 **	女<男
	(0.70)	(0.67)		

$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$.

(7) 精神的自立,自尊感情に及ぼす影響

親子の対立・葛藤における青年の反応が,精神的自立,自尊感情にどのように影響を及ぼしているかを明らかにするために,親子の対立・葛藤における青年の反応の各因子を説明変数に,精神的自立と自尊感情の各因子を目的変数にした重回帰分析（強制投入法）をおこなった。結果は Table4-3-7 に示すとおりである。

Table4-3-7 親子の対立・葛藤における青年の反応の各因子を説明変数に精神的自立,自尊感情の各因子を目的変数にした重回帰分析結果
（数値は標準偏回帰係数）

＜父との関係において＞ N=360

	男 性 (n=138)					女 性 (n=222)				
	主体的自己	判断・責任性	親からの心理的分離	親との信頼関係の確立	自尊感情	主体的自己	判断・責任性	親からの心理的分離	親との信頼関係の確立	自尊感情
父への反発										
父への依存・同調			-.20 *		-.39 ***	-.21 **			-.19 **	-.26 ***
父への落胆						-.21 *			-.31 **	-.23 *
自己優先										
決定係数（R^2）	.02	.02	.05	.05	.15 ***	.06 **	.03	.04 †	.13 ***	.11 ***

＜母との関係において＞ N=360

	男 性 (n=138)					女 性 (n=222)				
	主体的自己	判断・責任性	親からの心理的分離	親との信頼関係の確立	自尊感情	主体的自己	判断・責任性	親からの心理的分離	親との信頼関係の確立	自尊感情
母への反発			.30 **	-.21 †				.170 †		
母への依存・同調		-.20 *	-.28 **		-.26 **	-.14 *			-.13 *	-.16 *
母への落胆			-.33 *	-.21 †					-.36 **	-.25 **
自己優先					-.22 †					
決定係数（R^2）	.01	.05	.12 **	.18 ***	.14 ***	.04	.02	.04 †	.21 ***	.11 ***

† p <.10, * p <.05, ** p <.01, *** p <.001.

男女ともに,父よりも母との関係において,精神的自立,自尊感情への影響が強く,特に男性においては,母との関係で,「親からの心理的分離」に親子の対立・葛藤における青年の反応の「自己優先」を除く 3 因子で関連がみられた。

男性の特徴としては,父との関係において,「父への依存・同調」のみが「親からの心理的分離」,「自尊感情」に負の効果がみられた。また,母との関係においては,「母への反発」が「親からの心理的分離」に正の,「親との信頼関係の確立」に負の効果がみられた。また,「母への依存・同調」が「判断・責任性」,「親からの心理的分離」,「自尊感情」に負の,「親への落胆」が「親からの心理的分離」,「親との信頼関係の確立」に負の,「自己優先」が「自尊感情」に負の効果がみられた。

一方,女性の特徴としては,父との関係において,「父への依存・同調」と「父への落胆」が,「主体的自己」,「親との信頼関係の確立」,「自尊感情」に負の効果がみられた。母との関係においては,「母への反発」が「親からの心理的分離」に正の,「母への依存・同調」が「主体的自己」,「親との信頼関係の確立」,「自尊感情」に負の,「母への落胆」が「親との信頼関係の確立」,「自尊感情」に負の効果がみられた。女性にとって,親に依存や同調をしたり親に落胆することが,自己の主体性や親との信頼関係の確立を低めていた。

第 4 節　考　察

1. 親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の因子構造の検討

本章では,青年期後期での親子の対立・葛藤における青年の反応尺度として,「親への反発」,「親への依存・同調」,「親への落胆」,「自己優先」の 4 因子が抽出された。

「親への反発」は,青年期後期ともなれば,「親から子が信頼・承認されている関係」(落合・佐藤,1996) を築いていくはずが,親側の子離れが進まず,「親が子を抱え込む親子関係」(落合・佐藤,1996) をいまだに持ち込んで子側を支配・服従(藤原・伊藤,2007;小高,1998) させようとして子側の葛藤が強まって反発するというものである。青年期後期の青年の親の期待する生き方から自分の生き方への脱皮を目指す「抵抗」(西平,1990)がうかがえた。

「親への依存・同調」では,「親への依存」は,青年期の親子関係についての先行研究(藤原・伊藤,2007 ; 小高,1998;落合・佐藤,1996;渡邊,1994) で共通して取り上げられる領域である。また,「親への同調」は,青年が本心では自分の思いどおりにしたいと思いながら

も,一方では,親の機嫌を伺っている様子がうかがえた。「親への依存・同調」から,親からの独立を志向すると同時に,これまでの親への依存によって得られる安定した関係を維持したいという欲求もある青年のアンビバレントな心情(柴田,2000)がうかがえた。

「親への落胆」では,これまで理想化していた親のイメージが,「一人の人間として親を認知」(小高, 1998) していくにつれ,いままで見えてこなかった現実の親像に幻滅している様子がみられた。

「自己優先」は,青年-両親間の葛藤場面において青年は,家庭内では親が許容してくれるという期待を背景にして自分の欲求を明確に主張するという先行研究(平井,2000;杉村他,2007;山崎他,2002)を支持するものであり,青年が親より自分の意見や考えを優先させようとするのがうかがえた。

2. 信頼性・妥当性の検討

本尺度は,予備調査で探索的に因子分析をおこない項目を精選した上で,再度,本調査で探索的に因子分析をおこなって尺度を作成した。その結果,本尺度は十分な内的整合性を示すものであるといえよう。

妥当性については,自尊感情と親との関係の認知を取り上げた。Rosenberg(1965)は,自己評価に影響を与える要因として親との関係が重要であることを指摘しており,親との関係が自尊感情に影響を与える (Engels,Finkenauer,Meeus,& Deković,2001) ことを考えると,親子の対立・葛藤における青年の反応は,青年の自尊感情と負の関連があると予測される。結果は,母との関係では全て,父との関係では一部で自尊感情と負の関連がみられ,一定の併存的妥当性が確認された。男女ともに父との関係で関連が少なかったことについては,父親との希薄な関係(小野寺,1984;渡邊,1994)が影響し,父にたとえ反発することがあっても青年の自尊感情に負の関連をもたらすほどのことではないと考える。

また,親との対立・葛藤が起きたとき,親との関係が良好な青年より非良好な青年の方が強く反応すると予測される。結果は,男女ともに「父(母)への依存・同調」以外の全てで有意差が示され, 親との関係が良好な青年より非良好な青年の方が強く反応しており,一定の収束的妥当性が確認された。

以上より,本尺度には妥当性があると言えよう。

3. 親子の対立・葛藤における青年の反応の性差,対象差の検討

「親への反発」,「親への依存・同調」,「自己優先」で性差がみられ,「親への反発」,「親への依存・同調」,「親への落胆」で父母の差がみられた。

「親への反発」では,女性は男性に比べ,一般的に日頃から母との接触や交渉が頻繁で緊密であると推測され,接触や交渉の頻度や密度が高くなれば親近感や信頼感も増すであろうが,同時にまた葛藤を生じる機会も増える(山田,1986)と考えられる。また,父より母に対して高かったが,小高(2008)も,青年の親との対立は父よりも母のほうが強いという指摘をしており,同様の結果が得られた。

「親への依存・同調」では,親への依存は青年期後期になっても続いていることを先行研究(藤原・伊藤,2007;久保田,1993)も示唆しており,特に娘の母への依存が強い(渡邊,1994)ことが本研究でも示唆された。

「親への落胆」では,母より父への落胆が大きかったのは,青年の父との希薄な関係(小野寺,1984; 渡邊,1994)が影響し,関係性が薄いだけに父に対する幻滅感も母以上に強いのではないかと考える。

「自己優先」では,先行研究(平井,2000;杉村他,2007;山崎他,2002)で青年が親子間葛藤場面において自己の欲求を主張・優先する傾向であることを指摘しているが,性差についての検討はみあたらず,本研究では男性より女性のほうが自己を優先する結果となった。青年が自己の欲求を主張・優先する理由として,杉村他(2007)は,一時的な対立があってもそれが両者の関係に決定的な亀裂をもたらすことがないという関係性の認識があると示唆しており,このことを考慮すると,女性は男性に比べ,親子の親密性が高く,特に母と娘の関係は親密度が高いがゆえに,女性の方がより強く自己を優先しているのではないかと考える。

また,尺度の平均得点が 3 を超えたのは,女性の「親への反発」がわずかに超えているだけで,全体的に平均得点は低い傾向にあり,先行研究(小高,2008;Steinberg,2001;渡邊,1994)と同様に,現代の親子関係は穏やかであると言えよう。しかし,一方　で,一卵性親子(信田,1997)や友達のような親子(斎藤,2009)と言われる現代の親子関係によって,親子間の対立・葛藤が表面化しにくい状況を招いてしまい,青年の自立の妨げの要因のひとつとなっている可能性も考えられ,今後の検討が必要であると思われる。

4. 精神的自立,自尊感情に及ぼす影響

親子の対立・葛藤が精神的自立,自尊感情に及ぼす影響は,男女ともに父より母との関係の方が強く,母との対立・葛藤は,父よりも青年の精神的自立,自尊感情に影響を及ぼしていた。このことは,父に比べ母との接触や交渉の頻度,密度が高いことが要因となっていると考えられる。

父との関係が母との関係ほどには密ではない(小野寺,1984;渡邊,1994)ということは,特に男性では,たとえ父との対立・葛藤があっても「親との信頼関係の確立」に影響を及ぼすほどにはさほど深刻にとらえてはいないということであろう。一方,父との対立・葛藤が女性の「親との信頼関係の確立」,「主体的自己」,「自尊感情」に負の影響を及ぼすことについては,小野寺(2009)は,父に対する感情(「父親に私の気持を常にわかってもらいたい」,「何かをする時には父親に励ましてもらいたい」など)が,大学生男子より女子の方が強いことを示しており,親との信頼関係を軸として自己の確立に至る傾向にある女性(福島,1992)にとって,父との対立・葛藤は,女性の「親との信頼関係の確立」,「主体的自己」,「自尊感情」を低めてしまうと考えられる。

「親からの心理的分離」については,男性は,大学生になってもまだ親子関係の影響を受けており,特に母との関係において影響を受けていた。父との関係においては,唯一,父に依存・同調することが心理的分離や自尊感情を低めていた。

このことは,男性は,青年期において父と対決しそれを乗り越えることにより主体的に行動できる自我が形成される(松元,1996)はずが,父子関係の希薄さゆえに獲得しづらいものとなり,親子関係も母-息子関係に偏重してしまい,母との対立・葛藤は情緒的なものとなり,息子の自立に影響を及ぼすという今日的な問題が反映されているのではないかと考える。

以上より,青年が,親子間の対立・葛藤を経て,「一人の人間として親を認知」(小高,1998)し,「子が親から信頼・承認されている関係」(落合・佐藤,1996)である相互的な関係を築いていく過程において,青年期後期においてもなお一部に親子の対立・葛藤が,精神的自立や自尊感情を低める影響を及ぼす要因となっていることが明らかとなった。

本研究で示唆された男性の母との関係における「親からの心理的分離」や「自尊感情」の低下は,「現代青年男子の自我の発達の遅れ」(大野,2008)を反映しているものと考えられ,親子関係につまずきを抱えた特に男子青年のカウンセリング場面において,カウンセラーが考慮せねばならない現状のひとつを提示できたのではないかと考える。

5. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点としては,サンプリングの問題があげられる。本研究では対象者の男女数に差があり,対象者を追加してさらなる検討が必要である。次に,本研究では,青年期後期に焦点をあて尺度の作成をおこなったが,発達的視点から,今後青年が成人期に移行するにつれ青年の親子関係の認知が変容していくことが考えられ,縦断的にとらえていくことが必要であろう。

また, 一卵性親子(信田,1997)や友達のような親子(斎藤,2009)と言われるように,現代の親子関係は穏やかである(藤原,2016;小高,2008;Steinberg,2001;渡邊,1994)。しかし,この穏やかな現代の親子関係が,親子間の対立・葛藤における青年の反応が表面化しにくい状況を招いてしまい,青年の自立の妨げの要因のひとつとなっている可能性も考えられ更なる検討が必要であろう。

さらに,本研究では,親子の対立・葛藤における青年の反応が精神的自立,自尊感情にいかに影響を及ぼすかについて検討したが,逆の影響関係,つまり,親子の対立・葛藤における青年がどのように反応するのかは精神的自立,自尊感情に影響されるという方向性も考えられる。Table4-3-7 の決定係数の値がさほど高くないことを考慮すると,これらの方向性はどちらの方向も存在する可能性があることは否定できず,今後更なる検討が必要であると考える。

注

1) 項目の評価点平均の設定については,各領域の項目数,全項目数を考慮して検討した結果,評価平均 3.5 以上の項目の選定が適当であると判断した。
2) 本調査で父母同一の調査用紙を用いて比較検討するために,予備調査では父母を特定せず親とした。

第 5 章　親子関係における未解決の問題と関係の良好さ ＜研究 4＞

現代の親子関係は穏やかである(小高,2008;Steinberg,2001;渡邊,1994)と言われているが,一卵性親子(信田,1997)や友達のような親子(斎藤,2009)と言われる現代の親子関係によって,親子間の対立・葛藤が表面化しにくい状況を招いてしまい,青年の自立の妨げの要因のひとつとなっている可能性が考えられる。

そこで,青年期後期の親子関係において,現在の親子関係の良好さの程度によって,親子の対立・葛藤が起きたとき青年の反応に違いがあるのか,また,青年が今でも心の中で解決できずに引きずったままの未解決の問題を抱えている場合, 親子の対立・葛藤が起きたとき青年の反応に違いがあるのかを検討する必要があると思われる。先行研究ではみあたらない,親子関係において青年が今でも心の中で解決できずに引きずったままの未解決の問題とはいかなるものであるかを本章で検討することにする。また,青年が現在の親子関係を良好と認知している場合,未解決の問題を抱えている者とそうでない者とに差異があるのかを検討し,親子関係の良好さと未解決の問題の関連について明らかにするすることにする。そして,それらの結果を＜研究 5＞で,成人期初期の未婚女性のうち,現在の母娘関係が良好でありながらも未解決の問題を抱えている娘の未解決の問題に対する認知が,青年期後期からいかに変容しているのかを解明するために用いることとする。

第 1 節　未解決の問題〈調査 1〉

1. 目　的

親子関係において,青年が今でも心の中で解決できずに引きずったままの未解決の問題を収集し,青年にとってどのようなことが未解決の問題としてとらえられているか検討することを目的とする。

2. 方　法

(1) 調査対象

対象者は,＜研究 3＞の〈調査 1〉と同様である。

(2) 手続き

＜研究 3＞の〈調査 1〉と同様である。

(3) 調査内容

1)エピソードの自由記述

青年に,親子関係において,どのような場面で今でも心の中で解決できずに引きずったままの未解決の問題が生じ,その時に青年がどう感じたかを自由記述により記してもらった。

2)フェイスシート

＜研究 3＞の〈調査 1〉と同様である（Table4-5-1 参照)。

(4)倫理的配慮

＜研究 3＞の〈調査 1〉と同様である。

3. 結　果

自由記述により,14 の未解決な問題についての記述が得られた。それらを青年の反応に着目して,領域を分類した。結果は,Table5-1-1 に示すとおりである。なお,自由記述では,未解決の問題の対象者(父か母か)が不明であったり,両親を対象にした記述もあったので,父母を分けていない。

Table5-1-1　親子関係における未解決の問題

N=132

	男性	女性	合計
親への反発	1	6	7
親への落胆	1	4	5
親への依存・同調	1		1
親の過剰な期待		1	1
	3	11	14

未解決の問題を抱えていた者は,132 名中 14 名（10.6%）であり,現代の青年は,大半の者が親子間でそう深刻な問題を抱えてはいないということが言えよう。

未解決の問題についての記述は,「親への反発」,「親への落胆」,「親への依存・同調」,「親の過剰な期待」の４つの領域に分類され,「親への反発」,「親への落胆」についての記述が多くみられ,男性より女性の方が,未解決の問題を抱えていた。未解決の問題についての記述は,「親への反発」が最も多く,親側の親としての自覚の欠如した言動が多く語られ,親自身の親としてふるまうための原体験の少なさ(斎藤,2009)という親側の問題が絡んでいることがうかがわれた。

第 2 節　親子関係における未解決の問題と関係の良好さ〈調査 2〉

1. 目　的

親子の対立・葛藤における青年の反応と,親子関係における未解決の問題と関係の良好さとの関連について検討することを目的とする。

2. 方　法

(1) 調査対象

対象者は,＜研究 3＞の〈調査 3〉と同様である。

(2) 手続き

＜研究 3＞の〈調査 3〉と同様である。

(3) 倫理的配慮

＜研究 3＞の〈調査 3〉と同様である。

(4) 調査内容

1) 親子の対立・葛藤における青年の反応

藤原（2015）の親子の対立・葛藤における青年の反応（35 項目）を用いて,父・母それぞれについて尋ねた。下位尺度は,「親への反発」,「親への依存・同調」,「親への落胆」,「自己優先」の 4 次元から構成され,回答は,「あてはまる(5)」,「ややあてはまる(4)」,「どちらでもない(3)」,「あまりあてはまらない(2)」,「あてはまらない(1)」の 5 件法で評定を求めた。

2）親子関係の良好さ

父・母それぞれとの関係性の良好さを尋ねた。回答は，「良好でない(4)」，「あまり良好でない(3)」，「やや良好である(2)」，「良好である(1)」の 4 件法で評定を求めた。

3）親子関係における未解決の問題

父・母それぞれに対する未解決の問題の有無を尋ねた。回答は，「ない(2)」，「ある(1)」の 2 件法で評定を求めた。

4）フェイスシート

＜研究 3＞の〈調査 3〉と同様である（Table4-5-1 参照）。

3. 結　果

(1) 親子関係における未解決の問題の有無と親子関係の良好さの度数

まず，親子関係における未解決の問題の有無と関係の良好さの人数の差を検討するために親子の性別の組み合わせで χ^2 検定をおこなった結果，すべて有意（$p<.001$）であった（父・男　χ^2（3）=36.02；父・女　χ^2（3）=59.26；母・男　χ^2（3）=31.44；母・女　χ^2（3）=39.49）。

次に，親子関係における未解決の問題の有無と関係の良好さの出現頻度をみた。結果は，Table5-2-1 に示すとおりである。

Table5-2-1　親子関係における未解決の問題の有無と良好さ

＜父との関係＞　　*N*=360

	男性			女性		
	父未解決			父未解決		
父との仲	あり	なし	合計(%)	あり	なし	合計(%)
良好	6(4.3)	47(34.1)	53(38.4)	8(3.6)	98(44.2)	106(47.8)
やや良好	13(9.4)	52(37.7)	65(47.1)	24(10.8)	46(20.7)	70(31.5)
あまり良好でない	9(6.5)	5(3.6)	14(10.1)	18(8.1)	14(6.3)	32(14.4)
良好でない	6(4.3)	0(0.0)	6(4.4)	12(5.4)	2(0.9)	14(6.3)
合計	34(24.6)	104(75.4)	138(100.0)	62(27.9)	160(72.1)	222(100.0)

＜母との関係＞　　*N*=360

	男性			女性		
	母未解決			母未解決		
母との仲	あり	なし	合計(%)	あり	なし	合計(%)
良好	4(2.9)	67(48.6)	71(51.5)	11(4.9)	113(50.9)	124(55.9)
やや良好	13(9.4)	44(31.9)	57(41.3)	34(15.3)	49(22.1)	83(37.4)
あまり良好でない	3(2.2)	3(2.2)	6(4.4)	6(2.7)	3(1.4)	9(4.1)
良好でない	4(2.9)	0(0.0)	4(2.9)	3(1.4)	3(1.4)	6(2.7)
合計	24(17.4)	114(82.6)	138(100.0)	54(24.3)	168(75.7)	222(100.0)

親子関係の良好さについては，父との関係では，「良好である」，「やや良好」と回答した者は，男性で 118 名(85.5%)，女性で 176 名(79.3%)，母との関係では，男性で 128 名(92.8%)，女性で 207 名(93.3%)であり，男女ともほとんどの者が両親と良好な関係であったが，父より母との関係を良好ととらえる青年の割合が若干多かった。

また，親子関係における未解決の問題を抱えている青年は，父との関係では，男性で 34 名(24.6%)，女性で 62 名(27.9%)，母との関係では，男性で 24 名(17.4%)，女性で 54 名(24.3%)であり，男女ともに，母より父との関係で未解決の問題を抱えている割合が若干高かった。前節（Table5-1-1）では未解決の問題を抱えた者は，全体の 1 割程度であったが，本節（Table5-2-1）では，父母との関係で男女ともに 2 割前後の者が未解決の問題を抱えていると回答していた。未解決の問題についての質問は回答しづらいセンシティブな側面を含んでいると考えられ，前節では，参加者が自己開示を控えたことが推測され，前節の自由記述よりも本節の質問紙のほうが自己開示しやすかったのかもしれない。

そして，親子関係の良好さを「良好である」，「やや良好」と回答したにもかかわらず，未解決の問題を抱えている者は，父との関係では，男性で 19 名(13.7%)，女性で 32 名(14.4%)，母との関係では，男性で 17 名(12.3%)，女性で 45 名(20.2%)であり，母娘関係における未解決の問題を抱えている者が一番多かった。

(2) 親子関係における未解決の問題の有無の検討

親子の対立・葛藤における青年の反応が，未解決の問題の有無，および，男女で違いがみられるのかを検討するために，2 要因の分散分析をおこなった。結果は Table 5-2-2 に示すとおりである。

Table5-2-2　未解決の問題と親子の対立・葛藤における青年の反応の分散分析結果

＜父との関係＞　　*N*=360

	男性（*n*=138）未解決		女性（*n*=222）未解決		未解決	男・女	未解決×男・女		
	あり (*n*=34)	なし (*n*=104)	あり (*n*=62)	なし (*n*=160)	*F*値	*F*値	*F*値		
父への反発	3.30	2.65	3.69	2.93	52.50 ***	11.46 **	*n.s.*	あり＞なし,	男＜女
	(0.89)	(0.81)	(0.76)	(0.77)					
父への依存・同調	2.58	2.52	2.74	2.58	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*		
	(0.73)	(0.77)	(0.72)	(0.67)					
父への落胆	3.17	2.35	3.58	2.38	75.42 ***	*n.s.*	*n.s.*	あり＞なし	
	(1.11)	(0.85)	(1.07)	(0.90)					
自己優先	3.04	2.49	3.44	2.61	40.35 ***	5.82 *	*n.s.*	あり＞なし,	男＜女
	(1.03)	(0.85)	(0.95)	(0.84)					

＜母との関係＞　　*N*=360

	男性（*n*=138）未解決		女性（*n*=222）未解決		未解決	男・女	未解決×男・女		
	あり (*n*=24)	なし (*n*=114)	あり (*n*=54)	なし (*n*=168)	*F*値	*F*値	*F*値		
母への反発	3.14	2.80	3.86	3.13	24.56 ***	23.66 ***	*n.s.*	あり＞なし,	男＜女
	(0.83)	(0.89)	(0.61)	(0.76)					
母への依存・同調	2.75	2.62	3.07	2.80	*n.s.*	6.29 *	*n.s.*		男＜女
	(0.87)	(0.80)	(0.78)	(0.66)					
母への落胆	2.83	2.18	3.02	2.09	36.67 ***	*n.s.*	*n.s.*	あり＞なし	
	(1.15)	(0.88)	(1.17)	(0.88)					
自己優先	2.90	2.50	3.10	2.58	13.02 ***	*n.s.*	*n.s.*	あり＞なし	
	(1.15)	(0.88)	(1.02)	(0.91)					

(　　)は標準偏差.　　$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$.

未解決の問題の有無によって有意差がみられたのは,父との関係,母との関係の双方ともに「親への反発」,「親への落胆」,「自己優先」で,いずれも未解決の問題無しより未解決の問題有りのほうが高かった。また,男女で有意差がみられたのは,父との関係では,「父への反発」,「自己優先」が,母との関係では,「母への反発」,「母への依存・同調」が男性より女性の得点が高かった。なお,交互作用は抽出されなかった。

親子間で未解決の問題が存在すると,青年は,未解決の問題を抱えていない者よりも,親子間の対立・葛藤における反応を高める傾向があること,そして,男性より女性の方が,親子間の対立・葛藤における反応を高める傾向があることが明らかとなった。

(3) 親子関係の良好さの検討

親子の対立・葛藤における青年の反応が,親子関係の良好さに違いがみられるのかを検討するために,2 要因の分散分析をおこなった。なお,親との関係性の良好さを質問紙では 4 件法で尋ねたが,対象者の数に偏りがあったため,「良好である」,「やや良好である」,「あまり良好でない」,「良好でない」のうち,「良好である」,「やや良好である」を「良好」,「あまり良好でない」,「良好でない」を「非良好」として検討した。結果は Table 5-2-3 に示すとおりである。

Table5-2-3　親子関係の良好さと親子の対立・葛藤における青年の反応の分散分析結果

＜父との関係＞　　N=360

	男性 (n=138) 良好 (n=118)	男性 非良好 (n=20)	女性 (n=222) 良好 (n=176)	女性 非良好 (n=46)	仲の良さ F値	男・女 F値	仲の良さ×男・女 F値	
父への反発	2.74	3.24	2.95	3.86	36.58 ***	12.53 ***	*n.s.*	良好＜非良好, 男＜女
	(0.85)	(0.88)	(0.77)	(0.70)				
父への依存・同調	2.55	2.42	2.65	2.53	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*	
	(0.74)	(0.86)	(0.66)	(0.79)				
父への落胆	2.38	3.55	2.37	4.04	123.33 ***	*n.s.*	*n.s.*	良好＜非良好
	(0.86)	(1.08)	(0.90)	(0.70)				
自己優先	2.51	3.30	2.59	3.83	69.49 ***	6.11 *	*n.s.*	良好＜非良好, 男＜女
	(0.86)	(1.01)	(0.80)	(0.79)				

＜母との関係＞　　N=360

	男性 (n=138) 良好 (n=128)	男性 非良好 (n=10)	女性 (n=222) 良好 (n=207)	女性 非良好 (n=15)	仲の良さ F値	男・女 F値	仲の良さ×男・女 F値	
母への反発	2.79	3.71	3.25	4.13	28.37 ***	6.78 **	*n.s.*	良好＜非良好, 男＜女
	(0.86)	(0.78)	(0.77)	(0.69)				
母への依存・同調	2.62	3.02	2.88	2.74	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*	
	(0.80)	(0.88)	(0.67)	(1.03)				
母への落胆	2.17	3.88	2.19	4.12	92.74 ***	*n.s.*	*n.s.*	良好＜非良好
	(0.85)	(0.94)	(0.91)	(0.96)				
自己優先	2.47	3.90	2.62	3.91	52.31 ***	*n.s.*	*n.s.*	良好＜非良好
	(0.87)	(0.89)	(0.89)	(1.14)				

(　　) は標準偏差.　　$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$.

親子関係の良好さによって有意差がみられたのは,父との関係,母との関係の両方ともに「親への反発」,「親への落胆」,「自己優先」で,いずれも親子関係非良好が良好より得点が高かった。なお,交互作用は抽出されなかった。親子関係が良好でない場合,青年は,親との対立・葛藤が起きたとき「親への反発」,「親への落胆」,「自己優先」の反応が高まる傾向があることが明らかとなった。

(4) 親子関係が良好な者における未解決の問題の有無と親子の対立・葛藤における青年の反応についての検討

親子関係が良好であると認知している者のうち,未解決の問題の有無によって,親子の対立・葛藤における青年の反応に違いがみられるのかを検討するために2要因の分散分析をおこなった。なお,前項の(3)の分析と同様に,親との関係性の良好さを質問紙では4件法で尋ねたが,対象者の数に偏りがあったため,「良好である」,「やや良好である」,「あまり良好でない」,「良好でない」のうち,「良好である」,「やや良好である」を「良好」,「あまり良好でない」,「良好でない」を「非良好」として検討した。結果は Table5-2-4 に示すとおりである。

Table 5-2-4 親子関係が良好な者における未解決の問題の有無と
親子の対立・葛藤における青年の反応の分散分析結果

＜父との関係＞ N=294

	男性（n=118）未解決		女性（n=176）未解決		未解決	男・女	未解決×男・女	
	あり (n=19)	なし (n=99)	あり (n=32)	なし (n=144)	F値	F値	F値	
父への反発	3.31	2.62	3.36	2.86	23.05 ***	*n.s.*	*n.s.*	あり＞なし
	(0.84)	(0.81)	(0.73)	(0.75)				
父への依存・同調	2.71	2.52	2.85	2.60	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*	
	(0.62)	(0.77)	(0.63)	(0.66)				
父への落胆	2.71	2.32	2.99	2.23	18.03 ***	*n.s.*	*n.s.*	あり＞なし
	(0.93)	(0.83)	(1.03)	(0.80)				
自己優先	2.77	2.46	3.03	2.49	11.19 **	*n.s.*	*n.s.*	あり＞なし
	(0.89)	(0.85)	(0.91)	(0.74)				

＜母との関係＞ N=335

	男性（n=128）未解決		女性（n=207）未解決		未解決	男・女	未解決×男・女		
	あり (n=17)	なし (n=111)	あり (n=45)	なし (n=162)	F値	F値	F値		
母への反発	2.98	2.76	3.83	3.09	16.25 ***	24.46 ***	4.89*	あり＞なし,	男＜女
	(0.79)	(0.87)	(0.57)	(0.74)					
母への依存・同調	2.69	2.60	3.14	2.81	*n.s.*	8.65 **	*n.s.*		男＜女
	(0.83)	(0.80)	(0.68)	(0.65)					
母への落胆	2.45	2.13	2.78	2.02	16.54 ***	*n.s.*	*n.s.*	あり＞なし	
	(0.99)	(0.82)	(1.05)	(0.80)					
自己優先	2.90	2.50	3.10	2.58	*n.s.*	4.15 *	*n.s.*		男＜女
	(1.15)	(0.88)	(1.02)	(0.91)					

（　　）は標準偏差.　　*p＜.05, **p＜.01, ***p＜.001.

親子関係が良好な者のうち未解決の問題の有無によって有意差がみられたのは,父との関係では,「父への反発」,「父への落胆」,「自己優先」であり,母との関係では,「母への反発」,「母への落胆」で,未解決の問題有りが無しより高かった。また,「母への反発」で交互作用が有意となり（ F(1,331)=4.889,p＜.05）, 単純主効果の検定をおこなった。その結果,性別については女性の単純主効果（ F(1,331)=33.015,p＜.001）,未解決の問題有りの単純主効果（ F(1,331)=15.202,p＜.001）, 未解決の問題無しの単純主効果（ F(1,331)=11.846,p＜.01）が有意であった。

第3節　考　察

1. 親子関係における未解決の問題と良好さについて

現代の親子関係は穏やかである（小高,2008;Steinberg,2001;渡邊,1994）と言われるように，本研究でも同様な結果が得られ，親子関係が良好な青年がほとんどであった。母との関係が良好と答える青年は男女ともに 9 割を超え,父との関係が良好と答える青年も男女ともに8割を超え,父との関係では男性が女性より若干高かった。現代は,父との希薄な関係(小野寺,1984;渡邊,1994)により親子関係が母との関係に偏重していると言われているが,この結果を見るかぎり,父との関係が希薄であるとは言い難い。しかし,質問の「良好な関係」を青年がどのように解釈したかによって結果に影響があると考えられ,「良好な関係」を単に「表立ったトラブルのない関係」と解釈した可能性があると思われる。

さらに,一割強の男女が,親との関係を良好であると答えているにもかかわらず,未解決の問題を抱えており,特に女性の2割強が,母との関係で関係を良好であると答えているにもかかわらず未解決の問題を抱えていた。親子関係が良好であるにもかかわらず,未解決の問題を抱えているという一見矛盾した回答は,青年が現在良好な親子関係にわざわざ未解決の問題を持ち込んで関係性を悪化させたくないと考えているのか，その原因は本研究では解明されていない。しかし，一卵性親子(信田,1997)や友達のような親子(斎藤,2009)と言われるような現代の親子関係によって,親子間の対立・葛藤における青年の反応が,表面化されにくくなり,未解決の問題もあえて俎上に上げにくい状況を作り出している可能性も考えられる。

未解決の問題では,未解決の問題を抱えている青年が問題のない青年よりも,親子の対立･葛藤における反応が強いことが明らかとなり,青年が親子関係において未解決の問題を抱えていると,親子間の対立・葛藤における反応を強めることが示された。また,男性より女性の方が,親子間の対立･葛藤における反応を高める傾向があることが明らかとなったが,このことは,親子関係において,女性は,男性に比べ,一般的に日頃から母との接触や交渉が頻繁で緊密であり（Lawton et al,1994）,接触や交渉の頻度や密度が高くなれば親近感や信頼感も増すであろうが,同時にまた葛藤を生じる機会も増える(山田,1986)ことが関連していると考えられる。一方,父との関係においては，小野寺(2009)は,父に対する感情が,大学生男子より女子の方が強く,男子よりも女子が父に対して自分の気持ちを理解し認めてもらいたいという気持ちが強い傾向であることを示唆しており,父に自分の気持を理解

し認めてもらえないと女性は男性より強く反応してしまうと考える。また,女性は男性より「母への依存・同調」に強く反応していたが,このことは,息子よりも娘の方が母に依存的である（渡邊,1997）ことが関連していると考える。そして，親子の対立・葛藤における青年の反応の各因子とも母より父の方が高かったのは,希薄な父との関係(小野寺,1984;渡邊,1994)が関連していると思われる。

親子関係の良好さでは,親子関係が非良好な青年ほど親子の対立・葛藤における反応が強いことが明らかとなり，親子の対立・葛藤があると，現在の親子関係の良好さの認知は青年の反応を低めることが示された。そして,親子関係が非良好な青年ほど，親子の対立・葛藤があると,親に対し落胆を強め,自己を優先することがうかがえた。

また,現在の親子関係が良好であっても未解決の問題を抱えている者は,そうでない者より親子の対立・葛藤における反応が強いことが明らかとなった。青年にとって,たとえ現在の親子関係が良好であっても,親子の対立・葛藤の場面での親認知で未解決の問題の影響を受けていることが示された。そして,その傾向は,母娘関係で顕著であることが明らかとなった。母と娘の関係というのは,心理的距離をとりにくく,母は娘をまるで自分の体の延長のように感じてしまう（斎藤,1995）ゆえに,娘は自分と同じように感じているはずと娘の思いなど考えもしない母に対する娘の葛藤があることで,母との対立・葛藤場面で男性より強く反応してしまうのではないかと考える。

2. 本研究の問題点と今後の課題

本章では，先行研究ではいまだ実証的には解明されていない青年が抱えている親子関係における未解決の問題と,関係の良好さについて親子の対立・葛藤における青年の反応との関連を検討した。その結果，親子間に対立・葛藤があると親子関係が非良好な青年の方が良好な青年より強く反応し,男性より女性のほうが強く反応すること,未解決の問題を抱えている青年の方がそうでない青年より強く反応することが明らかとなった。また,親子関係が良好であっても,未解決の問題を抱えている者はそうでない者より強く反応することが示された。

本研究の問題点として,調査内容が親子関係におけるネガティヴな面についての質問であり,回答しづらいセンシティブな側面を含んでおり,多くの参加者を得られなかった点がある。そしてそれに伴い,参加者の男女数に差があり,今後参加者を追加して更なる検討が必要であると考える。また,ワーディングの問題として,「親子の良好さ」について,より内

面的な関係性の尋ね方の検討も必要であろう。そして，山岸(2009)は，成人期の女性の母親認知が，母との過去の関係の影響を受ける一方，現在の発達的状況的要因の影響も受けることを示唆しているが，今後青年が成人期に移行するにつれ，青年の心理的発達や状況的な要因により，青年の親子関係の認知がどのように変容していくのかについての検討が必要であると思われる。

第 6 章　成人期初期の未婚女性における母娘関係の親密さと葛藤＜研究 5＞

＜研究 1＞,＜研究 2＞では,量的研究によって成人期初期の未婚女性における母娘関係を検討したが,＜研究 1＞で,未婚群の居住状況の違いから,母と同居している未婚女性が道具的にも情緒的にも母に依存している現状を明らかにした。

そこで,本章では，成人期初期の未婚女性におけるの母娘関係の親密さと葛藤を検討するために,日常的に頻繁に接触があり母娘関係の親密さと葛藤が現れやすいと推測される母と同居中の未婚女性に,半構造化面接による調査をおこなう。未婚女性に母娘関係を語ってもらうことで,成人期初期の母娘関係がどのようなものであり,そしてそれが青年期後期(青年期後期として大学生時代を取り上げる)の母娘関係からどのように変容してきたを検討することで,量的研究ではとらえることができなかった母娘関係の特徴を明らかにしたいと考える。そして,＜研究 3＞,＜研究 4＞で明らかとなった青年期後期の親子の対立・葛藤における青年の反応と未解決の問題についての青年の認知を参考に，親子の対立・葛藤における青年の親子関係の認知と成人期初期の娘が語る青年期後期における母親認知とに類似性がみられるのか,また,母娘関係における未解決の問題に対する娘の認知が成人期初期にいかに変容しているのかについて明らかにする。さらに,母との関係を「重い」と感じるときの娘の母親認知と反応について検討することによって,支配的な母に対する娘の葛藤をさらに追及したいと考える。

第 1 節　成人期初期の母娘関係 ＜分析 1＞

1. 目　的

成人期初期の母と同居している未婚女性を対象に,半構造化面接によって母娘関係についての特徴を明らかにし,青年期後期からいかに変容しているのかを検討することを目的とする。また,生育史の視点から特に親密な母娘関係である者と特に葛藤のある母娘関係の者を取り上げ比較しその違いを検討することを目的とする。

2. 方　法

(1) 調査対象

首都圏近郊で母と同居中の未婚女性１７名[1)]を対象に実施した。

(2) 手続き

調査者が,知人を介して面接調査の依頼をおこない,面接調査の趣旨説明に同意を得た後,対象者に日時と場所を検討してもらい,調査者が出向いて半構造化面接を実施した。調査は,201x 年１２月下旬から 201x＋1 年４月にかけて実施し,面接の場所は,対象者の希望に沿って,面接調査に適し,プライバシーを十分に保護することができる場所を設定した。面接の所要時間は,約 50 分前後であることを事前に伝えた。面接の内容は,対象者の承諾を得た上で,レコーダーに録音した。調査者は,対象者が話しやすい雰囲気を作ることを心がけ,対象者の語りに共感的に耳を傾けた。面接の所要時間は,おおよそ 60～70 分位であった。

(3) 調査内容

面接に先立って,対象者に,質問紙に記入をしてもらい,その後,面接で母と娘の関係について語ってもらった。

1) 質問紙

①母娘関係

研究 1 で作成した「青年期後期から成人期初期における母娘関係尺度」(35 項目)を用いた。下位尺度は,「母への支え」,「過去の対立・葛藤」,「母の支配」,「母への信頼」,「母への依存」の 5 次元から構成され,回答は,「非常にあてはまる(5)」,「あてはまる(4)」,「どちらでもない(3)」,「あてはまらない(2)」,「全くあてはまらない(1)」の 5 件法で評定を求めた。

②母との仲の良さ

現在,母との仲の良さが,対象者から見てどの程度であるかを尋ねた。回答は,「良好である」,「やや良好である」,「あまり良好でない」,「良好でない」のうち一つを選択してもらった。

③母との関係の「重さ」

現在,母との関係を「重い」と感じた程度を尋ねた。回答は,「よく感じる」,「たまに感じる」,「あまり感じない」,「ほとんど感じない」のうち一つを選択してもらった。

④未解決の問題の有無

現在,母との関係において,今でも心の中で解決できずに,引きずったままの未解決の問題があるかどうかを尋ねた。回答は,「ない」,「ある」のうち一つを選択してもらった。

⑤フェイスシート

対象者の年齢,学歴,職業,健康状態と,母の年齢,学歴,職業,健康状態を尋ねた。

2) 面接の内容

半構造化面接の内容は,以下のとおりである。

① 先行研究（Bojczyk et al,2011;山岸,2000;山岸・井森,2008）を参考に「幼少期」,「小学生時代」,「中学生時代」,「高校生時代」,「大学生時代」(「浪人生時代」,「短大・専門学校時代」,「大学院生時代」を含む）,「社会人以降」に分けて,特に想起されやすい「大学生時代」,「社会人以降」を中心に,各時期において回想されるエピソードをとおして母との関係や母をどのようにとらえているかの母親認知について語ってもらった。なお,調査ではあくまでも対象者の自由な語りを尊重し,必ずしも幼少期から順次に語る必要はなく,想起できる時期から自由に語ってもよいこと,エピソードを語らない時期があっても強要されることはないことを伝えた。

②母娘関係で,いまだに解決できない未解決の問題があると質問紙で回答した対象者に,それにまつわるエピソードを語ってもらい,現在未解決の問題について如何にとらえているのかを語ってもらった。なお,調査ではあくまでも対象者の自由な語りを尊重し,質問紙でいまだに解決できない未解決の問題があると回答していても,語りたくない場合は,語る必要がないことを伝えた。

③母娘関係で母が「重い」と感じるときがあると質問紙で回答した対象者に,それにまつわるエピソードを語ってもらい,現在母を「重い」と感じるときの娘の思いを語ってもらった。なお,調査ではあくまでも対象者の自由な語りを尊重し,質問紙で母が「重い」と感じるときがあると回答していても,語りたくない場合は,語る必要がないことを伝えた。

(4) 分析手続き

質的コード化(Coffey & Atkinson,1996)とその手法を用いた先行研究（山田,2012;山根,2012)を参考に分析をおこなった。質的コード化の手法とは,データに即した分析カテゴリーを生成する質的分析法のひとつであり,既存の枠組みではなく,データそのものからカテゴリーを生成し,分析に用いるものである（徳田,2004)。

また,質的コード化の手法は,事例数と関わりなく詳細なコード化をおこなうことができ,本研究の対象者数が限られた＜分析 2＞の未解決の問題についての語りや＜分析 3＞の母との関係を「重い」と感じるときの語りの分析にも用いることが可能である。

分析の手順は,山田（2012）を参考に以下のとおりにおこなった。

①各対象者の語りの内容や特徴に応じてデータを区切り,その区切られたデータの内容を反映させるようなラベルを与えコード化した。

②これら個々のラベルは,データ間の類似性や差異の観点から,カテゴリーとして整理統合された。

③生成されたカテゴリーは,再びデータに戻って検討され,修正を重ねることで洗練されていったが,ラベル・カテゴリーの整合性とカテゴリーの名称の適切さの検討を臨床心理士1名に再評価してもらい,筆者と評価が異なる場合はその都度協議し修正することでさらに洗練されていった。そして,これらの手順を通していくことで,データに即したカテゴリーが生成されたと判断した。

(5)面接の留意点と面接後のケアについて

面接の留意点として,面接時は終始和やかに会話がなされるように常に配慮し,対象者が話したくないことは無理に話す必要がないことを伝え,面接終了時には参加者が言い残したことがないか,また,精神的に不安定な状態ではないかを丁寧に慎重に尋ねた。なお,各面接とも終始和やかに進行し,面接後の精神的ケアを必要とする対象者はいなかった。

(6)倫理的配慮

本研究は「聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会」の承認(聖大総第715号)を得て実施した。面接開始時に,研究の目的,個人情報の保護,同意撤回の権利,レコーダーによる面接内容の録音,結果の公開について文書および口頭で説明し,改めて研究の同意を求めた上で,同意書に調査者と調査参加者双方による署名をしたのち提出してもらった。

3. 結　果

(1) 対象者の属性

対象者の属性は,Table6-1-1に示すとおりである。対象者の平均年齢は,30.47歳（*SD* = 5.04）,母の平均年齢は,59.71歳（*SD* = 5.10）であった。

Table 6-1-1　対象者の属性

対象者	年齢	学歴	就労状況	健康状態	母：年齢	母：学歴	母：就労状況	母：健康状態
A	20歳代	大学	フルタイム	良好	60歳代	短大・専門学校	フルタイム	良好
B	20歳代	大学院	フルタイム	まあ良好	60歳代	大学	専業主婦・無職	まあ良好
C	20歳代	大学院	フルタイム	良好	50歳代	短大・専門学校	フルタイム	まあ良好
D	30歳代	大学院	フルタイム	良好	60歳代	大学	専業主婦・無職	あまり良好でない
E	20歳代	大学院	パート・アルバイト	まあ良好	50歳代	大学	フルタイム	まあ良好
F	30歳代	大学院	フルタイム	良好	60歳代	短大・専門学校	専業主婦・無職	良好
G	30歳代	短大・専門学校	フルタイム	良好	60歳代	短大・専門学校	パート・アルバイト	良好
H	20歳代	大学	家事手伝い	良好	50歳代	短大・専門学校	専業主婦・無職	あまり良好でない
I	20歳代	大学	フルタイム	良好	50歳代	高校	フルタイム	良好
J	30歳代	短大・専門学校	フルタイム	良好	60歳代	短大・専門学校	パート・アルバイト	あまり良好でない
K	20歳代	大学院	パート・アルバイト	良好	50歳代	高校	パート・アルバイト	良好
L	30歳代	大学	フルタイム	良好	50歳代	短大・専門学校	フルタイム	良好
M	20歳代	短大・専門学校	その他	まあ良好	60歳代	短大・専門学校	パート・アルバイト	良好
N	20歳代	短大・専門学校	その他	良好	50歳代	短大・専門学校	専業主婦・無職	あまり良好でない
O	30歳代	大学	フルタイム	良好	70歳代	大学院	フルタイム	まあ良好
P	20歳代	大学院	フルタイム	良好	50歳代	高校	専業主婦・無職	まあ良好
Q	30歳代	大学	フルタイム	まあ良好	60歳代	大学	専業主婦・無職	まあ良好

対象者については,学歴は,大学院 7 名,大学 6 名,短大・専門学校 4 名であった。就労状況は,フルタイムが 12 名,パート・アルバイト 2 名,家事手伝い・その他が 3 名であった。健康状態は,良好 13 名,まあ良好 4 名であった。

母については,学歴は,大学院 1 名,大学 4 名,短大・専門学校 9 名,高校 3 名であった。就労状況は,フルタイムが 6 名,パート・アルバイト 4 名,専業主婦・無職が 7 名であった。健康状態は,良好 7 名,まあ良好 6 名,あまり良好でない 4 名であった。

(2)　質問紙による現在の母親との関係

1)仲の良さの程度,「重い」と感じる程度,未解決の問題の有無

各対象者の現在の母との関係における,仲の良さの程度,「重い」と感じる程度,未解決の問題の有無についての結果は,Table6-1-2 に示すとおりである。

Table 6-1-2　現在の母との関係

対象者	母との仲の良さの程度	母との関係を「重い」と感じる程度	未解決の問題の有無
A	とても仲が良い	あまり感じない	無し
B	まあまあ仲が良い	たまに感じる	有り
C	とても仲が良い	ほとんど感じない	無し
D	まあまあ仲が良い	たまに感じる	無し
E	まあまあ仲が良い	たまに感じる	有り
F	まあまあ仲が良い	よく感じる	無し
G	まあまあ仲が良い	よく感じる	有り
H	とても仲が良い	ほとんど感じない	無し
I	まあまあ仲が良い	ほとんど感じない	無し
J	まあまあ仲が良い	あまり感じない	有り
K	あまり仲が良くない	たまに感じる	有り
L	まあまあ仲が良い	ほとんど感じない	無し
M	とても仲が良い	あまり感じない	無し
N	まあまあ仲が良い	よく感じる	有り
O	とても仲が良い	あまり感じない	無し
P	まあまあ仲が良い	たまに感じる	無し
Q	まあまあ仲が良い	たまに感じる	無し

K以外の各対象者は母との関係が良好(「とても仲が良い」・「まあまあ仲がよい」)と回答しており,＜研究 4＞の結果と同様に,成人期初期においても母娘関係は良好であるといえるであろう。

次に,母との関係を「重い」と感じる者は,「たまに感じる」が6名,「よく感じる」が3名で,対象者の半数以上が母との関係を「重い」と感じており,娘にとって母が少々負担になっているのを推測させる結果であった。

また,未解決の問題を抱えている者は,6 名 (35.3%) であり,3 割強の者が母との関係において未解決の問題を抱えていた。この結果は,＜研究 4＞の Table5-2-1 での青年期後期の女性では,母との関係において未解決の問題を抱えている者が全体の 54 名(24.3%)であり,成人期初期の女性で未解決の問題を抱えている者の割合のほうが高くなっていた。

そして,現在の母との関係を良好 (「とても仲が良い」,「まあまあ仲が良い」) と回答した者のうち,未解決の問題を抱えている者は,5名(29.41%)であり,＜研究4＞のTable5-2-1での青年期後期の女性では,現在の母との関係を良好であるとしながらも未解決の問題を抱えている者が 45 名(20.2%)であったことを考慮すると,成人期初期の女性で現在の母との関係を良好であるとしながらも未解決の問題を抱えている者の割合は,若干高い結果となった。

2)母娘関係の下位尺度得点

各対象者の母娘関係尺度の因子得点を算出した。結果は,Table6-1-3 のとおりである。また,本章の平均得点と＜研究 1＞の母娘関係尺度の下位尺度得点の未婚群(n = 113)の平均得点を併せて,Fig.6-1-1 で示した。

Table 6-1-3　現在の母娘関係の下位尺度得点　　N=17

対象者	母への支え	過去の対立・葛藤	母の支配	母への信頼	母への依存
A	20	18	21	42	20
B	15	21	31	30	20
C	18	9	14	38	16
D	11	15	20	32	9
E	16	24	20	34	13
F	8	14	19	28	11
G	17	8	32	33	17
H	22	14	13	45	19
I	18	7	15	42	18
J	18	16	16	37	16
K	17	22	24	30	10
L	17	17	12	39	12
M	20	12	15	40	21
N	13	24	37	20	11
O	21	17	22	44	24
P	12	6	13	35	12
Q	20	11	21	33	12
本章の平均得点	16.65	15.00	20.29	35.41	15.35
＜研究1＞の平均得点	17.79	16.16	23.73	35.32	16.76

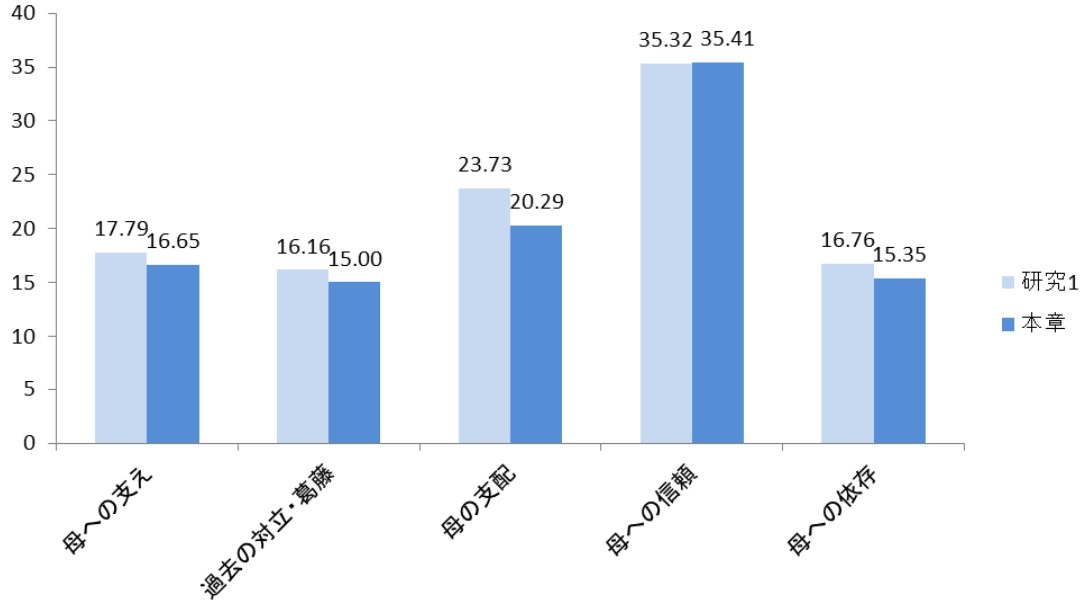

Fig. 6-1-1　本章と＜研究１＞の親子関係の下位尺度得点の平均点

＜研究 1＞の平均得点よりも，本章の方が全体的に点数が低めであり，「母の支配」で 3 点以上低く，「母への信頼」で僅かに高かった。「母の支配」が本章の方が低いことについては，＜研究 1＞で年齢が上がるにつれ母の支配は低下していることが明らかとなっており，対象者の平均年齢が，本章では 30.47 歳（*SD* = 5.04）に対し，＜研究 1＞では 26.17 歳（*SD* = 2.88）で，本章の方が若干年齢が上がっているためではないかと考える。

(3) 母娘関係の語りの分析

1)成人期初期の母娘関係

学卒後，社会人になってから現在までの母娘関係についての語りについて分析した。結果は，Table 6-1-4 のとおりである。カテゴリー化の過程で，17 のカテゴリー，24 のサブカテゴリー，130 のラベルを生成した。以下，本文中の【　】内はカテゴリー名，≪　≫内はサブカテゴリー名，〈　〉内はラベルを示している。また，対象者の語りは「　」（斜体）で示している。なお，個人情報保護の観点から，対象者の語りで不都合がある部分は，内容が損なわれない範囲で表現を省略している。

Table 6-1-4 成人期初期の母娘関係についての未婚女性の語りのカテゴリーおよび内容例

		カテゴリー	サブカテゴリー	語りの内容例
母娘関係	肯定的	親密な関係 (A, C, G, H, I, M,, Q)	親密な関係 (H, I, M)	「今の自分にとってはもうなくてはならないし」(M)
			話を聞いてもらう (A, G)	「楽しい仕事をして家に帰って母に聞いてもらうっていうのが、もう日課というか･･･母もその話を楽しみにしてくれて」(G)
			一緒に行動する (A, G, O)	「はい、すごく仲良くなりました、えっと、海外旅行に一緒に行ったりとか、あとは近くの国内旅行も、はい、二人で行ったりとか」(A)
			以前より親密な関係 (A, M, O)	「そっからのほうが(卒業してからが)結構仲良くなりましたね」(A)
			友達のような関係 (H, Q)	「もう結構なんか一時期は本当に友達みたいな感じに」(Q)
			今後も親密な関係でいたい (C)	「(今後も)話せる関係でいたいかなあ･･いろんな事話せる、お互いに･･うーん･･･でなんか出かけるのとかも一緒にできればいいなあと」(C)
		信頼関係 (D, G, M, H)		「バトルをしても喧嘩で口論になっても信頼関係が多分絶対的にあるので、特に今だと、絶対的信頼関係があるので(E)
		適度な距離のある関係 (D, M, L, P)		「一緒に同じ場にはいるけれども、言われないと家族だってわからない距離感だったりとかまあしゃべってたりはするんですけど、あのべったりじゃないんですよ」(L)
		精神的な支えの関係 (B, C, D, E, I, J, M, O, Q)	母への支え (C, D, E, I, J, O, Q)	「困っていたら、なんか具合が悪かったら何かしてあげたりとかはもちろんありますし」(O)
			母の気遣い (B, J, M, O)	「買い物に付き合ってほしいとか、すこしは愚痴を聞いてほしいとか、思っているんだろうな、ちょっと我慢しているんだろうなあとは思うときはあります」(D)
	否定的	親密ではない関係 (B, E, F, K, L, N, P)	問題のある関係 (B, F, K, N)	「無理はしない程度には付き合おうとは思ってはいるんですけれども、ただ結構友達には無理してるって言われるんですが、無理しない程度に、いこうとは思ってます」(N)
			繋がりが希薄な関係 (B ,F, L)	「精神的なつながりがあるっていうとちょっとどうなのかななんて今になって思いますね」(F)
			相談事はしない (E, F, K)	「なんかそんなに自分の困っていることを相談できる仲の良さはないんですよね」(K)
			将来母の面倒はみられない (P)	「現実的に難しいなあって思います、それは自分の生活がまず第一なので、それから仕事第一なので、うん、それが狂うなら正直無理、無理です、もう無理です宣言すでにしているので、･･･(育児の時)ちょっと子どもみてもらうかもしんないけど、それみてもらったら返しはするけどそうじゃない限り、じゃあ面倒みますってこっちから行く感じはない、ないなあ」(P)
		信頼関係がない (N)		「(母との信頼関係を)取り戻したいとは思わないですねえ、ちょっと残酷なあれですけど、もう無理だなみたいな、はい、本当にこのまま淡々と、してるぐらいですかね」(N)
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解 (C, D, ,F, H, I, K, L, M, O, Q)	母の気持・立場の理解 (C, D, ,F, I, M, O, Q)	「今考えたらすごい大変だったんだなと･･･その中でここで妹が反抗期だったりとか、女3人いてお金もかかったでしょうし」(I)
			母を一人の人間として認識 (H, I, K, L)	「母も人間なんだなって思うようになって･･･母もそうだよな失敗したりとかあるよなっていう風に」(H)
		母への感謝 (D, E, G, J, K, M)	母への感謝 (D, E, G, M)	「ちょっと前までは、何か別にそれが当たり前だと思ってたんですけど、今だからもうすごい感謝、子育ての大変さが何となくわかって、友達の様子とかも聞いてたらわかってきて、ああすごいなあと、もう今本当に、すごい思います。もう本当に思いますねえ」(M)
			母のありがたみ (J, K)	「なんかこうよくそのありがたみがわかったってやっぱ言うのも･･･やっぱ居てくれてありがとうとか」(J)
		母を尊敬 (C, M)		「一番尊敬出来る人だと思います」(M)
		お互い似ている (D, H)		「自分のペースでやりたいもの同士。そういう面では、似てるんだと思うんですよ」(D)
	否定的	母を否定的にとらえる (B, C, F, K, L, N, O, Q)	母を否定的にとらえる (B, F, K, O, Q)	「心理とかそういう深さとかの話はやっぱ出来ない･･･たぶんわかんないと思う」(K)
			母を非難 (C, L, N)	「(母は)自分勝手な人だと思います、こうなんか自分の思った通りに人が動かないと、結構切り捨てるので」(N)
			人生のモデルではない (F, K)	「(母は)反面教師かな･･･(母を自分の生き方のモデルだとは)思わない」(F)
		母への反発 (B, F, N, Q)	母への反発 (B, F, N, Q)	「つい納得いかないといやそれは違うよねみたいな。追撃みたいなですね」(B)
			きょうだいの扱いの差別に反発 (N)	「同じことしてても私と兄がすることで全然態度が違うんですね、(お兄ちゃんには怒らなかったけど私には怒った)はしょっちゅうあります」(N)

(次頁へ続く)

		母の支配 (G)		「(母の望む生き方でないと)許さないって感じでしたね、それに対して、自分でそれでもどうしてもこっちやりたい か、そういう頑として押し通すような強さも私が持っていなかったので、なんとなくこうああそっち行っちゃダメって われたら元に戻るって感じで」(G
		母の過干渉 (A, C, G)		「あ、まあ、そういうの(過干渉)もありますね。恋愛面ではそういうのが多いかもしれないですね」(A)
		お互い似ていない (B, N, P, Q)		「(他の家族は)感覚がこうー緒なんですけど、多分母だけ違って・・(性格が)全然違います」(Q)
		母以外の他者に愛着 (N)		「(母には諦めていたが)母以外は結構恵まれてはいたので、結構祖父母の方が本当に良くしてくれたので・・・結構、私、あの周り、母以外は、結構、あの良い人が多いと、自分では思っているんですね」(N)
		母への依存 (A, B, D, E, L, O, P, Q)	母への依存 (B, D, O)	「やっぱり相談して、あの母が良いと言ったものはやっぱりうまくいくというか、言われたとおりにしておいて良かったなっていうのが、(お母さんの言うことは間違いないみたいな感じ)はい、ていうのが最近思います」(O)
			母への甘え (A, E, P)	「全然経済的な自立がたぶん出来ていない・・・まだ甘えてるところがあるんですね」(E)
			将来母の近くに住みたい (L, O)	「(将来)近くにいたいっていうのはあるかもしれないですね・・・依存あると思います」(L)

以下でカテゴリーに関して説明をおこなう。

①母娘関係における肯定的な側面

母娘関係における肯定的な側面として,【親密な関係】,【信頼関係】,【適度な距離のある関係】,【精神的な支えの関係】が生成された。

【親密な関係】では,母が≪話を聞いてくれる≫や,母娘で≪一緒に行動する≫という≪親密な関係≫であり,学卒後の方が≪以前より親密な関係≫で,母というよりももっと打ち解けやすい≪友達のような関係≫,そして≪今後も親密でいたい≫と娘が望んでいる関係がみられた。【信頼関係】では,絶対的な信頼関係があり母に隠し事はなく,母が自分に真剣に向きあってくれるような関係がみられ,【適度な距離のある関係】では,母とはべったりではない程よい距離のある関係がみられた。【精神的な支えの関係】では,母が困っていたら何かしてあげたい,母の役に立ちたいという≪母への支え≫や,母が娘を優先して遠慮したり娘の判断を尊重してくれるという≪母の気遣い≫がある関係がみられた。

②母娘関係における否定的な側面

母娘関係における否定的な側面として,【親密ではない関係】,【信頼関係がない】が生成された。

【親密ではない関係】では,母とは非良好で距離のある≪問題のある関係≫,母と精神的に繋がりがほとんどない≪繋がりが希薄な関係≫,相談事のできる仲の良さはないという≪相談事はしない≫,自分の生活や仕事が第一なので≪将来母の面倒はみられない≫という関係がみられ,【信頼関係がない】では,今更母との信頼関係を取り戻したいとは思って

いないという関係がみられた。

③娘の母親認知における肯定的な側面

娘の母親認知における肯定的な側面として,【母の気持・立場の理解】,【母への感謝】,【母を尊敬】,【お互いが似ている】が生成された。

【母の気持・立場の理解】では,娘が母に大事にされていたことを理解したり,母が子育てで苦労したであろうと≪母の気持・立場の理解≫し,母だって失敗することもあるし,母が愚痴をこぼしたりすることで娘が≪母を一人の人間として認識≫しているのがみられた。【母への感謝】では,母が自分を育ててくれたことや母のサポートに今さらながら感謝し,母の存在のありがたみや,産んでくれていろいろなチャンスをくれたことに≪母のありがたみ≫を感じているのがみられた。【母を尊敬】では,母が自分にとって一番尊敬できる人であり,【お互いが似ている】は,娘が母娘の性格が似ているととらえているのがみられた。

④娘の母親認知における否定的な側面

娘の母親認知における否定的な側面として,【母を否定的にとらえる】,【母への反発】,【母の支配】,【母の過干渉】,【お互い似ていない】,【母以外の他者に愛着】が生成された。

【母を否定的にとらえる】では,母の感情的な性格や母の生き方に共感できなかったり,母に話が通じないことなどで≪母を否定的にとらえる≫ことがあったり, 母の身勝手さや娘の将来よりも母自身の老後にしか関心がない≪母を非難≫し,母を反面教師として≪人生のモデルではない≫ととらえていることなどがみられた。【母への反発】では,批判されることに≪母への反発≫をしたり,母の態度が他のきょうだいとでは全然違うという≪きょうだいの扱いの差別に反発≫しているのがみられた。【母の支配】では,母に言われるがままで,母の望む生き方でないと許されず反発しても言い負かされて結局自分が我慢することになってしまう様子がみられた。【母の過干渉】では, 母が娘の恋愛や帰宅時間に干渉してくる様子がみられ,【お互い似ていない】では,母とは性格や考え方などが違い,母とは似ていないと感じているのがみられた。【母以外の他者に愛着】では,母の代わりにケアを提供してくれた祖父母や周囲の人に愛着を向けているのがみられた。

⑤母への依存

娘の母親認知において肯定的な側面・否定的な側面のどちらにも分類出来ない【母への依存】が生成された。

【母への依存】では,母のアドバイスに頼ったりする≪母への依存≫や,経済的な自立が

できておらずまだ母に生活面で頼ってしまう≪母への甘え≫があること,また,結婚しても≪将来母の近くに住みたい≫と考えているのがみられた。

2)青年期後期(大学生時代)の母娘関係

青年期後期の母娘関係として,大学生時代についての語りを分析した。結果は,Table 6-1-5 のとおりである。カテゴリー化の過程で,12 のカテゴリー,21 のサブガテゴリー,75 のラベルを生成した。

Table 6-1-5 青年期後期の母娘関係についての未婚女性の語りのカテゴリーおよび内容例

		カテゴリー	サブカテゴリー	語りの内容例
母娘関係	肯定的	親密な関係 (E, G, O, Q)	親密な関係 (G, Q)	「たぶん本当に母親が私のことをすごく好きだっていうのが分かるから‥私もすごく好きですっていう感じではいます」(Q)
			一緒に行動する (O)	「大学の時は割と時間も出来て、母も少し自由になったので、一緒に旅行に行ったりですとか」(O)
			以前より親密な関係 (E, O)	「母親と二人でいることが多くなったりとか、母親と二人でまあご飯食べに行くことが多くなったりとか」(E)
			友達のような関係 (O)	「(友達感覚)そうですね、かなり、そうですね、やっとそうなってきたなというのが、はい、そうですね」(O)
		信頼関係 (H)		「ごたごたがあった時とかももちろんやっぱり母に、一番先にやっぱり母に話すっていう、で、どんな時でもそうですね。姉とかに言ったとしても最終的にはやっぱり母に言う」(H)
		対等な関係 (D, E, H)		「自分が知っていることをお母さんに言ったりとか、お母さんが知っていることを私に言ったりとか。ほんとに。そうですね。同じような立場になったというか」(E)
		精神的な支えの関係 (A, H, I, J, M, O, P, Q)	母からの支え (A, M, H)	「(就職が)決まらない時期があったんですけどその時はすごく支えになってくれました」(A)
			母への支え (M, H)	「なんか少しでも力にならなきゃっていうので、やっぱ返していきたいっていう、特に母には迷惑をかけてきたので、少しでも困っている時があったら、はい、何か力になれればと思って」(H)
			母の気遣い (I, J, O, P, Q)	「何となくは多分気づいていると思います、何かこう、何か直接あんたどうしたのよみたいなことは言わないけど、こう、陰から見守る的な、まあ正直なんかこう、うるさく聞かないでくれてありがたいなっていうふうには」(Q)
	否定的	親密ではない関係 (A, D, P, Q)	繋がりが希薄な関係 (D, Q)	「何となくその、仲いいけど分かり合えてない感じが、分かり合えてないっていうか、なんかすごい、すごい真逆じゃないけど、うん‥(距離感が)あります、あります」(Q)
			母に相談事はしない (P)	「あの私の心の悩みとか(相談)しないですね」(P)
			母との話題を選ぶ (A, Q)	「私がこう母親に言ってもいいなっていうのは私の中で選別して‥そこはちょっと言わないでおくっていうのはあったんですけど」(A)
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解 (C, D, E, H, Q)	母の気持・立場の理解 (C, D, E, Q)	「それまでいろいろこう、まあ多少は、うん、葛藤があったと思うんですよ、高校生の時なんていうのは、特に、あの、(母が)この前言ったことと違うとか、ちょっとこう気持ちの揺れで、たまに(母が)優しいこと言ってみたり、厳しいことを言ってみたり、何かすると、(母が)さっき言ったことと違うじゃないのよ、何てことを思っていたりはしましたけれども‥‥大学生くらいになるとまあ私だって揺れてるんだからこの人が揺れてもしょうがないよねっていって自分に納得させたんじゃないかと思いますね」(D)
			母を一人の人間として認識 (D, H)	「やっぱり母も一人の女性なんだ、人間なんだなあって」(H)
			認知のズレに気づく (E)	「私にしたら、ケアしてもらってなかったって思ってたけどお母さんにしたら、ケアしなくても一人でやっていける子だって思ってたから、全然手をかけなかったらしくて、うん、なんかちゃんとやってくれるみたいなのをずっと思っていたみたいで、そこのなんかズレみたいなのが‥‥お互い気づけたかな、うん、たぶん(お母さんも)」(E)
		母のありがたみ (B, C, Q)		「そういうのも親も何にも言わないというか、いいよーとか言って、そういうのも受け入れてくれてたんだなあと‥(抵抗ない)のかなあって気がする、でもありがたい、ありがたい」(C)
		母を尊敬 (H)		「やっぱ嫌になっちゃうと思っちゃうんですけど、そんなにこういろいろ言われたら、だからその姿を客観的に見てても、やっぱり母はすごいっていうのが耐えてる、ちゃんと向かい合ってるというか、はい、その姿を客観的に自分の事柄じゃなく、通して見てて、ああやっぱりこの人はすごいなって」(H)
	否定的	母を否定的にとらえる (B, E, K)	母を非難 (B, E)	「まあ、子どものころから思っていたのが爆発したみたいな‥そのときは口論になることすごいありました、でも何か、あまり細かくは覚えてないけど、やっぱり、まあ、解ってくれてないみたいな」(B)
			母への落胆 (E, K)	「なんか相談しても、なんか、なんだろう、すごいなんか返ってくる答えとかが、なんか話を人の話をなんか聞くのが苦手なのかなって」(K)
			子ども扱いする母 (B, E)	「大学生くらいから、ほんとに20超えてからぐらいだと思うんですけど、もう子どもじゃないしっていうところからたぶん、成人したし、ちゃんと認めて欲しいなって」(E)
		母への反発 (B, C, E, Q)	母への反発 (B, C, E)	「結構その大学生の時に反発して口論になることもあったし結構私もテンション高くて若いのかなあみたいな。結構キレてたんですけど」(B)
			きょうだいの扱いの差別に反発 (E)	「お兄ちゃんとの違いですごい納得が出来なかったのでそこは分かり合えなかったです‥だったらそのお兄ちゃんとの差別みたいなの止めてよって言ったんです」(E)
			自己優先 (C, E, Q)	「結局お互い分かり合えないままで、好きなように私はやってたって感じでした」(E)
		母への依存 (B, M)	母への依存 (B, M)	「〇〇 の時が一番(依存)してましたね、本当に辛くて、もう嫌で嫌でしょうがなくて、行きたくなくて、本当に嫌で、2, 3か月ぐらい休んだ時期もあったんです、それでその時期が一番、そうですね、もう一番母にベッタリでしたね、自分もぐったりだったし、で」(M)
			分離不安 (B)	「なんか母親がいないとちょっと不安定になるみたいな時期が一年ぐらいはありましたね」(B)

以下でカテゴリーに関して説明をおこなう。

①母娘関係における肯定的な側面

母娘関係における肯定的な側面として,【親密な関係】,【信頼関係】,【対等な関係】,【精神的な支えの関係】が生成された。

【親密な関係】では,母と娘がお互いに好きであるという≪親密な関係≫であり,母と旅行をするなど≪一緒に行動する≫ようになり,接触する機会が増えて≪以前より親密な関係≫であり,≪友達のような関係≫になってきたという関係がみられた。【信頼関係】では,相談事を誰よりも先に母に話し,意見も母の意見を採用するという関係がみられた。【対等な関係】では,成人して母と対等に意見交換をするような立場になったのがみられた。【精神的な支えの関係】では,母が応援してくれるという≪母からの支え≫や,母が娘の意思を尊重し口出しすることのない≪母の気遣い≫で娘が母に支えられている一方で,母が困っている時は少しでも力になりたいと娘が≪母への支え≫になるという関係がみられた。

②母娘関係における否定的な側面

母娘関係における否定的な側面として,【親密ではない関係】が生成された。

【親密ではない関係】では,母への期待も無く距離感があるという≪繋がりが希薄な関係≫がみられ,≪母に相談事はしない≫し,母に知られたくない話題は避けて,母との話題は選別するという≪母との話題を選ぶ≫という関係がみられた。

③娘の母親認知における肯定的な側面

娘の母親認知における肯定的な側面として,【母の気持・立場の理解】,【母のありがたみ】,【母を尊敬】が生成された。

【母の気持・立場の理解】では,母の気持ちや立場を理解し,客観的に,≪母を一人の人間として認識≫するのがみられ,また,母娘の≪認知のズレに気づく≫がみられた。例えば,E は≪認知のズレに気づく≫について,幼少のころから母のケアをあまり受けられずにいたが,母は E がしっかりした子だから大丈夫だと思っていたことが解り,母と E 自身の思いのズレに気が付いたことを語った。【母のありがたみ】では,うるさく聞いたりせず,何も言わずに自分を受け入れてくれたり,不満を言っても自分を守っていてくれた母にありがたいと思っているのがみられた。【母を尊敬】では,何を言われても耐えて相手と向き合う母を客観的に見て凄いと思い尊敬しているのがみられた。

④娘の母親認知における否定的な側面

娘の母親認知における否定的な側面として,【母を否定的にとらえる】,【母への反発】

が生成された。

【母を否定的にとらえる】では,母の言動を理解できずに≪母を非難≫したり,相談事をしても的外れの返答しかもらえず≪母への落胆≫をしたり,≪子ども扱いする母≫に大人として対応してもらえない娘の苛立ちがみられた。【母への反発】では,母と口論になったり衝突したりして≪母への反発≫をし,≪きょうだいの扱いの差別に反発≫したり,娘自身の考えを優先している≪自己優先≫がみられた。

＜研究 3＞で青年期後期の親子の対立・葛藤における青年の反応のうち,母に対する反応として「母への反発」,「母への依存・同調」,「母への落胆」,「自己優先」をみいだしたが,本研究でも≪母への反発≫,≪母への落胆≫,≪自己優先≫,【母への依存】と同様のカテゴリーをみいだした。＜研究 3＞でみいだされた「母への同調」は本章ではみいだせなかったものの,ほぼ同様の結果が得られ,ある程度の整合性が確保できたと考える。

⑤母への依存

肯定的な側面・否定的な側面のどちらにも分類出来ない【母への依存】が生成された。

【母への依存】では,自分に自信がなく依存したり助けてもらったりで≪母への依存≫があったり,母がいないと不安になる≪分離不安≫がみられた。

3)青年期後期から成人期初期の母娘関係の変容

青年期後期と成人期初期の母娘関係を比較することで,母娘関係がいかに変容してきたかを検討した。

①母娘関係における肯定的な側面

母娘関係における肯定的側面において,青年期後期でみられた【対等な関係】と【精神的な支えの関係】の≪母からの支え≫が,成人期初期ではみられなかった。一方,成人期初期では,青年期後期にはなかった【親密な関係】の≪話を聞いてもらう≫,≪今後も親密な関係でいたい≫と【適度な距離のある関係】がみられた。

②母娘関係における否定的な側面

母娘関係における否定的側面において,青年期後期でみられた【親密ではない関係】の≪母との話題を選ぶ≫が,成人期初期ではみられなかった。一方,成人期初期では, 青年期後期にはなかった【親密ではない関係】の≪問題のある関係≫,≪将来母の面倒はみられない≫と,【信頼関係がない】がみられた。

③娘の母親認知における肯定的な側面

娘の母親認知における肯定的側面において,青年期後期でみられた【母の気持・立場の理

解】の≪認知のズレに気づく≫が,成人期初期ではみられなかった。また，成人期初期で【お互いが似ている】,【母への感謝】がみられた。

④娘の母親認知における否定的な側面

娘の母親認知における否定的側面において,青年期後期でみられた【母を否定的にとらえる】の≪子ども扱いする母≫が,成人期初期ではみられなかった。成人期初期では【母を否定的にとらえる】の≪母を否定的にとらえる≫,≪人生のモデルではない≫がみられた。青年期後期にあった【母への反発】の≪自己優先≫が,成人期初期ではみられず,【母の支配】【母の過干渉】,【お互い似ていない】,【母以外の他者に愛着】が成人期初期でみられた。

⑤母への依存

【母への依存】においては,青年期後期でみられた≪分離不安≫が,成人期初期ではみられず,≪母への甘え≫,≪将来母の近くに住みたい≫が,成人期初期でみられた。

(4)各対象者の生育史の分析

各対象者の語りからラベルにコード化したものを,幼少期,小学,中学,高校,大学（浪人時,短大・専門学校,大学院を含む）,成人期の 6 時期に分類して,前述の青年期後期・成人期初期のカテゴリーを用いて対応させて Table 6-1-6 に示した。

面接調査に先立って,対象者の自由な語りを尊重し,必ずしも幼少期から順次に語る必要はなく,想起できる時期から自由に語ってもよいこと,エピソードを語らない時期があっても強要されることはないことを提示したので,ほとんどの対象者が,想起しやすい現在や大学生時代(青年期後期)の母娘関係を語った。そして,過去にさかのぼるほど,記憶があいまいだとして語りは少なかった。また,全体としてのエピソードの数は少ないものの,一つ一つのエピソードを語る時間が長い者もいれば,逆に,エピソードの数は多いが,一つ一つのエピソードを語る時間が短い者もいた。全体的には,母親認知についての語りは,程度の差はあるものの,肯定的なものも否定的なものもどちらも語る両価的な者が多かった。

Table 6-1-6 母娘関係のカテゴリーと各対象者の生育史の語りとの対応

			A						B						C					
		カテゴリー	幼	小	中	高	大	社	幼	小	中	高	大	社	幼	小	中	高	大	社
母娘の関係	肯定的	親密な関係	2					3			1				1					1
		信頼関係														1				
		対等な関係																		
		適度な距離のある関係															1			
		精神的な支えの関係				3	2			1	1		1	2		1	2	3		1
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解																2	1	1
		母への感謝				1							1						1	
		母を尊敬																		1
		お互い似ている																		
母娘の関係	否定的	親密ではない関係							4	6				4						
		信頼関係がない																		
娘の母親認知	否定的	母を否定的に捉える			1									1						1
		母の理解のなさ										1	2				1			
		母への反発			1					2		1	1	1					2	
		母の支配・束縛				1														
		母の過干渉					1	1												1
		お互い似ていない																		
		母以外の他者に愛着																		
		母への依存		1				1				2	3	1						

			D						E						F					
		カテゴリー	幼	小	中	高	大	社	幼	小	中	高	大	社	幼	小	中	高	大	社
母娘の関係	肯定的	親密な関係	2	1		1							3		1					
		信頼関係						1		1		1								
		対等な関係					1						2							
		適度な距離のある関係						1												
		精神的な支えの関係				2		3		1		2		1						
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解				2	4	1					2							1
		母への感謝						2						1						
		母を尊敬																		
		お互い似ている						1												
母娘の関係	否定的	親密ではない関係					1		2					2				1		4
		信頼関係がない																		
娘の母親認知	否定的	母を否定的に捉える							4	3	1		1							4
		母の理解のなさ								1	4		1							
		母への反発		1		2					2		4							
		母の支配・束縛																		
		母の過干渉		1																
		お互い似ていない																		
		母以外の他者に愛着																		
		母への依存						1						1						

（次頁へ続く）

		カテゴリー	G 幼	小	中	高	大	社	H 幼	小	中	高	大	社	I 幼	小	中	高	大	社
母娘の関係	肯定的	親密な関係	1					2		3	1		1	3	2					1
		信頼関係		1									1	5						
		対等な関係									1		1	1						
		適度な距離のある関係							1											
		精神的な支えの関係					1			2	3	2	3	1		1			1	2
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解											1	1						2
		母への感謝						1												
		母を尊敬											1							
		お互い似ている												1						
母娘の関係	否定的	親密ではない関係																		
		信頼関係がない																		
娘の母親認知	否定的	母を否定的に捉える			1															
		母の理解のなさ		1	1	2														
		母への反発		1		2											1	1		
		母の支配・束縛						3												
		母の過干渉																		
		お互い似ていない																		
		母以外の他者に愛着																		
		母への依存						1		1	1	2	3							

		カテゴリー	J 幼	小	中	高	大	社	K 幼	小	中	高	大	社	L 幼	小	中	高	大	社
母娘の関係	肯定的	親密な関係		1					2							1				1
		信頼関係																		
		対等な関係																		
		適度な距離のある関係																		1
		精神的な支えの関係			1		1	1		1										
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解						1						1						1
		母への感謝						2						2						
		母を尊敬																		
		お互い似ている																		
母娘の関係	否定的	親密ではない関係			2									1	2					1
		信頼関係がない																		
娘の母親認知	否定的	母を否定的に捉える								1		4	1	5						1
		母の理解のなさ										5								
		母への反発				2											2			
		母の支配・束縛																1		
		母の過干渉									1									
		お互い似ていない																		
		母以外の他者に愛着																		
		母への依存																		1

（次頁へ続く）

		カテゴリー	M 幼	M 小	M 中	M 高	M 大	M 社	N 幼	N 小	N 中	N 高	N 大	N 社	O 幼	O 小	O 中	O 高	O 大	O 社
母娘の関係	肯定的	親密な関係	2	1	1			4											3	2
		信頼関係																		
		対等な関係																		
		適度な距離のある関係						2												
		精神的な支えの関係		2	2	1	2										1		2	2
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解						2												1
		母への感謝						2												
		母を尊敬						1												
		お互い似ている																		
母娘の関係	否定的	親密ではない関係								3	3	1		5		2		1		
		信頼関係がない									1									
娘の母親認知	否定的	母を否定的に捉える									1	1		5						1
		母の理解のなさ																		
		母への反発									2			2						
		母の支配・束縛																		
		母の過干渉																		
		お互い似ていない								1				1						
		母以外の他者に愛着												1						
		母への依存					1											1		4

		カテゴリー	P 幼	P 小	P 中	P 高	P 大	P 社	Q 幼	Q 小	Q 中	Q 高	Q 大	Q 社
母娘の関係	肯定的	親密な関係	1	1						4			2	1
		信頼関係												
		対等な関係												
		適度な距離のある関係						1						
		精神的な支えの関係			1		1						1	
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解											3	1
		母への感謝											1	
		母を尊敬												
		お互い似ている												
母娘の関係	否定的	親密ではない関係				1	1	1					2	2
		信頼関係がない												
娘の母親認知	否定的	母を否定的に捉える			1									1
		母の理解のなさ												
		母への反発									1	1	1	
		母の支配・束縛												
		母の過干渉									1			
		お互い似ていない						1						1
		母以外の他者に愛着												
		母への依存	1					1				1		1

これらのうち,対象者の語りの内容を考慮して,特に親密な母娘関係である者 H,M（Table 6-1-7）と,特に葛藤がある母娘関係の者 B,E,N（Table 6-1-8）を検討する。なお,これらの各対象者の母娘関係の下位尺度得点（Table6-1-3）と＜研究 1＞の母娘関係尺度の下位尺度得点の未婚群の平均得点を比較した図を Fig.6-1-1～6-1-5 で示した。

Table6-1-7 親密な母娘関係

			H						M					
		カテゴリー	幼	小	中	高	大	社	幼	小	中	高	大	社
母娘の関係	肯定的	親密な関係		3	1		1	3	2	1	1			4
		信頼関係					1	5						
		対等な関係			1		1	1						
		適度な距離のある関係	1											2
		精神的な支えの関係		2	3	2	3	1		2	2	1	2	
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解					1	1						2
		母への感謝												2
		母を尊敬					1							1
		お互い似ている						1						
母娘の関係	否定的	親密ではない関係												
		信頼関係がない												
娘の母親認知	否定的	母を否定的に捉える												
		母の理解のなさ												
		母への反発												
		母の支配・束縛												
		母の過干渉												
		お互い似ていない												
		母以外の他者に愛着												
		母への依存		1	1	2	3						1	

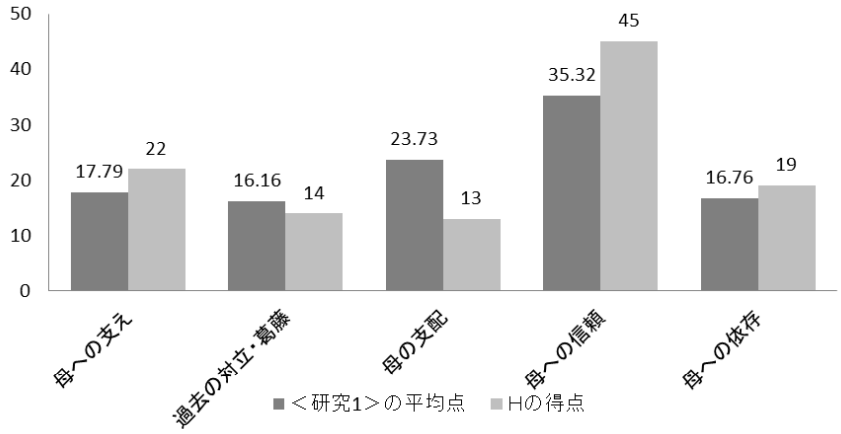

Fig.6-1-1　Hの母娘関係下位尺度得点

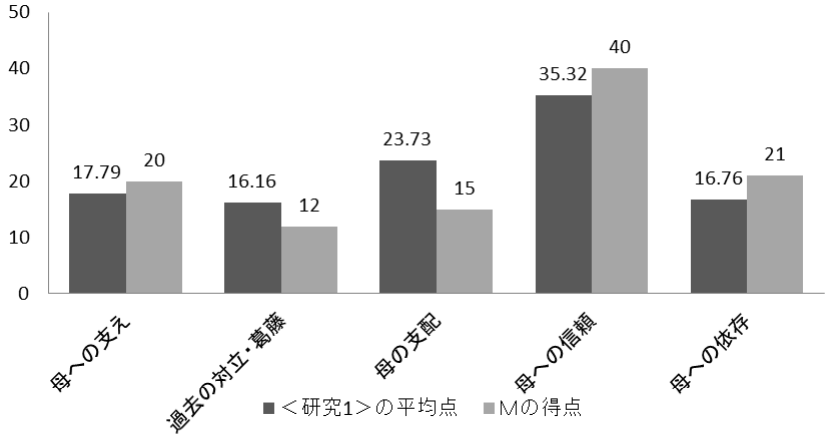

Fig.6-1-2　Mの母娘関係下位尺度得点

Table6-1-8 葛藤のある母娘関係

		カテゴリー	B 幼	B 小	B 中	B 高	B 大	B 社	E 幼	E 小	E 中	E 高	E 大	E 社	N 幼	N 小	N 中	N 高	N 大	N 社
母娘の関係	肯定的	親密な関係			1								3							
		信頼関係								1		1								
		対等な関係											2							
		適度な距離のある関係																		
		精神的な支えの関係		1	1		1	2		1		2		1						
娘の母親認知	肯定的	母の気持・立場の理解											2							
		母への感謝					1							1						
		母を尊敬																		
		お互い似ている																		
母娘の関係	否定的	親密ではない関係	4	6				4	2					2		3	3	1		5
		信頼関係がない															1			
娘の母親認知	否定的	母を否定的に捉える						1	4	3	1		1				1	1		5
		母の理解のなさ				1	2			1	4		1							
		母への反発		2		1	1	1			2		4				2			2
		母の支配・束縛																		
		母の過干渉																		
		お互い似ていない														1				1
		母以外の他者に愛着																		1
		母への依存				2	3	1						1						

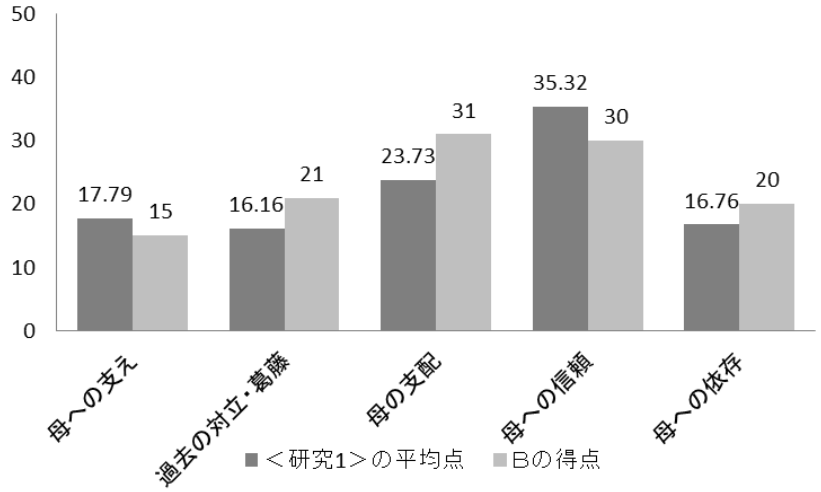

Fig.6-1-3　B の母娘関係下位尺度得点

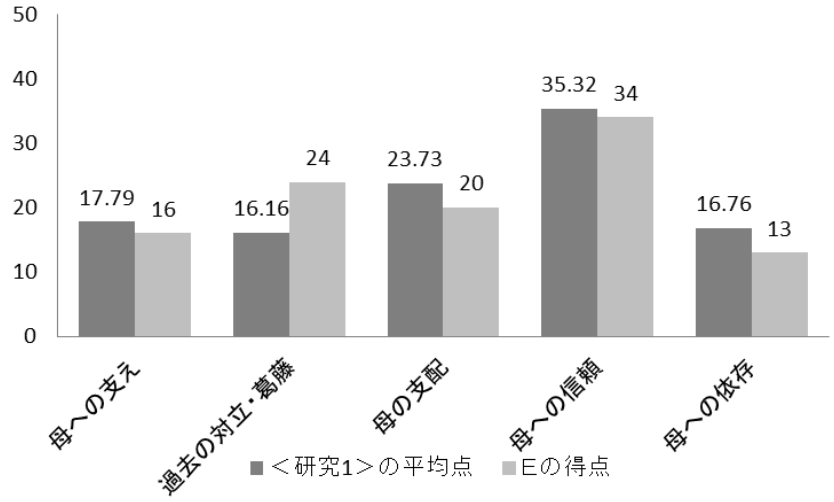

Fig.6-1-4　E の母娘関係下位尺度得点

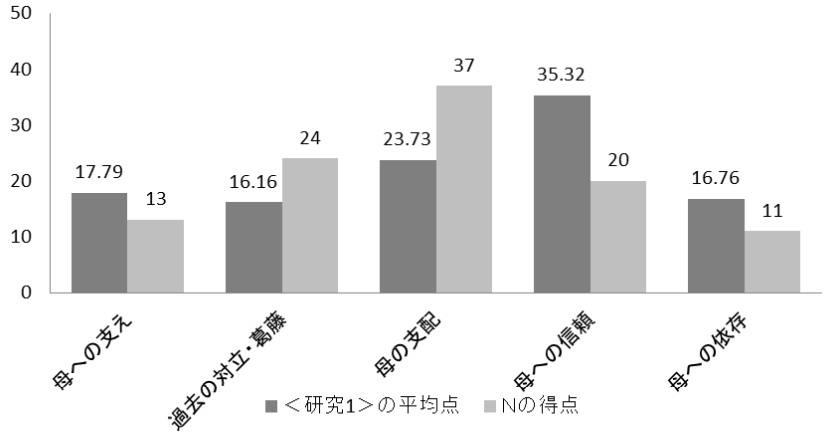

Fig.6-1-5　Nの母娘関係下位尺度得点

以下で,特に親密な母娘関係である者と特に葛藤がある母娘関係の者に関して説明をおこなう。

1）特に親密な母娘関係

対象者のうち,特に親密な母娘関係である者 H,M は,幼少のころから,親密な関係であり良好な親子関係を築いてきており,精神的な支えの関係の語りが多くみられた。一方,母娘関係の否定的な面を語ることは一切なかった。因子得点でみると,「母への信頼」,「母への依存」,「母への支え」が平均より高く,「過去の対立・葛藤」,「母の支配」が低かった(Fig.6-1-1～Fig.6-1-2)。

2）特に葛藤がある母娘関係

対象者のうち,特に葛藤がある母娘関係の者 B,E,N は,インタビューの中で母娘関係の肯定的な面よりも否定的な面を多く語り,なかでもNは,母娘関係の肯定的な面を一切語ることはなかった。各対象者とも,幼少のころから家庭環境や性格の不一致などで母との折り合いが悪く,母を否定的にとらえる語りが多くみられた。因子得点でみると,各対象者はともに「母への信頼」,「母への支え」が平均より低く,「母への依存」もB以外の者で低かった。一方,「過去の対立・葛藤」は3名の対象者ともに平均より高く,「母の支配」はE以外の者で高かった。中でもNは,「母の支配」が全対象者の中で最も高く「母への信頼」は全対象者の中で最も低く,母との葛藤の深刻さがうかがえた(Fig.6-1-3～Fig.6-1-5)。

第2節　母娘関係における未解決の問題＜分析 2＞

1. 目　的

母娘関係における未解決の問題に対する娘の認知について,未婚女性の語りを分析することによって明らかにすることを目的とする。

2. 方　法

(1) 調査対象

首都圏近郊で親と同居中の未婚女性 17 名のうち,インタビューで母との関係における未解決の問題についての語りをした 8 名（A，B，D，E，F，H，J，K）を対象とした。

なお,質問紙調査で未解決の問題があると回答していた者のうちG,Nは,語りの中で未解決の問題について語ることはなかった。また,対象者のほとんどが(K以外),現在の母との関係を良好であると質問紙で回答しており（Table6-1-2）,本調査の対象者は,現在母との関係が良好であるにもかかわらず未解決の問題を抱えている者とする。

(2) 手続き

＜分析 1＞と同様の手続きをおこなった。

3. 結　果

母との関係における未解決の問題に対する娘の認知についての分析をした。結果は,Table 6-2-1 に示すとおりである。カテゴリー化の過程で,10 のカテゴリー,28 のラベルを生成した。また,母との関係における未解決の問題に対する娘の認知についてのカテゴリーの関連図を作成した。結果は,Fig.6-2-1 のとおりである。

Table 6-2-1母との関係における未解決の問題に対する娘の認知についての語りのカテゴリー

	カテゴリー	ラベル
否定的な側面	あきらめ (B, D, F, G, K)	〈親子だからって何もかも理解することはできない〉 〈未解決のままでいい〉 〈未解決の問題があっても仕方がない〉 〈真剣に思っても仕方ない〉 〈相互理解に対する諦め〉 〈現状を受け入れるしかない〉
	わだかまり (A, J)	〈ショックで、今でも心に残る〉 〈母の言動が理解できない 〉 〈結論が出ないまま曖昧である〉 〈素直に受け入れられない〉
	母娘の相互理解の困難さ (E, K)	〈母と視点が違う〉 〈母の気持ちがわからない〉
	修復不可能 (F)	〈今更どうすることも出来ない〉 〈母はもう変われない〉
肯定的側面	母への気遣い (A, D, G, H)	〈母も苦労しただろう〉 〈私も母も人間だから〉 〈わざわざ母を責められない〉 〈私ももっとひどいこと思っているときがある〉 〈私も母同様暴言を言ってしまう〉 〈母も失敗があるだろう〉 〈暴言を言って楽になるなら言った方がいい〉
	未解決の問題に今さらこだわらない (H)	〈いまさら未解決の問題を取り上げることはない〉 〈未解決の問題はエピソードのひとつでしかない〉
	母との信頼関係 (H)	〈母との絶対的な信頼関係がある〉
	母の娘の人生を気遣う気持ち (K)	〈母は娘の人生を気遣う気持ちが絶対ある〉
	成長した私 (B)	〈未解決の問題を取り上げなくなった私は偉い〉 〈自分が成長している〉
	自分を理解してくれる他者を求める (B)	〈自分を理解してくれる他者を求める〉

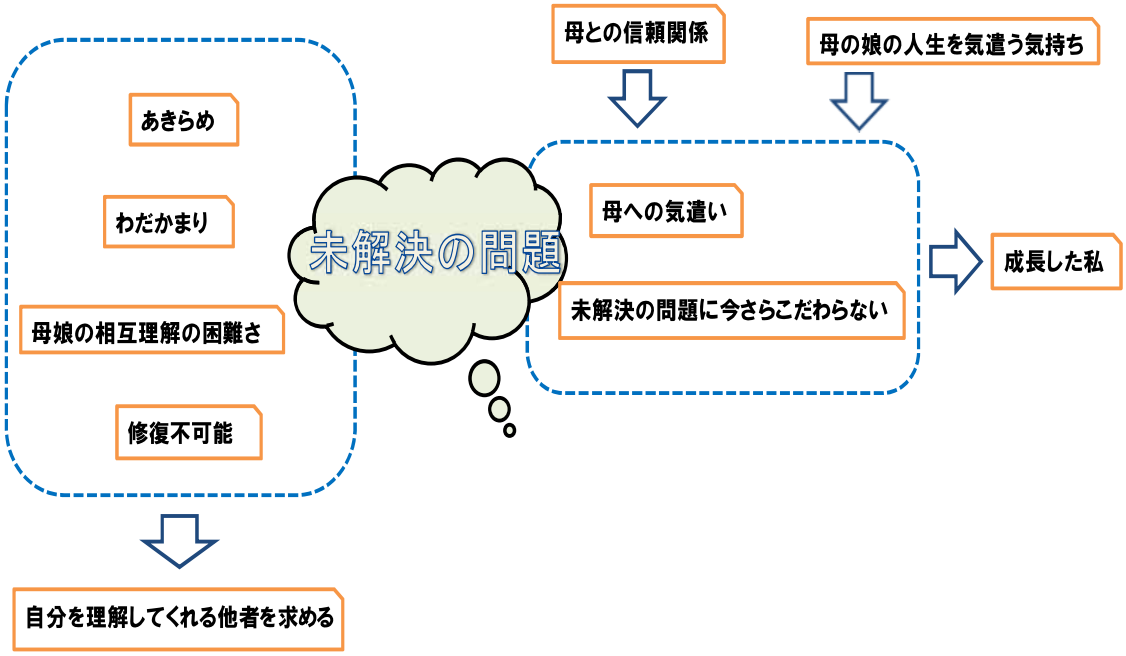

Fig.6-2-1　未解決の問題についての娘の認知の結果図

以下において，本文中の【　】内はカテゴリー名を，〈　〉内はラベルを示している。また，対象者の語りは「　」（斜体）で示している。なお，個人情報保護の観点から，対象者の語りで不都合がある部分は，内容が損なわれない範囲で表現を省略している。

分析の結果，娘の母親認知について，否定的な側面として【あきらめ】，【わだかまり】，【母娘の相互理解の困難さ】，【修復不可能】の４つのカテゴリーと，肯定的な側面として【母への気遣い】，【未解決の問題に今さらこだわらない】，【母との信頼関係】，【成長した私】，【母の娘の人生を気遣う気持ち】，【自分を理解してくれる他者を求める】の６つのカテゴリーが生成された。

以下でカテゴリーに関して説明をおこなう。

(1)未解決の問題についての否定的側面

● あきらめ

【あきらめ】では，親子である以上〈親子だからって何もかも理解することはできない〉ので，〈未解決の問題があっても仕方がない〉し，〈真剣に思っても仕方ない〉と，〈相互理解に対する諦め〉があり，〈現状を受け入れるしかない〉し，〈未解決のままでいい〉と考えているのがみられた。例えば，Ｂは〈相互理解に対する諦め〉について，*「あきらめの境*

地って, もういってて, もう自分がこれは理解して, まあそのそれをずっとやってもこの家からずっと出ていけないし, なんか親にとってもいつまでも子どもに言われても辛いだけだし」と, 母と娘がお互いに理解し合えない辛さをいつまでも引きずっていても仕方がないと【あきらめ】ていることを語った。また, Kは,〈未解決の問題があっても仕方がない〉について,「*それはしょうがないっていうか, 解決出来ない問題っていうよりはなんか, そういう部分あるよねって気づいたっていうか*」と, 親子であってもすべてが分かり合えるのではなく, 分かり合えない部分もあることを悟ったことを語った。

- わだかまり

【わだかまり】では, 未解決の問題についての〈母の言動が理解できない〉し,〈ショックで, 今でも心に残って〉おり,〈素直に受け入れられない〉し, 母に未解決の問題を問いただすこともできず, 娘にとって〈結論が出ないまま曖昧になってしまった〉のがみられた。例えば, Aは〈ショックで, 今でも心に残る〉について,「*なんかこう○○○○○を間違えたかもしれないって直接こういわれたことがあって, で, それはすごくショックで, 今でもやっぱり心に残って*」と, 母はおそらく忘れているであろうが, A自身は子どもの頃の記憶がそこだけ切り取られて残り, 成人した今でもなぜか心に残っていると語った。

- 母娘の相互理解の困難さ

【母娘の相互理解の困難さ】では,〈母と視点が違う〉ために,〈母の気持ちがわからない〉でいるのがみられた。例えば, Kは〈母と視点が違う〉について,「*この人(母)は理解できないなっていうことに気づいて, 他者の理解っていうか, 自分とはまったく違う視点があって*」と, 母と娘で物事における視点が違うことがお互い理解できないことに繋がっていることを語った。

- 修復不可能

【修復不可能】では, 未解決の問題について〈母はもう変われない〉のだから〈今更どうすることも出来ない〉と考えているのがみられた。Fは【修復不可能】について,「*今からまたその親子関係を最初からやり直すとか, ○○○○を私がどうこういう問題でもないし・・・そこで何かこう自分がまた何かイライラしたりとか, で, 一番たぶん私が, 何ていうんだろう, 悩んじゃう, で, 当の本人（母）とか, あの, 悩んでなかったりっていうところがあるので, そんなことに私が一喜一憂している暇はないみたいな*」と, 娘は悩んでいても母はそうではない現状をいまさらどうしようもないことを語った。

(2)未解決の問題についての肯定的側面

● 母への気遣い

【母への気遣い】では,〈私も母も人間だから〉,〈母も失敗があるだろう〉し,〈母も苦労しただろう〉と思えば,〈わざわざ母を責められない〉し,〈私も母同様暴言を言ってしまう〉し,〈私ももっとひどいこと思っているときがある〉ので,母が〈暴言を言って楽になるなら言った方がいい〉と娘が考えているのがみられた。例えば,Dは【母への気遣い】について,*「この年になると,(暴言)言っちゃって楽になるんだったら,言っちゃってもいいと思うし,私だって,(暴言)言って,もっとひどいこと思ってるときあるわよと,思うこともあるし,あの言わずに,溜めてて,ほんとにね,うーん,その言葉が胸の中に残り続けて,それを抱えて生きていくよりは,良かったんだろうとは思いますけどね」*と語り,母が暴言を言って楽になるのであれば,言わないで生きていくよりはましだし,自分自身も暴言を言うこともあるしと母を気遣っているのがうかがえた。

● 未解決の問題に今さらこだわらない

【未解決の問題に今さらこだわらない】では,娘にとって〈未解決の問題はエピソードのひとつでしかない〉ので,母に〈いまさら未解決の問題を取り上げることはない〉と考えているのがみられた。Hは【未解決の問題に今さらこだわらない】について,*「(母は)昔はほんとにこう何でも知ってる,絶対的って感じだったんですけど,やっぱ大人になって,だんだんなってくると,『ああ,母もそうだよな,失敗したりとかあるよな』っていう風にこう,だから,別にそこの一つを取り上げて『何でよ』っていうのは全然ない」*と述べ,現在母とは絶対的な信頼関係があるので,未解決の問題も今となっては,H自身にとって過去のエピソードにすぎない。そのことひとつを取り上げて母を責めることはないし,自分だっていろんなことをしてきているし,母もいろんな事があったのだろうと母の立場を理解しているのがうかがえた。

● 母の娘の人生を気遣う気持ち

【母の娘の人生を気遣う気持ち】では,母と娘でわかりあえない部分もあるが,母には娘にいい人生を送ってほしいという親心があるのがみられた。Kは,【母の娘の人生を気遣う気持ち】について,*「でもやっぱ母と娘だとまた違うんでしょうね,なんか変な人生であってほしくないっていう気持ちが絶対あって」*と,母との関係で未解決の問題を抱えながらも,母の娘に対する親心を感じているのがうかがえた。

● 母との信頼関係

【母との信頼関係】では, 母との関係における未解決の問題を今更取り上げても, 〈母との絶対的な信頼関係がある〉ことで別に大したことではないと考えているのがみられた。Hは【母との信頼関係】について, *「だから別に過去あったことは別にみたいな, 母とやっぱそうですね, それよりも, 何かこう母が自分に賭けてくれたことの方が大きかったっていうのと, あと, 必ず向き合ってくれて答えを出してくれる, 答えっていうか, こういろんな事を言ってくれる人だって, 今, 絶対的なその信頼関係が本当にあるので, だから過去のことを言っても, まあ, 別に, そりゃあ私だっていろんな事をしてきてるし」*と, 母との信頼関係を「絶対的な」と強調した言葉をまじえて幾度となく語り, Hと母との信頼の強さが十分にうかがえた。

● 成長した私

【成長した私】では, 未解決の問題をめぐり親と衝突してきたが, 自分自身が成長して親の気持もわかるようになってくると以前ほど親を責めなくなり, そういう精神的に成長した自分を偉いと思っているのがみられた。Bは【成長した私】について, *「もう自分が成長してて, 外の世界にいって, 理解してくれる人を増やして癒されてこうみたいなのがあって」*, *「やっぱりそこはずっと衝突しぱなしなので最近そういう話あんまりしなくなって, ま, でも, それは私自分が偉いと思ってるんですけど」*と語り, 以前ほどには親を責めたてなくなったB自身が自己の精神的成長に気づいていた。

● 自分を理解してくれる他者を求める

【自分を理解してくれる他者を求める】では, 家族や母にしか話せなかった事を, 自分を理解してくれる他者に話すことで精神的に救われているのがみられた。Bは【自分を理解してくれる他者を求める】について, *「家族でしか共有できない悩みだったので, 何かあんまり人に話しても理解してもらえないし, いろいろ差別とか偏見とか受けるのが怖くて, 何か他の人に話したくても・・・深い話が難しい時があったりとかしていて, どうしてもこう悩みを家族に言いがちだったんですね。母親に何かいろいろ悩みを, ごちゃごちゃした悩みを。〇〇に行ったら『いろんなバックグラウンドの人がいるんだ』とか, 『自分のそのバックグラウンドがマイナスなことになるんじゃないんだな』とすごく安心して, そこで結構何か, まあその〇〇の方々にいろいろ話したりしてるうちに, 何か, ちょっと親への, 親しかわかってくれない話っていうのがだんだん他の人にもわかってもらえるようになったりして, 親以外に, こう, その, 自分の話を出来る人が増えたっていうことですかね」*と, B自身が抱

える問題を今まで差別や偏見を受けることを恐れ,家族以外の他者に話すことをためらっていたが,いろいろなバックグラウンドを持つ人と出会ったことにより,自身が抱える未解決の問題についても,他者に話すことができるようになり,精神的に救われたことを語った。

第3節　支配的な母に対する娘の葛藤 ＜分析 3＞

信田(2008)は,カウンセリングにおける母娘問題のほとんどが娘側からの訴えであり,「母が重くてたまらない」と切実に感じている娘が,母から離れたい,でも母を捨てるのはしのびないという葛藤にさいなまれていることを指摘している。母との関係が親密であるがゆえに母は娘により侵入的であり(Fingerman,1996),娘は母に呑みこまれそうであることを自覚せざる得ず,母の「あなたのため」という態度をもはや愛情としてだけでとらえられなくなり,母を「重い」と感じるのだと思われる。本節では,成人の娘が母を「重い」と感じるとき,娘の母親認知と母への反応がどのようなものであるかを未婚女性の語りを分析することによって,支配的な母に対する娘の葛藤を明らかにしたいと考える。

1. 目　的

母との関係を「重い」と感じるときの娘の母に対する認知と娘の反応について,未婚女性の語りを分析することによって支配的な母に対する娘の葛藤を明らかにすることを目的とする。

2. 方　法

(1) 調査対象

首都圏近郊で母と同居中の未婚女性 17 名のうち,インタビューで母との関係を「重い」と感じることについての語りをした 7 名（B，D，F，G，K，N，Q）を対象とした。なお,質問紙調査で母との関係を「重い」と感じるかを問う質問で,「たまに感じる」と回答していた対象者のうちE，Pは,語りの中で母との関係を「重い」と感じることについて語ることはなかった。

(2) 手続き

＜分析 1＞と同様の手続きでおこなった。

3. 結　果

母娘関係において母が「重い」と感じるときの娘の母に対する認知と娘の反応について分析した。結果は，Table 6-3-1 に示すとおりである。カテゴリー化の過程で,11 のカテゴリー,24 のラベルを生成した。また,母が「重い」と感じるときの娘の母親認知と母への反応についてのカテゴリーの関連図を作成した。結果は， Fig.6-3-1 のとおりである。

Table6-3-1　母との関係を「重い」と感じるときの娘の母親認知と娘の反応についての語りのカテゴリー

カテゴリー		ラベル
娘の母親認知	過干渉な母 (F, G, K)	〈いちいち小うるさい〉 〈私の行動を全部知っていないと気が済まない〉 〈質問攻めで重い〉 〈母の干渉が重い〉
	支配・束縛する母 (G, N)	〈母は私に思い通りのいい子でいて欲しい〉 〈母は私が従わないと怒る〉 〈母は私を束縛する〉
	心配性な母 (Q)	〈母は常に心配する〉
	アンビバレントな母 (G)	〈母は私の行動を知っていないと気が済まないのに口では気にしていないと言う〉
	過保護な母 (D)	〈過保護な母が重い〉
	身勝手な母 (N)	〈母は自分が足りないところは全部覆いかぶさってくる〉
娘の母への反応	母への反発 (B, D, F, G)	〈私はカウンセラーではない〉 〈誰に話すことも出来ないことを口にする母にいいかげんにしてほしい〉 〈そんなに目くじら立てなくてもいいのではないか〉 〈母にいちいち言わないといけないのか〉 〈母に私の行動を全部言わないといけないのか〉
	母との距離を置く (F, G, N, Q)	〈母との話題を選ぶ〉 〈母に関わりたくない〉 〈母に言わずに行動する〉 〈母がうるさい時は距離を置く〉 〈過干渉な母と物理的な距離を置く〉
	母の気持に沿えない時もある (G)	〈母の気持に沿えない時もある〉
	あきらめ (K)	〈母が重いがしょうがない〉
	母に関わらないわけにもいかない (N)	〈母に関わらないわけにもいかない〉

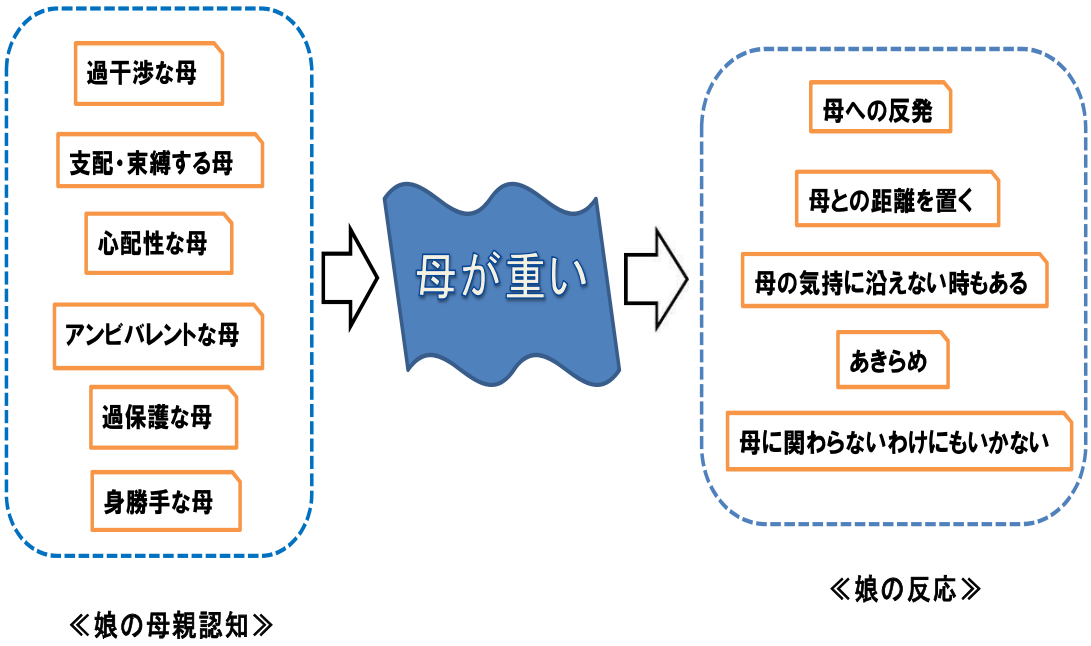

Fig.6-3-1　母が「重い」と感じるときの娘の母親認知と娘の反応についての結果図

以下において，本文中の【　】内はカテゴリー名を，〈　〉内はラベルを示している。また，対象者の語りは「　」（斜体）で示している。なお，個人情報保護の観点から，対象者の語りで不都合がある部分は，内容が損なわれない範囲で表現を省略している。

分析の結果，娘の母親認知については，【過干渉な母】，【支配・束縛する母】，【心配性な母】，【アンビバレントな母】，【過保護な母】，【覆いかぶさってくる母】の６つのカテゴリーが生成された。また，娘の母親への反応については，【母への反発】，【母との距離を置く】，【母の気持に沿えない時もある】，【あきらめ】，【母に関わらないわけにもいかない】の５つのカテゴリーが生成された。

以下でカテゴリーに関して説明をおこなう。

(1) 娘の母親認知について

● 過干渉な母

【過干渉な母】では，娘が母を〈いちいち小うるさい〉存在であるととらえており，〈私の行動を全部知っていないと気が済まない〉母に対し，そういう〈母の干渉が重い〉し，〈質

問攻めで重い〉と感じているのがみられた。例えば,〈質問攻めで重い〉は,社会人としてそれ相応の年齢になっているにもかかわらず,いまだに娘の行動を把握しておきたい過干渉な母を指しており,Gは,干渉してくる母について,*「誰とどこに何しに行くのみたいなもう質問攻めなんですね・・・そういうのがちょっと重いかな*」と語っている。また,〈いちいち小うるさい〉母について,Fは,「*いちいちなんかこううるさいですね,口うるさいわけではないんですけどこう３０,４０手前の娘に・・そうそう言うことじゃないだろうっていう重たさはかまってなさそうにしてるけどやっぱりちょっとかまってるふしはありますね,かまい過ぎですか*」と語り,成長して社会人となり40歳代手前であるにもかかわらず,母が干渉してくることに対して不満があるし,それ自体が「重い」と感じていた。

- 支配・束縛する母

【支配・束縛する母】では,娘が〈思い通りのいい子でいて欲しい母〉が〈従わないと怒る母〉となって娘を支配〈束縛する母〉がみられた。娘が社会人になってもいつまでも母の思い通りのいい子であることを欲し,娘が母に従わないと怒る母に,娘は「重い」と感じている。例えば,Nは,支配してくる母について,*「そうですね,全体的に,最近重いですね,何か全部ですね,何か,何ですかね,自分がこうだって言ったのは命令,何か従わないと怒るんですけど*」と語り,命令に従わないと本当に怒る母を「重い」と感じている。

- 心配性な母

【心配性な母】では,娘が〈母が心配性なのがわかっているから言わずに行動する〉し,〈常に心配する母とは話題を選ぶ〉ようにしているのがみられた。例えば,Qは【心配性な母】について,*「重たいはやっぱり心配性・・・だからそれがもう分かっているから言わずに行動するっていうことを覚えてしまって*」と,母に心配をさせないようにするには母の言うとおりにするしかないので,結局,母に心配させるとQに負荷がかかってしまうと語った。そこで,母の心配の種になりそうな行動は*「事後報告にすることにしている*」と述べた。

- アンビバレントな母

【アンビバレントな母】では,〈私の行動を知っていないと気が済まないのに口では気にしていないと言う母〉がみられた。例えば,Gは【アンビバレントな母】について,*「なんか全部私の行動を知っていないと気が済まないようで,口では『全然そんなの気にしてない』って,『そんなに細かく聞いて,別にそこまで細かく知らなくてもいいじゃん』って言うと『あなたが別にどこで何をしてようとママは気にしてないけど』って言いつつも・・聞いてくるし,帰ってこないと『まだ帰ってこないの』って言うし,機嫌が悪くなる*」と語り,

母の言動を「*重い*」と感じるし,「*うっとうしい*」と語り, Gは「*この年になって悪い友達とつるんで悪いことをしようなんて思わないので, ちょっと, 信じてもらって, 私, お酒飲めないので, ベラベラに酔っぱらってとかもないですし*」と母への不満を述べた。

- 過保護な母

【過保護な母】では, 日頃から大事に育てられていたものの, さすがに過保護すぎて〈過保護な母が重い〉と感じているのがみられた。例えば, Dは【過保護な母】について,「*そういうので(母の過保護で)すごく重いなって思うようになったのは高校生, 高校ですかね, 友達同士で泊りがけで遊びに行くとか, 一人旅で泊りがけっていうのがちょっとあんまりいい顔をしないので, そんなに目くじら立てなくてもいんじゃないの, あは, 思ったりして, お金もないからそんなに行けるわけじゃないんですけど, 自由にやっている家族を見るといいなあって思ったのかもしれないです*」と語り, 幼少時から大事に育てられてきた反面, 母の裁量で娘は自由にやらせてもらえない部分があり, それがDには【過保護な母】としてとらえられているようだった。

- 身勝手な母

【身勝手な母】では, 常日頃は, 母が娘に命令して支配しているが, 母自身が出来ないことに対しては娘に全部頼って来たりで, その都度態度が違うのがみられた。例えば, Nは【身勝手な母】について,「*自分がこうだって言ったのは命令。何か, 従わないと怒るんですけど, 自分が頼りないところは全部やってって感じで覆いかぶさってくるんですね, なので, その時によって違うんですよ*」と, 身勝手な母に振り回されていることを語った。

(2) 娘の母への反応について

- 母への反発

【母への反発】では, 母自身が乗り越えられなかった話や〈誰に話すことも出来ないことを口にする母にいい加減にしてほしい〉,〈カウンセラーではない〉と反発したり,〈母に私の行動を全部言わないといけないのか〉,〈母にいちいち言わないといけないのか〉と,〈そんなに目くじら立てなくてもいいのではないか〉と母に反発しているのがみられた。例えば, Bは【母への反発】について,「*母親が結構なんか・・結構葛藤があった人で, それをこうなんか乗り越えられてなくて子どもに全部垂れ流しちゃうみたいな人だったので, 何か母親の方も何かちょっと私に依存はしないけど結構助けられてるみたいな・・・こっちはカウンセラーじゃないんだから知るかみたいな*」と語り, 母が自身の乗り越えられなかった話を誰に話すこともできずに娘に話すが, Bは〈カウンセラーではない〉と反発し, B

自身が母の支えが必要なのに, これでは立場が逆ではないかと語った。

● 母との距離を置く

【母との距離を置く】では, 〈母との話題を選ぶ〉ことや〈母に言わずに行動する〉ことで, 母との距離を置いたり, 〈母がうるさい時は距離を置く〉, 〈過干渉な母と物理的な距離を置く〉ことで, できるだけ〈母に関わりたくない〉という, 母が娘に介入してくるのを極力避けようとしているのがみられた。例えば, Fは【母との距離を置く】について, *「だから家の中でもちょっとうるさいなと思ったら物理的に自分の部屋に行くとか・・距離をとるようにしてます」*と, 母が娘に干渉してくるときは, 母から離れ介入してくるのを避けている事を語った。

● 母の気持に沿えない時もある

【母の気持に沿えない時もある】では, 母が娘にいつもいい子でいることを要求するが, 娘にとってさすがにそれには限度があり, 母の気持だけを優先できるわけではないと考えているのがみられた。例えば, Gは【母の気持に沿えない時もある】について, *「(母の) 思い通りにいい子でいてほしい…だろうと, 添える時もあれば添えないこともあるし」*と語り, *「心配してくれてるのもわかるし過干渉なのもわかるし, そうですよね, でもねえ, もうねえ, おとなですもんねえ」*と, 母の気持に理解を示しつつも, 娘自身がもう大人であり, 母がそろそろ娘を自立した大人として認めてくれてもいいのではないかと考えているのがうかがえた。

● あきらめ

【あきらめ】では, 「母が重い」と感じながらも, 母の言動が「親」としてはあることだし, どこの親もそうだと思うし, でもそれでも解ってはいるけれどもやっぱり一方で重いと感じているのがみられた。例えば, Kは【あきらめ】について, *「うーん。なんか早く就職しなさい・・(母の干渉が) 重い・・・まあしょうがないかなみたいな」*と語り, 進路についていろいろ意見を押し付けられ, 母の干渉があったが, 「重い」と感じつつも, 親としてはしかたがないことだという【あきらめ】があったことを語った。

● 母に関わらないわけにもいかない

【母に関わらないわけにもいかない】では, 身勝手な母に振り回され今後は関わりたくはないけれど, 親子である以上母に関わらないでいくことは困難であると考えているのがみられた。例えば, Nは【母に関わらないわけにもいかない】について, *「正直関わんなくていいんだったら関わらないほうでいきたいんですけれど, そうもいかないので」*と, 母と

の関係が良好でないNにとって,母は身勝手で支配する母でしかなく,関わりたくないが親子である以上現実はそうはいかないと考えていることを語った。

第4節　考　察

1. 成人期初期の母娘関係の特徴と青年期後期からの変容について

成人期初期では,母娘ともに成人の女性であり,お互いが干渉しない程度の【適度な距離のある関係】を保ちながら【親密な関係】,【信頼関係】を維持しているという青年期後期にはみられなかった成人期初期の特徴がみられた。しかし,誰もが親密な母娘関係であるというわけではない。親子の関係性が重視されるということは,むしろ感情面でのすれ違いが,親子の間で大きな問題になることをも意味しており(中西,2008),本研究でも,否定的な側面の特徴として,【親密ではない関係】,【信頼関係がない】がみいだされた。そして,青年期後期にはみられなかった《問題のある関係》,《将来母の面倒はみられない》が成人期でみられ,母とは距離を置いて無理しない程度でしか付き合えないし,将来の面倒もみられないと娘自身が母との良好ではない関係に見切りをつけているのがうかがえた。例えば,実家を離れ自活する用意があることを語った娘は,離家をすることで母と距離を置き,自立を模索しようとしている様子がうかがえた。

母親認知では,娘は≪母を一人の人間として認識≫し,今まで理解しがたかった≪母の気持・立場の理解≫ができるようになってきていた。これらは,青年期後期にもみられるが,その内容はかなり異なっていた。≪母を一人の人間として認識≫は,青年期後期ではひとつのエピソードでの母親認知にすぎなかったが,成人期初期になると,過去の複数のエピソードを全体的にとらえ,ひとつの局面だけではなくより広く過去の出来事も含めて母を認知しているのがうかがえ,青年期後期にはみられない成人期初期の特徴であるといえよう。その傾向は,例えば【母への感謝】でもみられ,青年期後期では,感謝というよりも自分が恵まれていて嬉しいという娘の気持ちの方が強く,【母のありがたみ】は認知していても,母に謝意を直接表現するような感謝には至っていなかった。しかし,成人期初期では,母に感謝しているという語りが多くみられ,今まで気づかなかった子育ての大変さがわかりこれまで育ててくれたことに感謝したり,昔は嫌だった母の躾の厳しさが今となっては他者に礼儀の良さとして評価され,娘自身の財産となっていることに感謝していた。このように,

ありがたみも感謝も一見似ているようでありながら,語りの中ではその認知の違いが表れていた。

しかし,その一方で,母には共感できないところがあったり,≪母は人生のモデルではない≫と【母を否定的にとらえ】ていた。青年期後期では,≪母を一人の人間として認識する≫にとどまっており,成人期初期のように娘にとって母を人生のモデルとしてとらえられるかどうかまでには至っていなかった。また,母と感性や性格が【お互いが似ている】とか【お互い似ていない】と客観視したり,母の欠点を冷静に受け止めたり,母のような子育てを将来自分の子にはしたくないと【母を否定的にとらえ】ていることなどがみられ,母をみる視点が青年期後期よりもさらに広がりをみせより客観的であり,母のことを母というよりもひとりの成人女性としてとらえているのが特徴的であった。要するに,成人期初期になると母と娘は,親子という「タテ」の関係だけでなく,大人同士としての「ヨコ」の関係が新たに構築され(中西,2008),母をより客観的にとらえていることが示された。それゆえ,支配的な母に対して,娘は【母の支配】や【母の過干渉】を感じているが,そこでは,娘が母との関係に大人同士としての「ヨコ」の関係を意識しているからこそ多分に【母の支配】や【母の過干渉】を感じるのであろうと思われる。また,母との関係が幼少時より良好でない娘が祖父母など【母以外の他者に愛着】を求めることで精神的に助けられていた。山岸(2009)も,母を受け入れられない成人の娘が母性的なかかわりをもってくれる年長者に信頼を寄せている例を報告しており,母と非良好な娘の母娘関係が今後どのように変化していくのか更なる検討が必要である。

そして,【母への依存】では,成人期後期の成人期初期といえども娘自身が≪母への甘え≫を自覚し≪将来母の近くに住みたい≫と考えており,母との関係が半分依存・半分自立の状態である(宮本,2004)のがみられた。このことは,本研究の<研究1>で解明された,成人になっても娘は母と同居することで母の支配を受け続け,成人期になっても母への強い依存を生むことに繋がっていくという結果とも一致するものであった。

2. 成育史からみた母娘関係

山岸(2009)は,成人期の母親認知は生育過程での母との関係をどうとらえていたかが重要であることを指摘しており,対象者の語る生育史を参考に,特に親密な母娘関係にある者と特に葛藤がある母娘関係の者をとりあげ,その両者の違いを検証した。

以下で,各対象者について述べる。

(1) 特に親密な母娘関係

１）Hについて

Hは,幼少時は父と親密であったが,小学生の時に父の単身赴任をきっかけに,母と多く接するようになり,次第に母と親密になっていった。Hの母への信頼は厚く,母は,いつも応援してくれ寄り添ってくれ,母とは絶対的な信頼関係があると述べた。Hの「母への信頼」得点も本研究の対象者の中で一番高く(Fig.6-1-1),Hと母の強い結びつきがうかがわれた。

また,母はHが幼少の頃から専業主婦であり,Hとの接触はより多いことが推測され,より親密な関係であると考えられ,北村・無藤(2003)の「無職の母親の方が有職の母親よりも娘との親密性が高い」という報告にも沿うものである。現在Hは,仕事に就かずに病気がちな母を看病しており,母のケアをすることでより母娘間の親密性は高まっていると思われる。無職の娘の方が有職の娘よりも,母との親密性が高い(北村・無藤,2001)という報告もあり,無職の母と無職の娘の間では接触機会が増すことで,より強い親密な関係が築かれていると考える。そして,そのような母娘の親密な関係について,Hは,成人した今では母とは対等な友達親子のようであると語っている。このことは,成人の娘と母との関係において,母の娘に対する役割変化について3割強の母が親としてではなく友達のような役割に変化してきているという報告（Christine & Heather,2008）にも沿うものである。

山田（1997）も,友達親子の社会的背景のひとつとして,母と娘が上下関係から対等な関係に近づいてきたことによって生じる親密性をあげ,親密さが特に強い母娘関係で,友達関係が強まると示唆しており,親密であるがゆえの,親子という「タテ」の関係だけでなく,一人の大人としての「ヨコ」の関係が新たに構築されている(中西,2008)のがうかがえた。H自身も,大学時になると,母と対等に意見交換ができるようになってきたことを語っており,徐々に,母との関係性が“成人の女性同士”に変化しているのが推測された。

2)Mについて

北村(2008)は,娘が過去の愛着感情の想起が安定している場合は現在の母に対して親密な感情を抱く傾向にあることを指摘しているが,Mの語りは終始安定し,母との親密な関係について多く語った。Mは幼少期から母と親密な関係であり,母への依存も高かった。当時は当たり前だと思っていた母のサポートに対し現在は感謝をしていた。中学時は反抗期で母と結構衝突したようであったが,母が見守ってくれたおかげで切り抜けられた。母と娘が最も問題のある時期として報告するのが10代の時期であるという知見(Fingerman,1997)と同様に,母と良好な関係のMも,例外なく思春期は荒れていたことを語った。語りの中で,

Mが自己主張をする場面が複数見受けられたが,親への絆・依存が強いほど青年は自己主張ができる（渡邊,1994)と示唆されるように,実際,Mは「母への信頼」,「母への依存」が高く(Fig.6-1-3),一時的な対立があってもそれが親子の関係に決定的な亀裂をもたらすことがないという関係性の認識がある(杉村他,2007)からこそ,Mは自己主張をするのであろう。大学時になると,一人暮らしをすることで,母の大変さを理解し,母への支えになりたいと思ったと語っていた。社会人になってからも,母との親密な関係は続き,母への依存も相変わらず続いてはいるが,母を尊敬し支えたいと思い,また,束縛しない母に信頼感を持ち,良好な関係性を築いているようであった。家庭を大切にする古風で保守的な母のもとで大切に養育され,母を気遣い幾度となく「母親を尊敬している」と述べており,母との強い信頼関係がうかがえた。

(2) 特に葛藤がある母娘関係

1）Bについて

Bは,母が病気療養中のきょうだいの付き添いでほとんど家を空けがちであったため,幼少時からいつも寂しい思いをさせられていたことを語った。母が病院に行ってしまうため,いつも一人で行動するしかなく,小さいながら一人で電車に乗っておけいこ事に通ったり,好きでもない親族に預けられ嫌な思いをさせられたことなどを語った。母に対する不信感が語られ,母との距離がかなり感じられ,大学生になってもなかなか親子の関係性を修復できないでいたが,一人暮らしを経験することによって,親のありがたみを感じ,実は,自分は親に守られていたんだということを初めて感じたことを語った。

「きょうだい児」の研究では,きょうだい児自身の情緒・行動・身体面の問題の指摘がなされたり(新家・藤原,2007),きょうだい児が抑うつや不安といった内在的な問題をかかえていること（Sharpe & Possiter,2002)などが報告されている。Bはきょうだい児という立場ゆえに,親からの本来受けられるはずのサポートが得られず,家庭の中で孤立感や疎外感をいつも感じていたのがうかがえた。山岸(2009)は,成人期の母親認知は,まず生育過程で母との関係をどうとらえていたかが重要であり,問題の大きさとその後の認知発達や状況的要因が変化のありかたに影響することを指摘しており,Bの場合は,きょうだいの病気という環境的要因によって,母娘関係を否定的にとらえるようになってしまっていた。

2) Eについて

Eは,母が幼少時から働いていたためにいつも寂しい思いをしていたことを語り,母は,Eにとって理想のモデルではなく,もっとケアをしてほしかったと語った。母に対する不信

感は,幼少時から続いている。しかし,高校生時に受験の失敗を発端に,精神的ダメージを受けたときは,母が本当に支えてくれたことに感謝していた。大学生時は,またぶつかり合うことが多かったが,大学院生時では,今までになく母との交流場面が増えた事を語った。社会人になってからは,経済的な援助に対し感謝しつつも,母に何でも話せるような関係ではなく,肝心なところで打ち解けられないでいると語った。否定的な幼児体験が成人期のアンビヴァレントな感情と関係している(Willson,Shuey,& Elder,2003)という指摘があるように,Ｅは「できれば母には家に居てほしかった」という反面,「母の立場も理解できる」と母との関係性で肯定的な側面もみいだせている反面,それでも幼少時から母がいつも身近にいてくれず寂しい思いをしてきたことが成人した今でも心に残り,なかなか母との関係を深められないでいることを語りの端々で述べていた。

質問紙では,母娘関係は「まあまあ良好」と回答されていたものの,Ｅの面接時の語りからは良好とは言い難い。「過去の対立・葛藤」の得点も高く(Fig.6-1-5),Ｅの母との葛藤がかなり強いことが推測される。Ｅは,幼少時から,母不在の生活で淋しい思いをしたことや,母と本音で未だに話し合えないことを,幾度となく語っていた。北村・無藤 (2003)は,無職の母の方が有職の母よりも,娘との親密性が高いことを示唆しており,Ｅのように,幼いころから有職の母との接触機会の少なかった娘にとって,ケアが必要な時に母のケアが受けられなかったということは,母との親密な関係を築く障害のひとつになっている可能性があると思われる。

3) Ｎについて

Ｎは,幼少の頃から,兄にしか関心を示さない母に取り合ってもらえないまま今日に至っており,母のＮに対するサポートはほとんどなく,母が学校行事に参加することは一切無かった。母は,仕事が忙しい兄に取り合ってもらえなくなって初めて,Ｎに関心を向け,一時は友達扱いをして近づいてきたが,Ｎは母とは信頼関係もないし今さら母に関わりたくないと語った。今までずっと寂しい思いをしながら育ってきたが,救いは,母方の祖父母や友人の母らがいつも暖かく接してくれたことであり,今後は,もう少ししたら,実家を出て一人暮らしを始める予定であることを語った。Suitor & Pillemer(2000)は,母がそれぞれのきょうだいに対する親密さに違いがあり,そこには性と類似性が関連していることを報告しており,兄の性格が母によく似ているという類似性が,母が父似のＮよりも兄を好むことになってしまった要因のひとつではないかと推測する。

(3)特に親密な母娘関係と特に葛藤のある母娘関係の相違について

以上のように,対象者の語りから,特に親密な母娘関係である者と特に葛藤のある母娘関係の者について,生育史を検証した。幼少期の安定的で良好な母子関係は,現在の母子の親密な関係の基礎となっている（井梅,2011）と示唆されるように，特に親密な母娘関係にある者は,幼少期から母との関係が良好であり,母との信頼関係があり母を支えたいという語りも多くみられた。そして,語りの中で母娘関係の否定的な側面を語ることはなく,母との同居生活を楽しんでいるようであった。しかし,母への依存は,依然として高く,＜研究１＞の結果と同様に成人期初期でも母への依存は続いていた。

一方,特に葛藤がある母娘関係の者は,幼少の頃から母との親密な関係が持てておらず,母との信頼関係が構築できず,母を否定的にとらえたり,母への反発が多くみられた。母親認知は否定的で,母娘関係の否定的な側面を語ることに多くの時間を割いていた。これらのことを勘案すると,井梅(2011) が,幼少期の安定的で良好な母子関係は,現在の母子の親密な関係の基礎となっていると指摘するように,成人期初期の母娘関係が特に親密であるか特に葛藤があるのかは,一つには,幼少期の母娘関係が良好であったかそうでなかったかということによって方向づけられていることが推測され,幼少期以後も幼少期の母娘関係を引きずり良好な状態のままあるいは良好でないまま続いていた。

Waters,Merrick,Treboux,Crowell & Albersheim (2000)は,発達早期における愛着の型が変化しにくいことを指摘しており,本研究でも同様の傾向が示されたと考える。そして,Ｂのきょうだいの病気やＥの母が常勤職であったことなど娘を取り巻く環境的な要因によっても,娘の母親認知が変化することが本研究で示されたと考える。

3. 母娘関係における未解決の問題

仲のいい一卵性母娘は母も娘も楽しければ非常に健康的な現象であり,現代社会に生きる女たちが快適に過ごすためにあみだした知恵である(信田,1997)と指摘される一方で,母と娘は葛藤を抱える関係であることが多い（信田,2008,2011ｂ;香山,2014)。母娘関係におけるいまだに解決できずにいる未解決の問題について,娘は,【母の娘の人生を気遣う気持ち】を感じながら,娘自身も【母への気遣い】,【母との信頼関係】があるので【未解決の問題に今さらこだわらない】と考えたり,【自分を理解してくれる他者を求める】ことで娘自身が救われるとポジティブにとらえるように変化しており，精神的に【成長した私】を娘自身が自覚し偉いと思えるようになっていた。しかし,一方で,【わだかまり】が今でも残り,【母娘の相互理解の困難さ】を感じ【修復不可能】であると考え,【あきらめ】の気

持ちであると否定的にとらえていることが示された。

【わだかまり】では,当時幼かった娘にとって,母の不用意な言葉が娘の心の傷となり成人した現在でも忘れられないでいたが,岡田(2014)は,「母親が何の気なく使う否定的な言葉や辛辣な言い回しも,子どもの基本的な安心感や信頼感を損なっていることがある」と示唆している。また,斎藤(2008)も,多くの女性が母にいわれた忘れられない一言の記憶に苦しんでおり,母の言葉はあたかも娘の身体に刻み込まれたように長く影響を残していることを指摘している。本研究でも,信頼している母の不用意な言葉が「どうして母はそのような事を言ったのか」と娘を悩ませ,娘が成人した今でも忘れられない未解決の問題としてとらえられていることがみいだされた。

【修復不可能】では, Ｆは,大学生までは良好な親子関係で母に対する不満も無く過ごしていたが,その後,社会人になってからのある出来事で,母に対するＦの見方がそれまでとは全く変わってしまい,ある出来事のとらえ方にも母と娘でズレがあり,Ｆは深刻に悩んでいるが母はさほどでもなく,【母娘の相互理解の困難さ】や母と娘の関係性の修復が難しいことを語った。Ｆの語り自体も,大学生以前はほとんどなく,30 歳代以降の母娘関係に終始していた。Waters et al (2000)は,発達早期における愛着の型が変化しにくいことを示す一方で,ネガティブな出来事を経験することによって愛着の型が変容する可能性があることを示唆している。また,山岸(2009)も,母娘関係は生育史上の問題だけではなく,各時期に出会う状況の要因がどのようであるか,その問題の大きさによっても規定されることを指摘しており,Ｆも社会人になってからの「ある出来事」を経験することで,母娘関係が一変していた。

【未解決の問題に今さらこだわらない】では,Fingerman(2000)が,娘が成人期を十分に確立すると,母と娘は相手方を大目に見ることができるようであると指摘するように,娘は成人になると母の気持や立場が理解できるようになり,母とは信頼関係があるので今さら未解決の問題を取り上げることはないと語り,母と娘の結びつきのポジティブな面が強調されていた。そして,成人になると未解決の問題を取り上げて母と衝突することが減少し,精神的に【成長した私】を娘自身が自覚し偉いと思えるようになり,【自分を理解してくれる他者を求める】ことで,精神的に救われていた。

また,＜研究 4＞で,青年期後期の青年は, 現在の親子関係が良好であっても未解決の問題を抱えていると親子間の対立･葛藤に強く反応するという結果を得ていたが,成人期初期になると,娘は,【母の娘の人生を気遣う気持ち】を感じつつ,【母への気遣い】もしながら,

【母との信頼関係】があるので未解決の問題に今さらこだわらないというポジティブな考えをするように変化していた。しかし一方で,未解決の問題についての結論が出ないまま【わだかまり】が残り,母との相互理解が困難で,もはや母との関係を修復できないと考えたり,【あきらめ】の気持ちでいることが示され,成人期初期の娘にとって,未解決の問題が解消したわけではなく,アンビバレントな心情で揺れているのがうかがえた。臨床場面において母娘問題のケースのほとんどは,変わろうとしない母に娘が「あきらめる」,「あきれ果てる」という踏ん切りをつけることで終結を迎えていく(香山,2014)ことが指摘されているが,母娘関係における未解決の問題においても同様の傾向がみられた。

しかし,親子関係における未解決の問題は,親子間だけにとどまらない厄介な問題でもある。Lerner(1985) は,家族との未解決な感情的な緊張がすべて,他の重要な人間関係で再現されてしまうことを指摘している。また,野末 (2008)も,夫婦間の葛藤は,時に幼少期からの親との未解決な問題に強く影響されていると示唆しており,母娘関係における未解決の問題が娘のこれからの人生における重要な他者,特に結婚後のパートナーとの関係に少なからず影響を与えるであろうことは否定できないであろう。また,北村・武藤(2001)は,過去の母娘関係に関する記憶や現在の母娘関係に対する感情のいずれもが,独身女性の心理的適応にとって重要な役割を果たしていることを報告しており,母との関係において,いまだに解決できずに未解決の問題を抱えたままでいると,娘の心理的適応を低下させてしまう可能性もあると推測される。

4. 支配的な母に対する娘の葛藤

娘にとって母は,身近な相談相手としてサポート源になると同時に,娘の生活や価値観に干渉してくる重い存在にもなる (信田,2008) という指摘があるように,本研究でも,娘が母が「重い」と感じるエピソードとして,母が娘に対して「あなたのためを思って」という大義名分を掲げながら,実際には自分の願望と理想を押しつけようとする(斎藤,2008)姿が多く語られた。

【過干渉な母】,【支配・束縛する母】,【アンビバレントな母】では,娘は母との関係に葛藤を感じざる得ないでいるが,母は,娘がもはや成人であるにかかわらず,あらゆる口出しをして娘をコントロールしようとする姿がみいだされた。【心配性な母】では,母と娘は親密である反面,お互いに相手に明らかにしない感情や出来事を秘密(secrets)として持っている(Bojczyk et al. ,2011)と指摘されるように,娘が母の心配の種になりそうな行動

は事後報告にすることで,母との良好な関係性を壊すようなことにならないように配慮する娘側の対処がうかがえた。【過保護な母】では,一見母が娘を保護しているようでありながら,実際は母のコントロールのもとに動かされていることを娘自身も気づいているようであった。【身勝手な母】では,母が自分で出来ないことを娘に頼ってくるのを娘は“覆いかぶさってくる”という圧迫感のある言葉で表現をしており,母から身動きが出来ない娘の姿が重なった。臨床の現場では,母の娘への寄りかかりが,娘の心身の問題を引き起こすことが報告されている(高石,1997)が,Nの場合は,母以外の他者のケアが得られることが助けとなり,母に振り回されながらも精神的に追い詰められることは回避できているようであった。

一方,娘の母への反応について,【母への反発】では,母の娘へのコントロールを娘が敏感に感じ取り,母に反発しているのがうかがえた。また,母の愚痴を聞かされる娘が〈カウンセラーではない〉と反発していたが,信田(2011a)も,自分の苦しみを自分で抱えられない女性はその苦しみを子どもに垂れ流し,子どもはそれを受けざる得ないことを指摘している。【母との距離を置く】では,娘は社会人になると母と適度な距離のある関係を構築し,母娘でお互いのプライベートな部分に口出しをしないようにしているのがみられたが,斎藤(2008)も,母娘関係を健全なものにするために“意図的に距離をとる”ことを関係性の解決の方向性のひとつとしてあげており,母と娘の適度に距離のある風通しのいい関係が,母娘それぞが自分自身の人生を生きるためのひとつの選択肢になるようである。【母の気持ちに沿えない時もある】では,母思いの娘が母の過剰なまでの要求に応えられないでいたが,信田(2008)が,母は娘に対して罪悪感を適度に刺激することで母を支え続けなければならないという義務感を植えつけると指摘しているように,娘は成人として認めてもらいたいと思いながらも母の支配下に組み込まれてしまい,母の存在が娘に重くのしかかっているのがうかがえた。【あきらめ】では,娘をいつまでも「子ども」として母の支配のもとにとどめておきたい母に「母だからしかたがない」と屈せざる得ない娘の姿がうかがえた。香山(2014)は,臨床場面において母娘問題のケースのほとんどは,娘が「あきらめる」,「あきれ果てる」という踏ん切りをつけることで終結を迎えていくことを指摘しており,支配的な母に対する娘の葛藤においても同様の傾向がみられた。【母に関わらないわけにもいかない】では,娘は母が「重い」と感じつつも,母娘である以上関わらないわけにもいかないと母に罪悪感を持っている様子がうかがえた。信田(2008)は,母と距離を置いた後にやってくる罪悪感について「これからの人生を生きていくための必要経費である」と割り切って考える

ことをアドバイスしており,母とほど良い距離を保ちながら関係を続けていくためには,娘は罪悪感という多少の痛みが伴うことを自覚する必要があるようである。

以上より,支配的な母に対する娘の葛藤を明らかにしたが,母との関係が親密であるがゆえに母は娘により侵入的であり(Fingerman,1996),娘は母に呑みこまれそうであることを自覚せざる得ず,母の「あなたのため」という態度をもはや愛情としてとらえられなくなってしまっている。信田(2011b)は,母は娘が成人を迎えてからは原則的にはもう母づらする必要はなく,母性をふりがざして娘を従わせようとするそんな思い上がりを正当化する根拠などないことを示唆している。しかしながら,現実には,母は娘との間に境界などないと思っているし(信田,2008),その上,母は娘を「自分の理解者」,「一心同体」とみなし,将来の世話期待も息子より娘に対してより強く望み(高木・柏木,2000),都合が悪くなると世間や常識を持ち出し,最後は「あなたのために」という最強の切り札を持ち出してしまう(信田,2016)のである。

このように娘の人生を支配し続ける母と娘との関係を,上野(2010)が「母の期待に応えるにせよ,母の期待を裏切るにせよ,どちらにしても,娘は母が生きている限り,母の呪縛から逃れることはできない」と指摘するように,支配的な母に対する娘の葛藤は,今後もまだまだ続きそうである。

5. 本研究の問題点と今後の課題

現在,カウンセリングの場面で母娘関係の事例の報告が多々見受けられるなか(香山,2008;信田,2011b;岡田,2014;斎藤,2012),本研究は,カウンセリングの場面に登場することのない一般の成人期初期の未婚女性における母娘関係を未婚女性の語りからとらえた数少ない研究のひとつであるとともに,未婚女性の語りによる母娘関係の未解決の問題についての研究や支配的な母に対する娘の葛藤についての研究は, いずれも本研究が初めての試みではないかと思われ,今後の母娘研究に貢献できたのではないかと考える。

本研究の問題点として,サンプリングの問題があげられる。母娘関係の未解決の問題と,支配的な母に対する娘の葛藤についての調査では,センシティブな問題を取り上げているだけに対象者の数が十分確保できたとは言い難い。今後はさらに対象者を確保して調査する必要があると思われる。

また,今後の課題としては,未婚の娘の結婚や子育てなどのライフステージの変化に伴い,母娘関係が新たな様相を呈しながらいかに変容していくのかを縦断的な研究でさらに

検討を重ねていきたいと考える。

注

1)対象者 17 名のうち,父母と同居中の者は 15 名であり,2 名は社会人の時(30 歳代)に父が病死している。

第 7 章　　総合考察

本研究では,成人期初期の未婚女性に焦点を当て,対象者を大学生から 40 歳未満の成人期初期の女性を対象に,青年期後期から成人期初期における女性にどのような母娘関係の展開がみられるのか,母との同・別居により母娘関係に違いがみられるのかを解明した。また,青年期後期から成人期初期における女性の心理的健康と母娘関係のあり方との関連を解明した。そして,半構造化面接で,母娘関係の親密さと葛藤が現れやすいと考えられる母と同居をしている未婚女性を対象に,青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係の変容を明らかにし,母娘関係における未解決の問題と支配的な母に対する娘の母親認知や反応を質的研究で検討することことにより,量的研究では詳細にとらえにくい母娘関係の親密さと葛藤（Bojczyk et al,2011 ; Fingerman et al,2004 ; Pillemer & Suitor,2002 ; Van Gaalen & Dykstra,2006）を解明した。

これらを解明するにあたり,青年期後期の親子の対立・葛藤における青年の反応についてその特徴(性差･対象差)を検討し,それらが青年の精神的自立にいかに影響するのかを検討した。また,親子の対立・葛藤における青年の反応を用いて親子関係における未解決の問題と関係の良好さについて検討したうえで,上記の分析を試みた。

本章では,第 1 節でこれまでに得られた結果を総括し,第 2 節で本論文の結論,第 3 節で本研究の問題と今後の課題について述べる。

第 1 節　成人期初期の未婚女性における母娘関係

本研究では,第 2 章以下第 6 章まで 5 つの研究で調査・分析をおこなったが,その結果を以下にまとめることにする。

1. 成人期初期の未婚女性における母娘関係の特徴

わが国における青年期の親子関係についての先行研究（小高,1998 ; 久保田,1993 ; 落合・佐藤,1996 ; 小沢・湯沢,1989 ; 渡邊,1994）の尺度を整理し,項目を収集・精選することで,青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係尺度を作成し,「母への支え」,「過去の対立・葛藤」,「母の支配」,「母への信頼」,「母への依存」の 5 因子が抽出された。これらの因子

の中で,「過去の対立・葛藤」は,先行研究ではみられない本研究で初めて取り上げた領域であり，親子関係の再構築がなされる青年期から成人期への移行期に固有の因子として抽出されたものと考える。

ライフステージによる差がみられた「母の支配」,「母への依存」は,年齢が上がるにつれ低下し,「母への支え」では,年齢が上がるにつれて,娘の母を支えていきたいという気持ちが強くなっていた。このことは,福島(1992)の「女子では,精神的自立が大学生以降成人期に急激に獲得されていく」という指摘と同様の方向性が本研究でも示されたと考える。また,「母への依存」では，成人になっても,結婚して子どもがいても,娘の母への依存は解消されることなく続いていることを示し,女子の依存の対象として中学から大学まで母が重要な位置を占めている（高橋,1970)という指摘と異なる結果であった。しかし,北村・無籐(2001)の女性は成人になって結婚・出産しても,母との関係は親密的・依存的であるという指摘とは通じるものであった。

母との同・別居による差がみられたのは,「母の支配」,「母への依存」であり,青年期群と未婚群における別居群の「母の支配」,「母への依存」の変化は急激に低下するのに対し,同居群は緩やかであり,成人になっても娘は母と同居することで「母の支配」を受け続け,成人期になっても母への強い依存を生むことに繋がっていくことが明らかとなった。

2. 成人期初期の未婚女性の母娘関係と心理的健康

成人期初期の未婚女性に着目し,青年期後期から子育て期における女性の心理的健康とそこにおける母娘関係のあり方との関連を検討した結果,青年期群では,青年期後期の女性にとって,母への信頼が高く,かつ,母に対する依存が低いことが,心理的健康と結びついていることが明らかとなった。未婚群では,青年期群と比べ母娘関係の各側面が心理的健康に関連することが少なくなっていたが,全般に決定係数は他の群に比べ高く,むしろ,未婚群の方が,母との関係のあり方が娘の心理的健康に大きな影響を及ぼしていると考えられた。特に「母への依存」は,「自己受容」,「環境制御力」と強く関連し,成人期になっても母への依存が過度に続くとありのままの自己を受容しにくく,周囲の人々や生じた出来事に柔軟に対処していく力が損なわれてしまうことを示した。また,成人期においてもなお「母の支配」が続くことが娘の自律性を阻むひとつの要因といえ,これまで臨床の現場で指摘されてきた（河野,1995；木村・馬場,1988；信田,2008；斎藤,1995,2004）母の緩やかな支配やそれに絡めとられた娘の依存が,娘の自己肯定感や自律性の欠如を生み,外界への対処能力

を損ねてしまうことを本研究で実証的に解明できた意義は大きい。

子育て群では,母娘関係の心理的健康への関連はさらに減少し,その影響の程度も全般に低下しており,親との関係から夫との関係に移行していくものと考えられる。

3. 親子の対立・葛藤

青年期後期での親子の対立・葛藤における青年の反応尺度として,「親への反発」,「親への依存・同調」,「親への落胆」,「自己優先」の4因子が抽出された。そして,「親への反発」,「親への依存・同調」,「自己優先」で性差がみられ,「親への反発」,「親への依存・同調」,「親への落胆」で父母の差がみられた。「親への依存・同調」では,親への依存は青年期後期になっても続いており,特に娘の母への依存が強い(渡邊,1994)ことが本研究でも示された。また,「自己優先」では,先行研究(平井,2000;杉村他,2007; 山崎他,2002)で青年が親子間葛藤場面において自己の欲求を主張・優先する傾向であることを指摘していたが,性差についての検討は先行研究でみあたらず,本研究では男性より女性のほうが自己を優先する結果となった。

また,親子の対立・葛藤が精神的自立,自尊感情に及ぼす影響は,男女ともに父より母との関係の方が強く,母との対立・葛藤は,父よりも青年の精神的自立,自尊感情に影響を及ぼしていた。結果として,青年期後期においてもなお一部に親子の対立・葛藤が,精神的自立,自尊感情を低める影響を及ぼす要因となっていることが明らかとなった。

本研究において,先行研究にはみあたらない青年期後期における親子の対立・葛藤における青年の親認知が実証的に明らかにされたと考える。

4. 親子関係における未解決の問題と関係の良好さ

親子関係における未解決の問題を抱えている者は,そうでない者よりも,親子間の対立・葛藤における反応が強いことが示された。そして,男性より女性の方が,親子間の対立・葛藤における反応を高める傾向があることが明らかとなった。女性は,男性に比べ,一般的に日頃から母との接触や交渉が頻繁で緊密であり(Lawton et al,1994),接触や交渉の頻度や密度が高くなれば親近感や信頼感も増すであろうが,同時にまた葛藤を生じる機会も増える(山田,1986)ことが関連していると考えられる。

親子関係の良好さでは,親子関係が非良好な青年ほど親子の対立・葛藤における反応が強いことが明らかとなり, 親子の対立・葛藤があると, 現在の親子関係の良好さの認知は

青年の反応を低めることが示された。そして，現在の親子関係が良好であっても未解決の問題を抱えている者は,そうでない者より親子の対立･葛藤における反応が強いことが明らかとなった。青年にとって,たとえ現在の親子関係が良好であっても,親子の対立・葛藤の場面での親認知で未解決の問題の影響を受けていることが示され,その傾向は,母娘関係に顕著であることが明らかとなった。このことは,母と娘の関係では心理的距離を取りにくい（斎藤,1995）ことが要因となっていると考える。

本研究において，先行研究ではいまだ実証的には解明されていない親子関係における未解決の問題と関係の良好さについて,親子の対立･葛藤における青年の反応を用いて明らかにされた。

5. 成人期初期の未婚女性における母娘関係の親密さと葛藤

(1)成人期初期の母娘関係の特徴と青年期後期からの変容について

成人期初期では,母と娘はともに成人の女性であり,お互いが干渉しない程度の【適度な距離のある関係】を保ちながら【親密な関係】,【信頼関係】を維持しているという青年期後期にはみられなかった成人期初期の特徴がみられた。しかし,親子の関係性が重視されるということは,むしろ感情面でのすれ違いが,親子の間で大きな問題になることをも意味しており(中西,2008),否定的な側面として，【親密ではない関係】,【信頼関係がない】がみいだされ,青年期後期にはみられなかった《問題のある関係》,《将来母の面倒はみられない》が成人期でみられ,母とは距離を置いて無理しない程度でしか付き合えないし,将来の面倒もみられないと娘自身が母との良好ではない関係に見切りをつけているのがうかがえた。他方で,娘は≪母を一人の人間として認識≫し,今まで理解しがたかった≪母の気持・立場の理解≫ができるようになってきていた。これらは,青年期後期にもみられるが,その内容はかなり異なり,≪母を一人の人間として認識≫は,青年期後期では一つ一つのエピソードでの母親認知にすぎなかったが,成人期初期では,過去の複数のエピソードを全体的にとらえ,一つひとつの局面だけではなくより広く過去の出来事も含めて母を認知しているのがうかがえ,青年期後期にはみられない成人期初期の特徴であるといえよう。しかし,一方で,母には共感できないところがあったり,≪母は人生のモデルではない≫と【母を否定的にとらえていた】。青年期後期では，≪母親を一人の人間として認識する≫にとどまっており,成人期初期のように娘にとって母を人生のモデルとしてとらえられるかどうかには至っていなかった。また,母と感性や性格が【お互いが似ている】とか【お互い似ていない】

と客観視したり,母の欠点を冷静に受け止めたり,母のような子育てを将来自分の子にはしたくないと【母を否定的にとらえている】ことなどがみられ,母をみる視点が青年期後期よりもさらに広がりをみせより客観的であり,母のことを母というよりもひとりの成人女性としてとらえているのが特徴的であった。要するに,成人期初期になると母と娘は,親子という「タテ」の関係だけでなく,大人同士としての「ヨコ」の関係が新たに構築され（中西,2008),母をより客観的にとらえていることが示された。それゆえ,支配的な母に対して,娘が母との関係に大人同士としての「ヨコ」の関係を意識しているからこそ多分に【母の支配】や【母の過干渉】感じるのであろうと思われる。【母への依存】では,成人期初期といえども娘自身が≪母への甘え≫を自覚し,≪将来母の近くに住みたい≫と考えており,このことは,本研究の＜研究 1＞で解明された成人になっても娘は母と同居することで母の支配を受け続け,成人期になっても母への強い依存を生むことに繋がっていくという結果とも一致するものであった。

(2)特に親密な母娘関係と特に葛藤のある母娘関係の相違について

幼少期の安定的で良好な母子関係は,現在の母子の親密な関係の基礎となっている（井梅,2011）と示唆されるように, 特に親密な母娘関係である者は,幼少期から母との関係が良好であり,母との信頼関係が構築されていた。そして,母を支えたいという語りも多くみられ,母との同居生活を楽しんでいるようであった。しかし,母への依存は,依然として高く,＜研究 1＞の結果と同様に成人期初期でも母への依存は続いていた。一方,特に葛藤がある母娘関係の者は,幼少の頃から母との親密な関係が持てておらず,母との信頼関係が構築できず,母を否定的にとらえたり,母への反発が多くみられた。

これらのことを勘案すると,井梅(2011) が,幼少期の安定的で良好な母子関係は,現在の母子の親密な関係の基礎となっていると指摘するように,成人期初期の母娘関係が良好であるのかそうでないのかは,一つには,幼少期の母娘関係が良好であったかそうでなかったかということによって方向づけられていることが示された。Waters,Merrick,Treboux, Crowell & Albersheim (2000)は,発達早期における愛着の型が変化しにくいことを指摘しており,本研究でも同様の傾向が示された。また,娘を取り巻く環境的な要因によっても,娘の母親認知が変化することが本研究で示された。

(3)母娘関係における未解決の問題

青年期後期において, 青年は,現在の親子関係が良好であっても未解決の問題を抱えている者はそうでない者より親子の対立・葛藤で強く反応していたが,成人期初期になると,

現在の母娘関係が良好であると報告する娘は,母の気遣いを感じながら,娘自身も母を気遣い, 母との信頼関係があるので未解決の問題に今さらこだわらないというポジティブな考えをするように変化していた。そして,精神的に成長した自分自身を自覚し偉いと思えるようになり,自分を理解してくれる他者を求めることが出来るようになったことで,精神的に救われていた。しかし,一方では,未解決の問題についての結論が出ないままわだかまりが残り,母との相互理解が困難であり,もはや母との関係を修復できないと考えたり,あきらめの気持ちでいることが明らかとなった。香山(2014)は,臨床場面において母娘問題のケースのほとんどは,娘が「あきらめる」,「あきれ果てる」という踏ん切りをつけることで終結を迎えていくことを指摘しており,母娘関係における未解決の問題においても同様の傾向がみられた。

(4)支配的な母に対する娘の葛藤

過干渉な母,支配・束縛する母,心配性な母,アンビバレントな母,過保護な母,身勝手な母に,娘は母が「重い」と感じ,全てが母の思いどおりにいくわけではなく,母の気持に沿えない時もあると考え,母との距離を置いたり,母へ反発をしつつも,それでも親子である以上母に関わらないわけにもいかないと考えたり,あきらめの感を持っていることが明らかとなった。信田(2008)が,娘にとって母は身近な相談相手としてサポート源になると同時に,娘の生活や価値観に干渉してくる重い存在にもなると指摘するように,本研究でも,娘は,母娘関係が良好であると報告する一方で,娘との間に境界などないと思っている母が(信田,2008)娘に侵入的である(Fingerman,1996)ことに,娘の葛藤があることが明らかとなった。

第2節　本研究の結論

最後に,本研究の結果を成人期初期の未婚女性の母娘関係に即してまとめると,以下のように要約することができる。

1)成人期初期の未婚女性は,成人になっても母と同居することで母の支配を受け続けることになり,そのことが,成人期になっても母への強い依存を生むことに繋がり,道具的にも精神的にも母に依存しているのが明らかとなった。

2)成人期初期の未婚女性の心理的健康においては,母の緩やかな支配やそれに絡めとられ

た娘の依存が,娘の自己肯定感や自律性の欠如を生み,外界への対処能力を損ねてしまうことが明らかとなった。

3)成人期初期の未婚女性は, 母娘関係において,母のことを母というよりもひとりの成人女性としてとらえ,複数のエピソードを全体的にとらえて,ひとつの局面だけではなくより広く過去の出来事も含めて母を認知しているのが明らかとなった。しかし,一方で,娘自身が母への甘えを自覚するほどに,母への依存は依然として続いていた。

4)成人期初期の母娘関係が良好であるのかそうでないのかを方向づける重要な要因のひとつとして,幼少期の母娘関係が良好であったかそうでなかったかということが示された。

5)成人期初期の未婚女性は,母娘関係における未解決の問題について,母の気遣いを感じながら,娘自身も母を気遣い,母との信頼関係があるので未解決の問題に今さらこだわらないというポジティブな考えをするように変化しており,精神的に成長した自分を自覚していた。しかし,一方では,結論が出ないままわだかまりが残り,母娘の相互理解が困難であり,もはや母との関係を修復できないと考えたり,あきらめの気持ちでいることが明らかとなった。

6)成人期初期の未婚女性は,支配的な母に対して,すべてが母の思いどおりにいくわけではなく,母の気持に沿えない時もあると考え,母との距離を置いたり,母に反発をしつつも,それでも親子である以上母に関わらないわけにもいかないと考えたり,あきらめの感を持っていることが明らかとなった。

以上のことから,未婚女性が母との葛藤や支配・母への依存を脱却し,精神的に健康に生きていくためには,「母親との適度な距離」を保つ必要があるのではないかと考える。そして,未婚女性が母と直接対峙するのではなく,母との葛藤を抱えあきらめの感を持ちつつそれでも健気に母に接しているのは,ある意味現実に適応的に生きる“たくましさ”を娘が持ち合わせているからだと言えるのではないだろうか。

第3節　本研究の問題と今後の課題

親子関係において,父・母・息子・娘のいずれの組み合わせにおいても特徴的な違いが存在する(小高,2008;Renk et al,2005;渡邊,1994)ことが解明されつつあるなか,母と娘の関係は,性の類似性がより大きな親密さと関連し(Fingerman,2001; Pillemer &

Suitor,2002 ; Suitor & Pillemer,2000 ; Suitor et al, 2006), はるかに同質性が強いだけに,母が娘の隅々まで干渉し,支配することがよりたやすく実現してしまう（矢幡,2000）。ゆえに,母と娘の関係は葛藤を抱える関係であることも多く（信田,2008,2011a,2011b;香山,2014）,親密さのみならず葛藤も存在する（Bojczyk et al,2011 ;Fingerman et al,2004 ;Pillemer & Suitor,2002 ;Van Gaalen & Dykstra,2006）という特殊な関係である。

そのような母と娘の関係の特徴を考慮しながら,本研究では, わが国における成人期初期の未婚女性に着目し,青年期後期から成人期初期にかけてどのような母娘関係の展開がみられるのか,また,母との同・別居により母娘関係にいかなる違いがみられるのかを比較検討することで,未婚女性の母娘関係の特徴をとらえ,そして母娘関係が未婚女性の精神的健康にいかに影響を及ぼしているのか,また,未婚女性の語りから,成人期初期の母娘関係の特徴をとらえ,それらが青年期後期からいかに変容しているのか,母娘関係における未解決の問題を娘がどのようにとらえているのか,そして支配的な母に対する娘の葛藤がいかなるものかを明らかにすることで,成人期初期の未婚女性における母娘関係を明らかにしてきた。わが国において,心理学領域における未婚の社会人女性（20 歳台から 40 歳未満）について母娘関係に言及した実証的な研究は少なく（北村,2008;北村・無藤,2001;水本・山根,2010,2011;高木・柏木,2000）,本研究での実証的な解明は母娘関係の研究に貢献できたと考える。

そして,現在カウンセリングの場面での母娘関係の事例の報告が多々見受けられるなか(香山,2008;信田,2011b;岡田,2014;斎藤,2012),本研究の質的研究においては,カウンセリングの場面に登場することのない一般の成人期初期の未婚女性における母娘関係を未婚女性の語りからとらえた数少ない研究のひとつであるとともに,未婚女性の語りによる母娘関係の未解決の問題についての研究や支配的な母に対する娘の葛藤についての研究は,いずれも本研究が初めての試みではないかと思われ,今後の母娘研究に貢献できたのではないかと考える。

また,本研究では,青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係尺度を作成したが,近年の研究で本尺度を用いているのが見受けられ(例えば,藤田・岡本,2010;野間・牛尾・横瀬・境,2013),本尺度の有用性が示されたのではないかと考える。

本研究の問題点として,対象者のサンプリングの問題があげられる。本研究では,青年期後期から成人期初期にかけての年齢層を研究対象としたが,成人期初期群についてはこれ

までも対象者を集めることが困難なため,あまり研究がなされてこなかった。そのため本研究でも,さまざまな方法を介して対象者を募ったが,必ずしも広範な層から資料が得られたとはいえず,今後はサンプリングの改善が必要であると思われる。また,成人期初期の女性においては,DINKS などの既婚で子どもを持たない女性等,本研究で設定した群には含まれない女性もおり,今後はより多角的な視点で母娘関係をとらえる研究も進めたいと考える。

本研究では,成人期初期の未婚女性に焦点をあて母娘関係を検討してきた。現代の高齢化社会において,成人の娘と母との関係はますます長くなってきており,母と娘は成熟した成人女性同士の母娘関係をこれからどのように構築していくのかというこれまで経験したことない課題に直面している(中西,2008)。香山(2008)は,最近「年齢層の高い母と娘の支配と依存」のケースが確実に増えてきていることを指摘しており,成人の母娘関係についての研究がこれからさらに求められると思われる。

今後の課題としては,未婚の娘の結婚や子育てなどのライフステージの変化に伴い,母娘関係が新たな様相を呈しながらいかに変容していくのかを縦断的な研究でさらに検討を重ねていきたいと考える。

本論文を構成する研究の発表状況

【論　文】

- （原著）

  藤原あやの・伊藤裕子(2007). 青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係　青年心理学研究, 19, 69-82.

- （原著）

  藤原あやの・伊藤裕子(2010). 青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達―母娘関係が心理的健康に及ぼす影響― カウンセリング研究, 43, 33-42.

- （意見リプライ論文）

  藤原あやの・伊藤裕子(2008). 青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係―山岸・上地氏のコメントの対するリプライ― 青年心理学研究, 20, 174-177.

- （資料）

  藤原あやの・伊藤裕子(2017). 親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の作成　カウンセリング研究, 2017 年 6 月採択済み

【紀　要】

- 藤原あやの(2016).青年期後期の親子関係―親子関係における未解決の問題と関係の良好さについての検討― 児童学研究,18, 1-6.
- 藤原あやの(2017). 親子の対立・葛藤における青年の反応が精神的自立, 自尊感情に及ぼす影響―大学生の親子関係―児童学研究,19, 31-36.

【発　表】

- ポスター発表

  藤原あやの(2015). 青年期後期における親子関係―親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の作成― 日本心理臨床学会第 34 回秋季大会発表論文集 pp. 414.

引用文献

Arnett, J. J. (2000). Emerging adulthood : A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, **55**, 469-480.

Arnett, J. J. (2004). A longer road to adulthood. In J. J. Arnett (Ed.). *Emerging Adulthood : The winding road from the late teens through the twenties*. New York : Oxford University Press, pp. 3-25.

Arnett, J. J. (2007). Emerging adulthood: What is it, and What is it Good For? *Society for Research in Child Development*, **1**, 68-73.

Barnett, R. C., Kibria, N., Baruch, G. K., & Pleck, J. H. (1991). Adult daughter-parent relationships and their associations with daughters' psychological distress. *Journal of Marriage and the Family*, **53**, 29-43.

Bassoff, E. S. (1988). *Mothers and Daughters:Loving and Letting Go.* Dutton Adult. (村本邦子・山口知子(訳)(1996). 母は娘がわからない―子離れのレッスン― 創元社)

Bassoff, E. S. (1991). *Mothering and Ourselves:Help and Healing for Adult Daughers.* Dutton Adult. (村本邦子・山口知子(訳)(1996). 娘が母を拒むとき―癒しのレッスン― 創元社)

Bojczyk, K. E., Lehan, T. J., McWey, L. M., Melson, G. F., & Kaufman, D. R. (2011). Mothers' and their adult daughters' perceptions of their relationship. *Journal of Family Issues*, **32**, 452-481.

Buhl, H. M. (2007). Well-being and the child-parent relationship at the transition from university to work life. *Journal of Adolescent Research*, **22**, 550-571.

Chodorow, N. (1978). *The reproduction of mothering*. University of California Press. (大塚光子・大内菅子(訳)(1981). 母親業の再生産　新曜社)

Christine, M. P. & Heather, M. H. (2008). Mothers' and Fathers' Perceptions of Change and Continuity in Their Relationships With Young Adult Sons and Daughters. *Journal of Family Issues*, **29**, 234-261.

Clark-Lempers, D. S., Lempers, J. D., & Ho, C. (1991). Early, middle, and late adolescents' perceptions of their relationships with significant others. *Journal of Adolescent Research*, **6**, 296-315.

Coffey,A.,& Atkinson,P.(1996).*Making sense of qualitative data:Complementary reseach strategies.*CA:Sage Publications.

浴野雅子 (2002).女子青年の親子関係 岡本祐子・松下美和子(編) 新女性のためのライフサイクル心理学　福村出版　pp.110-125.

Fingerman,K.L.(1996).Sources of tention in the aging mother amd adult daughter relationship.*Psychology & Aging*,**11**,591-606.

Fingerman,K.L.(1997).Aging mothers' and adult daughters' retrospective ratings of conflict in their past relationships.*Current Psychology*,**16**,131-154.

Fingerman,K.L.(2000). ″We Had a Nice Little Chat″ Age and Generational Differences in Mothers' and Daughters' Descriptions of Enjoyable Visits. *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*,**55**,95-106.

Fingerman,K.L.(2001).A distant closeness: Intimacy between parents and their children in later life.*Generations,***25**,26-33.

Fingerman,K.L.,Hay,E.L.,& Birditt,K.S.(2004).The best of ties, the worst of ties:Close, problematic, and ambivalent relationships across the lifespan. *Journal of Marriage and Family*,**66**,792-808.

Fingerman,K.L.,Pitzer,L.,Lefkowitz,E.S.,Birditt,K.S.,& Mroczek,D.(2008). Ambivalent relationship qualities between adults and their parents: Implications for the well-being of both parties. *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*,**63**,362-371.

Engels,R.C.,Finkenauer,C.,Meeus,W.,& Deković,M.(2001).Parental attachment and adolescents' emotional adjustment: The associations with social skills and relational competence. *Journal of Counseling Psychology*,**48**,428-439.

藤田ミナ・岡本裕子(2010).青年期後期における娘のとらえる母親との関係性 広島大学心理学研究,**10**,201-216.

藤原あやの(2016).青年期後期の親子関係 ―親子関係における未解決の問題と関係の良好さについての検討― 児童学研究,**18**,1-6.

藤原あやの・伊藤裕子(2007).青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係 青年心理学究,**19**,69-82.

藤原あやの・伊藤裕子(2008).青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係―山岸・上地氏のコメントに対するリプライ― 青年心理学研究,20,174-177.

藤原あやの・伊藤裕子(2010).青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達―母娘関係が心理的健康に及ぼす影響― カウンセリング研究,43,33-42.

福島みのり(2008).韓国シングル女性の実態と非婚化に関する研究 ―20,30 代を中心に国際交流研究― 国際交流学部紀要,10,103-124.

福島朋子(1992).思春期から成人期にわたる心理的自立―自立尺度の作成及び発達的検討― 発達研究,8,67-87.

平井美佳(2000).問題解決場面における自己と他者の調整 教育心理学究,48,462-472.

平山順子(1999).育児期における専業主婦の個人化欲求―経済的資源へのアクセス志向型との関連を中心に― 発達研究,14,62-77.

Hofstede,G.(2001).*Culture' sconsequences:Comparing values,behaviors, institutions,and organizations across nations*.Thousand Oaks,CA:Sage.

池田幸恭(2009).大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係 青年心理学研究,21,1-16.

池田幸恭・大竹裕子・落合良行(2006).大学生における「子の母親とのかかわり方」の認知の分析 筑波大学心理学研究,32,49-62.

井上忠典 (2002).大学生における親の養育態度と親との依存-独立の葛藤の関連 高知大学教育学部研究報告,62,45-49.

伊藤裕子(1996).新たな家族の成立―恋愛・結婚から子の誕生まで― 斎藤誠一(編) 青年期の人間関係 培風館 pp.55-83.

伊藤裕子・小渕暁子・駒崎由利子(2002).幼児をもつ母親の育児ストレスと疎外感 聖徳大学研究紀要(人文学部),13,9-14.

井梅由美子(2011).青年期女子の母娘関係と対象関係 東京未来大学研究紀要,4,27-35.

岩上真珠(2013).ライフコースとジェンダーで読む家族［第3版］有斐閣

柏木惠子(2001).子どもという価値―少子化時代の女性の心理― 中央新書

柏木惠子(2003).家族心理学―社会変動・発達・ジェンダーの視点― 東京大学出版会

柏木惠子・若松素子(1994).「親となる」ことによる人格発達 ―生涯発達的視点から親を研究する試み― 発達心理学研究,5,72-83.

加藤隆勝・高木秀明(1980).青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理

学研究, 28, 336-340.
河野貴代美(1995). フェミニスト・カウンセリング　柏木惠子・高橋惠子(編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房　pp. 223-246.
川浦康至・池田政子・伊藤裕子・本田時雄(1996). 既婚者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート― 女性を中心に― 心理学研究, 67, 333-339.
香山リカ(2008). 親子という病 講談社
香山リカ(2014). 怒り始めた娘たち―「母娘ストレス」の処方箋― 新潮社
梶山有二(1992). 思春期やせ症 公衆衛生, 57, 570-573.
木村栄・馬場謙一(1988). 母子癒着―母を拒み, 母を求めて― 有斐閣
北村琴美(2008). 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性―愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連― 心理学研究, 79, 116-124.
北村琴美・無藤隆(2001). 成人の娘の心理的適応と母娘関係―娘の結婚・出産というライフイベントに着目して― 発達心理学研究, 12, 46-57.
北村琴美・無藤隆(2003). 中年期女性が報告する娘との関係と心理的適応との関連 心理学研究, 74, 9-18.
国立社会保障・人口問題研究所(2012). 第 14 回出生動向基本調査 厚生労働統計協会
厚生労働省(2013). 子ども虐待による死亡事例等の検証結果（第 9 次報告の概要）及び児童虐待相談対応件数等　http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000037b58.html (2015 年 8 月 20 日取得)
小高恵(1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46, 333-342.
小高恵(2006). 親から心理的・精神的に傷つけられることについての因子分析的研究 太成学院大学紀要, 8, 59-68.
小高恵(2008). 青年の親への態度についての発達的変化―心理的離乳過程のモデルの提案― 太成学院大学紀要, 10, 31-48.
久保田佳子(2009). 青年期の母娘関係の発達差―会話分析による青年期前期と後期の交流の比較― 心理学研究, 79, 530-535.
久保田まり(1993). 過去および現在の母親との関係に関する感情傾向―認識と対人関係, 親和欲求との関連― 母子研究, 14, 22-32.
Laursen, B., Coy, K. C., & Collins, W. A. (1998). Reconsidering changes in parent-child

conflict across adolescence: A meta-analysis. *Child Development*, **69**, 817-832.

Lawton, L., Silverstein, M., & Bengtson, V. (1994). Affection, social contact, and geographic distance between adult children and their parents. *Journal of Marriage and the Family*, **56**, 57-68.

Lerner, H. G. (1985). *The dance of anger: A woman's guide to changing the patterns of intimate relationships.* New York: Harper & Row. (レーナー, H.G. 園田雅代(訳)(1993). 怒りのダンス　誠信書房)

松元泰儀(1996). 人間関係のつまずきと病理 斎藤誠一(編) 青年期の人間関係 培風館, pp. 135-167.

目黒依子(1987). 個人化する家族 勁草書房

宮本みち子(2002). 若者が社会的弱者に転落する 洋泉社

宮本みち子(2004). ポスト青年期と親子戦略―大人になる意味と形の変容― 勁草書房

宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘(1997). 未婚化社会の親子関係 有斐閣

水本深喜(2016). 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響―「母親への親密性尺度」による検討― 青年心理学研究, **27**, 103-118.

水本深喜・山根律子(2010). 青年期から成人期への移行期における母親との距離の意味―精神的自立・精神的適応との関連から― 発達心理学研究, **21**, 254-265.

水本深喜・山根律子(2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係 ―「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の 4 類型モデル」の検討― 教育心理学研究, **59**, 462-473.

永田忠夫・新美明夫・松尾貴司(2007). 初期成人期にある娘とその母親との関係―母娘システムとしての分析― 家族心理学研究, **21**, 31-44.

中西泰子(2008). 現代の親子関係とはいかなるものか―仲良し母娘とその社会的背景― 南田勝也・ 辻泉(編) 文化社会学の視座―のめりこむメディア文化とそこにある日常の文化― ミネルヴァ書房 pp. 194-215.

西田裕紀子(1999). 成人期女性の心理的well-being に関する研究 (1) ―心理的well-being 尺度の作成― 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 693.

西田裕紀子(2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, **48**, 433-443.

西田裕紀子・齊藤誠一(2001). 成人女性の心理的発達に関する研究の課題と展望　人間科学

研究, **19**, 141-150.

西平直喜(1990).成人になること―生育史心理学から― 東京大学出版会

信田さよ子(1997).一卵性母娘な関係 主婦の友社

信田さよ子(2008).母が重くてたまらない―墓守娘の嘆き― 春秋社

信田さよ子(2011a).重すぎる母 無関心な父―「いい子」という名のアダルト・チルドレン― 静山社

信田さよ子(2011b).さよならお母さん―墓守娘が決断する時― 春秋社

信田さよ子(2016).母からの解放―娘たちの声は届くか― 集英社

信田さよ子・上野千鶴子(2008).スライム母と墓守娘―道なき道ゆく女たち― ユリイカ, **40**, 73-88.

野間あずさ・牛尾恵・横瀬洋輔・境泉洋(2013).女子大学生における母娘関係が娘の自尊感情と抑うつに与える影響 徳島大学人間科学研究, **21**, 35-47.

野末武義(2008).夫婦関係の危機と援助―愛は幻だったのか― 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 家族心理学―家族システムの発達と臨床的援助― 有斐閣ブックス pp.173-189.

大場眞理子・安藤哲也・宮崎隆穂・河村則行・濱田孝・大野貴子・龍田直子・苅部正巳・近喰ふじ子・吾郷晋浩・小牧元・石川俊男(2002).家族環境からみた摂食障害の危険因子についての予備的研究 心身医学, **42**, 315-324.

落合恵美子(1995).「個人を単位とする社会」と「親子関係の双系化」―家族社会学の視点から― ジュリスト, 1059, 37-44.

落合良行(1995).心理的離乳への5段階過程仮説 筑波大学心理学研究, **17**, 51-59.

落合良行・佐藤有耕(1996).親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.

岡田尊司(2014).母という病 ポプラ社

大野久(2008).男子学生の自我発達の遅れとその原因 柏木惠子・高橋惠子(編) 日本の男性の心理学―もう一つのジェンダー問題― 有斐閣 pp.92-96.

大野祥子(2001).母と娘 柏木惠子・伊藤美奈子(編) 女性のライフデザインの心理1 大日本図書 pp.33-52.

Onayli, S., & Baker, Ö. E. (2013). Mother - daughter relationship’s links to daughter’s self-esteem and life satisfaction. *Turkish Psychological Counseling and Guidance*

Journal, **5**, 167-175.

小野寺敦子(1984).娘からみた父親の魅力 心理学研究, **55**, 289-295.

小野寺敦子(1993).日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, **64**, 147-152.

小野寺敦子(2009).親子関係が青年の無気力感に与える影響―エゴ・リジリエンスが果たす機能― 目白大学心理学研究, **5**, 9-21.

小沢一仁・湯沢理恵子(1989).青年期の心理的離乳と同一性 ―心理的離乳尺度の作成と同一性地位との関連― 帝京学園短期大学研究紀要, **3**, 63-74.

Pillemer, K., & Suitor, J. J. (2002). Explaining mothers' ambivalence toward their adult children. *Journal of Marriage and Family*, **64**, 602-613.

Renk, K., Liljequist, L., Simpson, J. E. & Phares, V. (2005). Gender and age differences in the topics of parent-adolescent conflict. *The Family Journal:Counseling and Therapy for Couples and Families*, **13**, 139-149.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Prinston, NJ:Prinston University Press.

Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J. (2000). The development of close relationships in Japan and the United States: Paths of symbiotic harmony and generative tension. *Child development*, **71**, 1121-1142.

Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being, *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069-1081.

相良順子(2007).育児不安の発生プロセスの検討 ―母親の自己注目を一要因として― 家族問題相談研究, **5**, 7-11.

斎藤学(1995).「家族」という名の孤独 講談社

斎藤学(1999).依存と虐待 日本評論社

斎藤学(2001).家族の闇をさぐる―現代の親子関係― 小学館

斎藤学(2004).インナーマザー ―あなたを責めつづけるこころの中の「お母さん」― 新講社

斎藤学(2007).家族パラドックス:アディクション・家族問題・症状に隠された真実 中央法規

斎藤学(2012).家族依存のパラドックス―オープン・カウンセリングの現場から 新潮文庫

斎藤環(2008).母は娘の人生を支配する―なぜ「母殺し」は難しいのか― 日本放送出版協会

斎藤嘉孝(2009).親になれない親たち 新曜社

桜井茂男(2000).ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学究,**12**,65-71.

沢宮容子・田上不二夫(2005).育児不安を抱える母親への援助過程 ―注目スタイルの視点から― カウンセリング研究,**38**,303-310.

Sharpe,D.& Possiter,L.(2002).Siblings of children with a chronic illness:A Meta-Analysis,*Journal of Pediatric Psychology*,**27**,699-710.

Shulman,S.,Feldman,B.,Blatt,S.J.,Cohen,O.,& Mahler,A.(2005).Emerging adults: Agerelated tasks and underlying self processes.*Journal of Adolescent Research*, **20**,577-603.

柴田利男(2000).青年期の対人関係 藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿（編）青年期以降の発達心理学―自分らしく生き,老いるために― 北大路書房 pp.56-74.

新家一輝・藤原千恵子(2007).小児の入院と母親の付添が同胞に及ぼす影響―同胞の情緒と行動の問題の程度と属性・背景要因との関連性― 小児保健研究,**66**,561-567.

白井利明(1988).成人性の基準における次元の問題(2)―20歳代の未婚有職者の調査から― 大阪教育大学紀要,**37**,151-161.

白井利明(2010).30歳の女性はなぜ自分を大人と思わないのか―縦断的研究― 大阪教育大学紀要,**58**,77-87.

Steinberg,L.(2001).We know some things : Parent-adolescent relationships in retrospect and prospect. *Journal of Research on Adolescence*,**11**,1-19.

杉村和美・竹尾和子・山崎瑞紀(2007).青年-両親間の葛藤調整過程に関する面接調査 発達研究,**21**,39-54.

Suitor,J.J.,& Pillemer,K.(2000).Did mom really love you best? Developmental histories, status transitions, and parental favoritism in later life families. *Motivation and Emotion*,**24**,105-120.

Suitor,J.J.,& Pillemer,K.(2006).Choosing daughters: Exploring why mothers favor adult daughters over sons.*Sociological Perspectives*,**49**,139-161.

Suitor, J. J., Pillemer, K., & Sechrist, J. (2006). Within-family differences in mothers' support to adult children. *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, **61**, S10-S17.

高木紀子(2008).母における娘への思い　柏木惠子・塘利枝子・永久久子・大野祥子・福島朋子（編）発達家族心理学を拓く―家族と社会と個人をつなぐ視座―　ナカニシヤ出版　pp. 38-44.

高木紀子・柏木惠子(2000).母親と娘の関係―夫との関係を中心に― 発達研究, **15**, 79-94.

高橋恵子(1970).依存性の発達的研究Ⅲ ―大学・高校生との比較における中学生女子の依存性― 教育心理学研究, **18**, 65-75.

高石浩一(1997).母を支える娘たち―ナルシシズムとマゾヒズムの対象支配 日本評論社

徳田治子(2004).ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から 発達心理学研究, **15**, 13-26.

富岡麻由子・高橋道子(2005).親への移行期にある娘のとらえる母親との関係性―再構築の過程とその要因― 東京学芸大学紀要 1 部門, **56**, 137-148.

内田利広(2014).期待とあきらめの心理―親と子の関係をめぐる教育臨床― 創元社

上野千鶴子(2010).女ぎらい―ニッポンのミソジニー― 紀伊国屋書店

Van Gaalen, R. I., & Dykstra, P. A. (2006). Solidarity and conflict between adult children and parents: A latent class analysis. *Journal of Marriage and Family*, **68**, 947-960.

渡邊恵子(1994).青年期の自立と親子関係 日本女子大学紀要, 人間社会学部, **5**, 305-319.

渡邊恵子(1997).青年期から成人期にわたる父母との心理的関係 母子研究, **18**, 23-31.

渡邊恵子(2004).母親と娘はなぜ親密か―青年期から成人期にかけて― 柏木惠子・高橋惠（編） 心理学とジェンダー―学習と研究のために― 有斐閣　pp. 31-36.

Waters, E., Merrick, S., Treboux, D., Crowell, J., & Albersheim, L. (2000). Attachment security in infancy and early adulthood : a twenty - year longitudinal study. *Child development*, **71**, 684-689.

Willson, A. E., Shuey, K. M., & Elder, G. H. (2003). Ambivalence in the relationship of adult children to aging parents and in - laws. *Journal of Marriage and Family*, **65**, 1055-1072.

矢幡洋(2000).強すぎる母-娘関係に生じる問題 児童心理, **54**, 28-33.

山田順子(1986).親子関係に関する研究 ―親からの深い精神的受傷の記憶とその親に対す

る評価の関係を中心に― 東京家政学院大学紀要, 26, 89-101.

山田順子(1988). 青年期の母子関係 心理学評論, 31, 88-100.

山田昌弘(1999). パラサイト・シングルの時代 筑摩書房

山田嘉徳(2012). ペア制度を用いた大学ゼミにおける文化的実践の継承過程 教育心理学研究, 60, 1-14.

山岸明子(2000). 女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係 青年心理学研究, 12, 31-46.

山岸明子(2005). 青年期後期と成人期初期に記述された成育史と対人的枠組みの変化との関連 ―7 年間の縦断的研究― 青年心理学研究, 17, 15-26.

山岸明子(2006). 7 年後に再度記述された成育史の分析 ―類似性と異質性の検討― 医療看護研究, 2, 1-10.

山岸明子(2008). 青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係―藤原・伊藤論文へのコメント― 青年心理学研究, 20, 167-170.

山岸明子(2009). 成人期女性の現在の母親認知と青年期の母親認知の関連, 及びその規定要因 青年心理学研究, 21, 53-68.

山岸明子・井森澄江(2008). 母親認知の縦断的変化―青年期から成人期にかけて― 医療看護研究, 4, 20-28.

山根隆宏(2012). 高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ ―人生への意味づけと障害の捉え方との関連― 発達心理学研究, 23, 145-157.

山崎瑞紀・杉村和美・竹尾和子(2002). 青年-両親間の不一致の解決に関する発達的検討(1) ―大学生について― 日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集, 124.

尹(Yoon)鈔喜(2010). 韓国の成人未婚女性の親子関係と自立困難の経験 ―母親・父親・娘のマッチング・データの分析から― お茶の水女子大学グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」Proceedings, 12, 11-19.

資　料

＜研究 1＞, ＜研究 2＞で使用した質問紙　　pp. 178－180.
＜研究 3＞, ＜研究 4＞で使用した質問紙　　pp. 181－184.

親子関係と精神的健康に関する調査

この調査は、親子関係と精神的健康について、お尋ねするものです。
結果は統計的に処理されるので、お一人おひとりの回答が特定されることはありません。
安心してお答えください。

聖徳大学大学院　児童学研究科　　藤原あやの

あなたと、あなたのお母さん（実母）との関係をお尋ねします。あなたの考えに一番近いものの数字を一つ選んで〇印をつけてください。

＜記入例＞
質問項目に対して「あてはまる」と思う場合　５　④　３　２　１

	5 非常にあてはまる	4 あてはまる	3 どちらでもない	2 あてはまらない	1 全くあてはまらない
1 母に期待されると嬉しい	5	4	3	2	1
2 母によく電話やメールをする	5	4	3	2	1
3 あれこれと母の世話をしてあげたい	5	4	3	2	1
4 以前は、母と言い争いが絶えなかった	5	4	3	2	1
5 母に絶対に許せないと思っていることがある	5	4	3	2	1
6 買い物で、物を選ぶのをよく手伝ってもらう	5	4	3	2	1
7 なんでも話ができる	5	4	3	2	1
8 私のことに何でも口を出したがる	5	4	3	2	1
9 昔は、母とよく意見が衝突した	5	4	3	2	1
10 母の人生に共感を覚えるようになった	5	4	3	2	1
11 私のことを何でも知りたがる	5	4	3	2	1
12 何かにつけ、つい頼ってしまう	5	4	3	2	1
13 私の人生のよき理解者だ	5	4	3	2	1
14 何かと母の支えになってあげたい	5	4	3	2	1
15 母の顔色をうかがうことがある	5	4	3	2	1
16 どんな時も、母に見捨てないで欲しい	5	4	3	2	1
17 母のようにはなりたくない	5	4	3	2	1
18 母のできなかった事や夢を私に託そうとする	5	4	3	2	1
19 昔は、母がいやでしかたなかった	5	4	3	2	1
20 母に対して素直になれない	5	4	3	2	1
21 私を手放したがらない	5	4	3	2	1
22 母の思うようにしないと機嫌が悪い	5	4	3	2	1
23 結局、母の言う通りになってしまいやすい	5	4	3	2	1
24 できるだけ母のそばに住みたい（いたい）	5	4	3	2	1
25 一緒にいると心がなごむ	5	4	3	2	1
26 私がやるべき事にまで手を出してくる	5	4	3	2	1
27 昔は、母に口答えばかりしていた	5	4	3	2	1
28 私の本当の気持ちをわかっていない	5	4	3	2	1
29 母に頼りすぎていると思う	5	4	3	2	1
30 自分の意見を押し付けてくる	5	4	3	2	1
31 一緒に買い物に出かけ、物をよく買ってもらう	5	4	3	2	1
32 私の気持ちを理解してくれる	5	4	3	2	1
33 昔は、母と気があわなかった	5	4	3	2	1
34 母の気持ちを理解してあげたい	5	4	3	2	1
35 母は、親の言う事を子ども(私) がきくのは当たり前だと思っている	5	4	3	2	1
36 昔、母とほとんど口をきかない時があった	5	4	3	2	1
37 困っていても、相談する気はない	5	4	3	2	1

あなたの考えや状況に一番近いものの数字を一つ選んで〇印をつけてください。

		6 非常にあてはまる	5 あてはまる	4 ややあてはまる	3 ややあてはまらない	2 あてはまらない	1 全くあてはまらない
1	私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている	6	5	4	3	2	1
2	私は、自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる	6	5	4	3	2	1
3	私は、自分の行動は自分で決める	6	5	4	3	2	1
4	本当に自分のやりたいことが何なのか、見出せない	6	5	4	3	2	1
5	私には、もう新しい経験や知識は必要ないと思う	6	5	4	3	2	1
6	私は、自分の将来に夢を持っている	6	5	4	3	2	1
7	よい面も悪い面も含め自分自身のありのままの姿を受け入れることができる	6	5	4	3	2	1
8	私は、周囲の状況にうまく折り合いをつけながら自分らしく生きていると思う	6	5	4	3	2	1
9	私の人生は、学んだり、変化したり、成長したりする連続した過程である	6	5	4	3	2	1
１０	私は何かを決めるとき、世間からどうみられているかとても気になる	6	5	4	3	2	1
１１	自分の時間を他者と共有するのはうれしいことだと思う	6	5	4	3	2	1
１２	私はいつも生きる目標を持ち続けている	6	5	4	3	2	1
１３	自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい	6	5	4	3	2	1
１４	私は、自分に対して肯定的である	6	5	4	3	2	1
１５	自分らしさや個性を伸ばすために、新たなことに挑戦することは重要だと思う	6	5	4	3	2	1
１６	私はこれまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった	6	5	4	3	2	1
１７	私は、うまく周囲の環境に適応して、自分を生かすことができる	6	5	4	3	2	1
１８	自分の身に降りかかってきたわるいことを、自分の力でうまく切り抜けることができる	6	5	4	3	2	1
１９	私は他者に強く共感できる	6	5	4	3	2	1
２０	習慣にとらわれず、自分自身の考えに基づいて行動している	6	5	4	3	2	1
２１	これからも、私はいろいろな面で成長し続けたいと思う	6	5	4	3	2	1
２２	私の人生は退屈で、興味がわかない	6	5	4	3	2	1
２３	私は、自分自身が好きである	6	5	4	3	2	1
２４	私の今の立場は、様々な状況に折り合いをつけながら、自分で作り上げたものである	6	5	4	3	2	1
２５	私の能力は、もう限界だと思う	6	5	4	3	2	1
２６	私は、自分の性格についてよく悩むことがある	6	5	4	3	2	1
２７	他者との親密な関係を維持するのは、面倒くさいことだと思う	6	5	4	3	2	1
２８	私は現在、目的なしにさまよっているような気がする	6	5	4	3	2	1
２９	自分の行動を決定するとき、社会的に認められるかどうかをまず考える	6	5	4	3	2	1
３０	自分の周りで起こった問題に、柔軟に対応することができる	6	5	4	3	2	1
３１	私は他者といると、愛情や親密さを感じる	6	5	4	3	2	1
３２	新しいことに挑戦して、新たな自分を発見するのは楽しい	6	5	4	3	2	1
３３	状況をよりよくするために、周りに柔軟に対応することができる	6	5	4	3	2	1
３４	何かを判断するとき、社会的な評価よりも自分の価値観を優先する	6	5	4	3	2	1
３５	これ以上、自分自身を高めることはできないと思う	6	5	4	3	2	1
３６	私は、今とは異なる自分になりたいとよく思う	6	5	4	3	2	1
３７	私は、新しい経験を積み重ねるのが、楽しみである	6	5	4	3	2	1
３８	私は自分が生きていることの意味を見出せない	6	5	4	3	2	1
３９	自分がどんな人生を送りたいのか、はっきりしている	6	5	4	3	2	1
４０	重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る	6	5	4	3	2	1
４１	私は、これまでの人生において成し遂げてきたことに、満足している	6	5	4	3	2	1
４２	私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道を見出せない	6	5	4	3	2	1
４３	自分の考え方は、そのときの状況や他の人の意見によって、左右されがちである	6	5	4	3	2	1

次の問いにお答えください

① あなたの年齢は （　　）歳

② あなたの母親（実母）の年齢は （　　）歳

③ 現在、あなたと、あなたの母親(実母）は、

同居している
別居している
死別・離別・その他（　　）

④ 母親と別居の場合、あなたの家と母親の家との距離は

同敷地内
近所（歩きや自転車で15分位までの距離）
自動車・電車・バスなどの公共手段を利用して３０分位までの距離
自動車・電車・バスなどの公共手段を利用して９０分位までの距離
遠距離ではあるが、日帰りが可能な距離
日帰りできない遠方
その他（　　）

⑤ あなたに、子どもが
いる　　・・・・ 子どもの人数 （　　）人

一番下の子どもの年齢は、
（　　）歳（　　）ヵ月
いない

⑥ あなたの現在の職業は

常勤職（派遣を含む）
非常勤職（パート・アルバイト）
自営・家族従業
無職 ・ 専業主婦
大学院生
その他（　　）

⑦ あなたの最終学歴は、

中学校卒業
高校卒業
短大・専門学校卒業（在学中を含む）
大学卒業（在学中を含む）
大学院卒業（在学中を含む）
その他（　　）

調 査 の お 願 い

この調査は、親子関係について、お尋ねするものです。
結果は統計的に処理され、お一人おひとりの回答が特定されることは絶対ありません。
どうぞ、安心して、正直にお答えください

お忙しい中恐れ入りますが、ご協力よろしくお願いいたします。

大正大学大学院人間学研究科　　藤原あやの

あなたに関する以下の質問に、（　）内に回答をご記入ください。
また、選択項目は、あてはまるものに〇をつけてください。

性別　：　1．男性　　2．女性
年齢　：　（　　）歳
学年　：　（　　）年
きょうだいの中でのあなたの位置：　1．長男・長女　　2．ひとり子　　3．その他（　　）
父親の年齢
1．40歳未満　2．40～44歳　3．45～49歳　4．50～54歳　5．55～59歳
6．60～64歳　7．65～69歳　8．70歳以上　9．死別・別離（離婚、等）などで不明
母親の年齢
1．40歳未満　2．40～44歳　3．45～49歳　4．50～54歳　5．55～59歳
6．60～64歳　7．65～69歳　8．70歳以上　9．死別・別離（離婚、等）などで不明

親との同居の有無　：　1．親と同居　　2．親と別居（アパートでの一人暮らしなど）　　3．その他（　　）

現在も過去（青年期）も含めて対立場面が起きた時、あなたは父親に対し、どのように思ったり考えたりしましたか？
あなたの考えに一番近いものの数字をひとつ選んで〇印をつけてください。

	1 あてはまらない	2 あまりあてはまらない	3 どちらでもない	4 ややあてはまる	5 あてはまる
F1. 父は、私に命令ばかりしないでほしい	1	2	3	4	5
F2. 私の事に、父は干渉しないでほしい	1	2	3	4	5
F3. 私は、父は親らしくしっかりしていてほしいと思う	1	2	3	4	5
F4. 私は、父の前ではいい子でいたい	1	2	3	4	5
F5. 父親なら、私の言い分に耳を傾けてくれてもいいと思う	1	2	3	4	5
F6. 私は、父が機嫌を損ねるのではないかと不安になる	1	2	3	4	5
F7. 父の意見を私に押し付けないでほしい	1	2	3	4	5
F8. 父にいやな思いをさせてまで私の意見を通したくはない	1	2	3	4	5
F9. 父の機嫌を損ねたくないので直接私の意見は言わないが、実際は私の思いどおりにしたい	1	2	3	4	5
F10. 父は、ささいな事で私を非難しないでほしい	1	2	3	4	5
F11. 私は、父の常識を疑ってしまう	1	2	3	4	5
F12. 父は私の事を心配してくれているのがわかるので仕方ない	1	2	3	4	5
F13. 理由をろくに聞かずに怒る父の態度は許せないと思う	1	2	3	4	5
F14. 私は、父に失望されたくはないと思う	1	2	3	4	5
F15. 私は、父に納得がいかないときは再び話し合いたい	1	2	3	4	5
F16. 私のすることに父はいちいち口をはさまないでほしい	1	2	3	4	5
F17. 私は、父の意見に従わなければと思う	1	2	3	4	5
F18. 私は、父がつまらない人間に思える	1	2	3	4	5
F19. 父の言うようにしないと父が気を悪くするのではないかと心配だ	1	2	3	4	5
F20. 父の話は表面上聞くだけで、実際には私の思いどおりにしたい	1	2	3	4	5
F21. 父は私をほかの子（友人・きょうだいなど）と比べないでほしい	1	2	3	4	5
F22. 私は、父を裏切ってしまうのではないかと不安になる	1	2	3	4	5
F23. 父は、私のことは放っておいてほしい	1	2	3	4	5
F24. 私は父の見ている前では、表面上だけでも父親の期待にそうように行動したい	1	2	3	4	5
F25. 父の言動は、私にとって重荷に感じる	1	2	3	4	5
F26. 父の前ではいい子を演じ、私の意見や考えを主張しないが、実際には思いどおりにしたい	1	2	3	4	5
F27. 私は、父の価値観に疑問を感じてしまう	1	2	3	4	5
F28. 父は、私にだけきびしくしないでほしい	1	2	3	4	5
F29. 父の意見は、私には関係ないと思う	1	2	3	4	5
F30. 私は、父の考えにそうようにしている	1	2	3	4	5
F31. 私は、父の意見はどうでもいいと思う	1	2	3	4	5
F32. 私は、父の言動に幻滅してしまう	1	2	3	4	5
F33. 私は、父とできるだけ一緒にいたくない	1	2	3	4	5
F34. 父が私を馬鹿にしていると感じる時がある	1	2	3	4	5
F35. 私は、父の言うことを聞いていれば間違いないと思う	1	2	3	4	5

現在も過去（青年期）も含めて 対立場面が起きた時、あなたは母親に対し、どのように思ったり考えたりしましたか？
あなたの考えに一番近いものの数字をひとつ選んで〇印をつけてください。

	1 あてはまらない	2 あまりあてはまらない	3 どちらでもない	4 ややあてはまる	5 あてはまる
M1. 母は、私に命令ばかりしないでほしい	1	2	3	4	5
M2. 私の事に、母は干渉しないでほしい	1	2	3	4	5
M3. 私は、母は親らしくしっかりしていてほしいと思う	1	2	3	4	5
M4. 私は、母の前ではいい子でいたい	1	2	3	4	5
M5. 母親なら、私の言い分に耳を傾けてくれてもいいと思う	1	2	3	4	5
M6. 私は、母が機嫌を損ねるのではないかと不安になる	1	2	3	4	5
M7. 母の意見を私に押し付けないでほしい	1	2	3	4	5
M8. 母にいやな思いをさせてまで私の意見を通したくはない	1	2	3	4	5
M9. 母の機嫌を損ねたくないので直接私の意見は言わないが、実際は私の思いどおりにしたい	1	2	3	4	5
M10. 母は、ささいな事で私を非難しないでほしい	1	2	3	4	5
M11. 私は、母の常識を疑ってしまう	1	2	3	4	5
M12. 母は私の事を心配してくれているのがわかるので仕方ない	1	2	3	4	5
M13. 理由をろくに聞かずに怒る母の態度は許せないと思う	1	2	3	4	5
M14. 私は、母に失望されたくはないと思う	1	2	3	4	5
M15. 私は、母に納得がいかないときは再び話し合いたい	1	2	3	4	5
M16. 私のすることに母はいちいち口をはさまないでほしい	1	2	3	4	5
M17. 私は、母の意見に従わなければと思う	1	2	3	4	5
M18. 私は、母がつまらない人間に思える	1	2	3	4	5
M19. 母の言うようにしないと母が気を悪くするのではないかと心配だ	1	2	3	4	5
M20. 母の話は表面上聞くだけで、実際には私の思いどおりにしたい	1	2	3	4	5
M21. 母は私をほかの子（友人・きょうだいなど）と比べないでほしい	1	2	3	4	5
M22. 私は、母を裏切ってしまうのではないかと不安になる	1	2	3	4	5
M23. 母は、私のことは放っておいてほしい	1	2	3	4	5
M24. 私は母の見ている前では、表面上だけでも母親の期待にそうように行動したい	1	2	3	4	5
M25. 母の言動は、私にとって重荷に感じる	1	2	3	4	5
M26. 母の前ではいい子を演じ、私の意見や考えを主張しないが、実際には 思いどおりにしたい	1	2	3	4	5
M27. 私は、母の価値観に疑問を感じてしまう	1	2	3	4	5
M28. 母は、私にだけきびしくしないでほしい	1	2	3	4	5
M29. 母の意見は、私には関係ないと思う	1	2	3	4	5
M30. 私は、母の考えにそうようにしている	1	2	3	4	5
M31. 私は、母の意見はどうでもいいと思う	1	2	3	4	5
M32. 私は、母の言動に幻滅してしまう	1	2	3	4	5
M33. 私は、母とできるだけ一緒にいたくない	1	2	3	4	5
M34. 母が私を馬鹿にしていると感じる時がある	1	2	3	4	5
M35. 私は、母の言うことを聞いていれば間違いないと思う	1	2	3	4	5

あなたの考えに一番近いものの数字を一つ選んで、
○印をつけてください。

	1 あてはまらない	2 あまりあてはまらない	3 どちらでもない	4 ややあてはまる	5 あてはまる
D1. 親には親の、自分には自分の考えがあると思う	1	2	3	4	5
D2. 自分の本当にやりたいことがわからない	1	2	3	4	5
D3. 自分の人生は自分で切り開いていく	1	2	3	4	5
D4. 自分の意思を親にはっきりという	1	2	3	4	5
D5. 自分の中に色々な否定的感情があることを認めている	1	2	3	4	5
D6. 自分の将来・進路に関し目標を持っている	1	2	3	4	5
D7. 親は私の事を信頼してくれていると思う	1	2	3	4	5
D8. 自分の言ったことに責任を負える	1	2	3	4	5
D9. 私なりの個性を尊重したい	1	2	3	4	5
D10. 親の言うことが絶対に正しいとは限らないと思う	1	2	3	4	5
D11. 自分の事は自分で判断する	1	2	3	4	5
D12. 自分の事を全部は話さないがお互いの関係で必要なことは話す	1	2	3	4	5
D13. 生きることの意味・価値を自分で見いだす	1	2	3	4	5
D14. 親は私の事をよく知っているし、理解してくれている	1	2	3	4	5
D15. 自分の良いところも悪いところもありのまま認めている	1	2	3	4	5
D16. いつまでも親を頼ってはいられないと思う	1	2	3	4	5
D17. 悲しみ・怒りなど自分の感情を自分の中で処理している	1	2	3	4	5
D18. 親と自分とは異なる存在であると思う	1	2	3	4	5
D19. 自分の個性や能力を生かそうとする	1	2	3	4	5
D20. 何でも親に相談するのではなく、自分で考えて行動する	1	2	3	4	5
D21. 精神的に安定しており、一人の人間としてしっかりしている	1	2	3	4	5
D22. 困ったとき、なるべく人の助けを借りずに自分で判断する	1	2	3	4	5

自分の気持ちにもっともよくあてはまる数字を一つ選んで
○印をつけてください。

	1 あてはまらない	2 あまりあてはまらない	3 どちらでもない	4 ややあてはまる	5 あてはまる
S1. 私は自分がだめな人間だと思う	1	2	3	4	5
S2. 私には得意に思うことがない	1	2	3	4	5
S3. 私は自分には見どころがあると思う	1	2	3	4	5
S4. 私は自分が役立たずだと感じる	1	2	3	4	5
S5. 私は自分に対して、前向きの態度をとっている	1	2	3	4	5
S6. 自分を失敗者だと思いがちである	1	2	3	4	5
S7. 私は自分に満足している	1	2	3	4	5
S8. 私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる	1	2	3	4	5
S9. 私は自分が少なくとも他人と同じくらいの価値がある人間だと思う	1	2	3	4	5
S10. もう少し自分を尊敬できたらと思う	1	2	3	4	5

あなたの考えに一番近いものの数字を一つ選んで、○印をつけてください。

A1. 現在、 あなたと父親との関係において、今でもあなたの心のなかで解決できずに、ひきずったままの未解決のことがありますか？

1. ある　　2. ない

A2. 現在、 あなたと母親との関係において、今でもあなたの心のなかで解決できずに、ひきずったままの未解決のことがありますか？

1. ある　　2. ない

A3. あなたのご両親の仲の良さは、あなたからみてどのくらいですか？

1．良好である　　2. やや良好である　　3. あまり良好でない　　4. 良好でない

A4. 現在、あなたと父親との仲の良さは、あなたからみてどのくらいですか？

1．良好である　　2. やや良好である　　3. あまり良好でない　　4. 良好でない

A5. 現在、あなたと母親との仲の良さは、あなたからみてどのくらいですか？

1．良好である　　2. やや良好である　　3. あまり良好でない　　4. 良好でない

謝　辞

本研究を進めるにあたり, 多くの方々にご支援, ご協力, ご助言を頂きましてまことにありがとうございました。特に, 調査にご参加いただいた皆様には厚くお礼申し上げます。

現在, 聖徳大学大学院児童学研究科児童学専攻博士後期課程在籍しておりますが, 論文指導のみならず精神的にも支えていただいている指導教官の聖徳大学大学院児童学研究科相良順子先生に心より感謝いたします。いつも研究室の帰り際に, 先生の「頑張ってね」というひと言に随分救われました。

また, 聖徳大学大学院児童学研究科児童学専攻博士前期課程在籍時に, 修士論文を指導いただきました文京学院大学大学院人間学研究科の伊藤裕子先生には, 本研究を執筆するにあたり, ご指導や貴重なご助言を頂きましたことに深く感謝いたします。伊藤先生は, 心理学の面白さを教えていただいた最初の恩師であり, 先生の厳しい指導に幾度もくじけそうになりながら今まで必死に先生の後姿を追いかけてきました。今回, 私の今までの研究の総まとめとして博士論文を提出することができ本当に感無量であります。また私事の相談にもいつも耳を傾けていただき, 本当にありがとうございます。

そして, 大正大学大学院人間学研究科修士課程在籍時に, 修士論文を指導いただきました大正大学大学院人間学研究科の森岡由起子先生に深く感謝いたします。在籍中, 自身に大事が起こり学業の継続を諦めかけていた私に, 森岡先生が「バックアップします」と快く仰っていただいたからこそ, 大正大学大学院で修士論文を提出することができました。先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

多くの方々のお力添えをいただきながら, これまで研究を続けることができました。今後も引き続き研究を続けていく所存でございます。これからも, ご指導, ご助言をよろしくお願いいたします。

最後に, 九年にもおよぶ長い大学院生活の間, 私を温かく支えてくれた家族に心より感謝します。そして, いつも夜中まで付き合ってくれた 2 匹の愛犬に, ありがとう！

2016 年 5 月